

RESEARCH REPORT

No. 40

MUKOGAWA WOMEN'S UNIVERSITY
INSTITUTE FOR EDUCATION

Contents

The 70th Anniversary Symposium Documents of Mukogawa Gakuin
.....TOMODA, Yasumasa & ANDO, Yoshinori (Eds.)

・ The Strength of Women's Colleges: Developing Women's Potential
.....TAKAHASHI, Yuko

・ Panel Discussion by Alumnae
.....Alumnae of Mukogawa Women's University
and its Junior College Division

An Examination of Various Effects of Women's University Education Applying a Broad
Definition of Human Capital Theory
.....NISHIO, Akiko

Progress Reports on Mukogawa Women's University Center for The Study of Child
Development 2009
.....KAWAI, Masatoshi, NAMBA, Kumiko & SASAKI, Megumi

Achievements of Staffs (2008)

March 2010

武庫川女子大学教育研究所

研究レポート

第40号

Research Report, No.40

Mukogawa Women's University
Institute for Education

〈特集〉女子大学で学ぶとは

武庫川学院創立70周年記念シンポジウム

友 田 泰 正・安 東 由 則 編

・ 女子大学だからできること—女性を伸ばす〈学び〉の環境—

高 橋 裕 子

・ 卒業生によるパネルディスカッション

本 学 卒 業 生

女子の大学進学に伴う諸効果に関する考察
—広義の人的資本論によるアプローチ—

西 尾 亜希子

武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター活動報告

河 合 優 年・難 波 久美子・佐々木 恵

2008年度 研究員の業績および特別研究の経過報告

2010年3月

目 次

創立70周年記念シンポジウム

「女子大学で学ぶとは」の掲載にあたって

安 東 由 則

..... 1

女子大学だからできること—女性を伸ばす〈学び〉の環境—

高 橋 裕 子

はじめに	3
1. 学生時代の経験	3
2. 日本の女性を取り巻く現状	8
3. 津田塾大学の取組：女性研究者支援	16
4. アメリカにおける女性研究者支援：グレース・ホッパー会議の事例	19
5. 女子大学の存在意義：アドリエンヌ・リッチ「魂をもつこと」	23
付属資料 「グレース・ホッパー会議」大会参加記	25

卒業生によるパネルディスカッション

シンポジウムの目的	32
学生時代の学びを振り返って	33
現役学生による学びの振り返り	44
女子大学であるからこそ、武庫川女子大学であるからこそ学び	48
会場からの質問	55
パネルディスカッションからの示唆	57

女子の大学進学に伴う諸効果に関する考察

—広義の人的資本論によるアプローチ—

西 尾 亜希子

1. はじめに	59
2. 女子の大学進学率が低くとどまる理由とそれに伴う問題：先行研究の整理から	60
3. 社会の現況：ジェンダーと学歴による違いと問題	63
4. 人的資本論と教育分野におけるその応用	68
5. 女子の大学進学に伴う諸効果	73
6. むすびに	75

武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター活動報告

河 合 優 年・難 波 久美子・佐々木 恵

I. 子ども発達科学研究センターの成り立ちとその理念について	83
II. 2009年度活動概要	90
III. テクニカル・レポート	111
IV. 研究業績	128

2008年度 研究員の業績および特別研究の経過報告.....131

研究レポート掲載論文総目次（過去10号分）.....135

創立70周年記念シンポジウム

「女子大学で学ぶとは」の掲載にあたって

安 東 由 則（武庫川女子大学教育研究所・研究員）

2009年度は、武庫川学院創立70周年にあたり、その記念事業の一環として「女子大学で学ぶとは」と題するシンポジウムが開催された。

高等教育機関には、これからの男女共同参画社会の進展、さらにはグローバル化とローカル化（地域との連携）、つまり「グローバル化」への対応が、強く求められている。こうした課題に対して、武庫川女子大学はどのように対応していけばよいのか。特に女子の総合教育を目指す武庫川学院として、本学の特色を掘り下げて認識しつつ、どのような方向性でさらなる発展を目指していくのか。この70周年シンポジウムを、これまでの歩みを振り返るとともに、その方向性を検討する機会と位置づけた。

グローバル社会、男女共同参画社会といった動向の中で、今後の女子高等教育のあり方について示唆を得るため、津田塾大学の高橋裕子教授に「女子大学だからできること：女性を伸ばす〈学び〉の環境」と題する基調講演をいただいた。日米の女子高等教育史を専門とされ、海外における女子教育の現状にも造詣が深く、津田塾大学の発展のために東奔西走されている高橋教授からは、自らの体験も交えて、女子教育をさらなる深化のための環境条件について語っていただいた。その中で、「ロール・モデル role model」「エンパワーメント empowerment（励ましと期待）」「同世代・異世代間ネットワーク（繋がり・交流・支え合い）」「メンター mentor（助言者）」などの重要性と可能性を指摘された。さらに講演の最後に紹介された詩人アドリエヌ・リッチによる女子大学の定義は、女子大学、ひいては女子教育に携わる者が女子学生に魂を吹き込む場であり、それが女子教育の基本的方向性を示唆するものであったと考える。

基調講演の後のパネルディスカッションでは、武庫川女子大学の卒業生の中から、様々な学問領域・年代の5名に集まっていただき、本学で学んだ自らの経験を語っていただいた。このディスカッションは、本学がこれまで行ってきた教育を振り返り、その特長と意義を把握するとともに、卒業生それぞれの経験から今後の本学の教育への提言を得ようとして行ったものである。卒業生ならではの観点から、学生時代の経験や今の社会人経験につながる学びを、率直に語っていただいた。

今回のシンポジウムを通して、武庫川女子大学における教育の歩みを振り返り、高橋教授による基調講演から今後の女子教育の方向性や課題について検討する中で、女性の貴重な視点や体験が語られ、様々な意見を聞くことができた。そうした講演や体験を記録として残し、本学のさらなる飛躍に役立てるため、武庫川女子大学教育研究所『研究レポート』に掲載することとした。

『研究レポート』への掲載・編集にあたっては、次のような手続きをとった。

基調講演については、高橋裕子教授が自らの講演原稿に加筆修正をされ、さらに、講演で話されたグレース・ホッパー会議（Grace Hopper Celebration of Women in Computing Conference）の雰囲気が少しでも伝わればということで、2009年の会議に参加された際の様子を、手元にある記録をまとめ直し、「付属資料」として付け加えていただいた。津田塾大学研究支援担当学長特別補佐という要職にあって、とてもお忙しい中、この原稿のために時間をさかれたことに対して、改めて感謝の意を表したい。

卒業生のパネルディスカッションについては、ディスカッションでの発言を書き起こした原稿に、本学教育研究所長の友田泰正と研究員の安東由則が修正を施し、原稿を整えた上でそれをパネリストに送付し、さらなる加筆・修正と確認をとった。原稿の最終確認は、友田と安東の責任において行った。

シンポジウムへの参加ばかりか、シンポジウム後のこのような作業に対しても、貴重な時間を割いてご協力をいただいた高橋裕子教授、本学卒業生の本仲純子氏、木村泰子氏、稲村和子氏、佐守香里氏、伊覇ゆかり氏、さらには二人の学生に心よりお礼を申し上げる次第である。

このシンポジウムの成果をどう活かしていくかは、本学の教職員をはじめ、在学生、卒業生が、この報告への理解をどれだけ深めることができるかにかかっている。多くの方に、活用をお願いしたい。

女子大学だからできること —女性を伸ばす〈学び〉の環境—

The Strength of Women's Colleges : Developing Women's Potential

高 橋 裕 子*

TAKAHASHI, Yuko

目次

はじめに

1. 学生時代の経験
2. 日本の女性を取り巻く現状
3. 津田塾大学の取組：女性研究者支援
4. アメリカにおける女性研究者支援：
グレース・ホッパー会議の事例
5. 女子大学の存在意義：アドリエン
ヌ・リッチ「魂をもつこと」

付属資料 「グレース・ホッパー会議」
大会参加記

* 津田塾大学研究支援担当学長補佐、学芸学部教授

はじめに

武庫川学院の70周年記念シンポジウムに御招待いただきまして、大変光栄に存じます。70周年をお迎えになられたこと、心よりお慶び申し上げます。おめでとうございます。

特に、教育研究所の友田泰正先生、安東由則先生には、「女子大学の存立意義に関する調査研究」をなさっている2005年に、教育研究所にもお招きいただきまして、お話をさせていただいたことがございます。

1. 学生時代の経験

私は、女子大学で4年間を過ごしました。1976年から80年までです。大学院生の時代から、日米の女子大学の創設の歴史を研究テーマに選びまして、これまでずっとそのことについて研究をしています。恐らく私自身の女子大学での4年間が、極めてポジティブな経験であったので、それが理由でそのような研究対象を選択したのかもしれないと思っています。また、1997年から津田塾大学に勤務するようになりました。そして女子大学の場で働く者としてさまざまな経験もしてきております。

女子大学で学んだことがある、女子大学について研究している、女子大学で働いているという、この三つが重なっているというのが私自身の特色だと思います。安東先生は、女子大学に勤務されていても学生として女子大学で学ぶ機会はなかった。私はそこがちょっと違うところなので、女子大学で学んだことがどういう経験であったのか、そのことをお話ししながら、後半部分のパネリストの方々のディスカッションにつながるようにしたいと思っています。

私は、アメリカ合衆国の社会史の中でも、特に家族、教育、女性を中心に研究をしてきましたが、その中でも特に津田梅子と女子英学塾創立の歴史の研究を行ってきました。先ほどご紹介いただきましたとおり、『津田梅子を支えた人びと』の編者を経験したり、また、『津田梅子の社会史』という本を2002年にまとめたことでしたが、そのときには、どのような使命感を持って津田梅子は女子英学塾を建学したのか、アメリカの女性たちの協力をどのようにして得ながら、津田梅子はどのような目的を持って女子英学塾を創立したのか、日本の女性に何を期待して、そして津田梅子自身が自分自身に何を期待してそのようなプロジェクトを立ち上げたのか、そういう視点から私自身は津田梅子と女子英学塾の創立期の研究をしてまいりました。

そのようなわけで、私自身、女子大学には大変興味を持っているわけですが、女子大学は現在、非常に厳しい状況に置かれています。女子大学だけではなくて大学全体が、大変厳しい状況に置かれていますので、女子大学は女子大学として生き残れるのか、そういった問いも立てられているのではないかと思います。

アメリカでもこれと同じ問題を経験してきておりますので、現在の状況についても、私自身はアメリカの女子大学の動向を見ながら、日本の女子大学がこれからどのようにしてその魅力を打ち出していけるのか、また、いくべきなのか、そういったことを、女子大学で働く者として日々考えております。

日本での学生時代

自己紹介的な話になりますけれども、私自身の女子大学の学生としての経験について、幾つかポイントをまとめてみました。私は、自分自身がなぜ研究者になったのかということ、個人的なことも含めて書くようにという課題を以前与えられまして、『キャリアを拓く 女性研究者の歩み』（柏木恵子／国立女性教育会館 女性研究者ネットワーク支援プロジェクト編、ドメス出版、2005年）という本の中に、短いエッセーをまとめたことがございます。そのときに私がつけたタイトルは「ロールモデルに支えられて」というものでした。なぜ私が研究者になったのかということを考えるときに、私にとって女子大学がどういう意味を持っていたか、女子大学で過ごした4年間の大きさ、そのインパクトの大きさ、それをいまだに大きなものとして、強いものとして考えているからです。その中から少し私の体験をご紹介します。

大学に入ったとき、私は決してまじめな学生ではありませんでした。津田塾大学には実は「つだつだしい」という津田塾生だけが使う言葉がありまして、「あの人、つだつだしいね」と言うと、何かまじめにがりがりと勉強をして、先生の言うことはきちんとこなして、一直線に進むという、そういうのが「つだつだしい」という意味です。しかし、私は全然そういう意味では「つだつだしく」なかったのです。勉学に関して、1年生のころにはそれほど強い興味・関心も持てなかった、そんな学生でした。

それで、早くいろいろな社会を見てみたいと思いまして、大学1年生の夏休みに、ある大きな会社でアルバイトをする経験をしました。今の言葉で言えばインターンシップのような経験だったのですが、1976年という時代に、大企業のいわゆるOLのような経験をすることができたわけです。高校を卒業して就職したばかりの中学時代の友達が、緊急に探しているからやってみないかとお話をくださったので、すぐに夏休みの最後の試験が終わった翌日ぐらいに面接をしてもらって、その会社で2ヶ月弱働くことになりました。

そこで初めて、大学や短大を卒業した女性たちが職場でどのような経験をしているのか学ばせてもらいました。その中でもとくに女性が、男性たちとは全く異なる位置で仕事をしていることを目の当たりにしました。私自身も、その会社の制服を着て、朝早くお茶出しをしたり、さまざまなコピーをとったり、そういった仕事をしたわけです。それは、男女雇用機会均等法の約10年前、1970年代の半ばでした。そこで出会った4年制大学を卒業した女性たちも、数年で結婚してやめていかれる。その結婚してやめていかれる方のパーティーなどにも一緒に参加させていただきました。

そんな経験がありましたので、私自身は、一体、自分は卒業してからどのようなのだろうか、何をしたいのだろうかということを、その体験を通して考えるようになったのです。

2年生の夏休みにもう一度同じ職場に呼んでいただいて、その会社で働いたのですけれども、そんな経験をふまえて津田塾大学に戻って授業を受けるようになりますと、大学が非常に異なる風景に見えてきたわけです。なぜならば、最初に私の大学には女性の教員がこんな多くいたのだということに気がつきました。会社では、出会うことのできた部長や課長といった管理職者は全員男性で、女性たちは一生懸命お茶を出したり、コピーをとったり、小払いの計算をしたりということばかりで、私よりもずっと年上の女性もほぼ同じようなことをされていました。私は大学に戻って、ここには違う風景がある、女性たちの違うライフスタイルがあるということを本当に実感いたしました。

ロールモデルへの気づき

当時20歳前後の私自身が、アルバイトを通して、男女雇用機会均等法のできる前の時代に、女性が企業において実際にどのように扱われているのかを知ることができたことは、私にとって非常に大きなことでした。女性が働くということを考えたとき、大学で教えている女性の先生たちは、一体この大学の職業と家庭生活をどのようにしてバランスをとっているのだろうと考えました。そして助教授、教授となるための研究業績を蓄積してこられた先生たちは、どのように時間のバランスをとって研究、教育、そしてお子さんを育てられたのだろうか。あるいは専任講師の先生が小さなお子さんのお話をされたりしますと、この先生はどのようにして子どもを育てているのかと想像しました。つまり、フルタイムで大学に教えに来ている間に、お子さんはどのようにされているのだろうかということを、20歳前後の学生のまなざしで、女性の先生たちを、そのような好奇心を持って眺めるようになりました。先生たちが留学をしたり、夏休みに研究で海外に行かれたりした話を伺うと、どのようにしてこのようにいろいろなことを組み合わせてやっていらっしゃるのだろうか。そういったことに私自身、学生として特別な関心を持つようになったわけです。

私の学生時代には、津田塾大学には女性学と銘打った科目はまだ開講はされていませんでした。しかし、授業の中で女性を主体とみなして、女性の人生や生き方を取り上げるような授業に数多く出会うことができました。そしてまた、クラスメートを含めて私たち自身が、女性教員の個人的な生活にも関心を持ったわけですが、そのような関心を先生たちが積極的に共有してくださったことを、とても印象深く覚えております。そして、教員ばかりではなく事務職員の方々が、私たち女子学生が将来の職業を主体的に選択して切り拓いていくようにという、そういう励ましを真剣に与えてくださったことを今でも思い出します。

ですから、私はそういう女性の教員たちに、あるいは職員に、凛とした女性の魅力、あるいは中高年女性の魅力を感じたのです。いいかえれば、19歳、20歳ぐらいの女子学生の視点から40、50、60代の女性たちの魅力をいわば「発見」したわけです。

その当時のメディアは、女性たちの魅力は、10代あるいは20代の女性たちを中心に描いておりまして、中高年になって、それまで積み重ねてきた仕事を花開かせて、魅力的な姿になられた方々を、頻繁には紹介していませんでした。私は大学で、そのような女性たちの魅力というか、美しさというものに会うことができました。大学教員が女性であるということは、極めて普通のことで、そのことに何の違和感もない、そのような学びの環境が、私の女子大学の経験の中にはありました。

そのようなことも関係して、先生たちの個人的なお話の一つひとつインスピレーションとなって、私たち学生に励ましを与えてくれました。その当時、私自身は、そういう現象を先生たちが「ロールモデル」になっているという言葉でとらえたことはありませんでした。しかしとても若かった自分が、そのような中高年の女性たちの姿に大きな影響を受けていたことを、今でも私自身は鮮明に思い出します。

このような経験を通して、私はアメリカ研究の分野に進み、たくさんの本を読んで、自分自身で考えることの重要性に目覚めていきました。2回目の夏休みを過ぎた後の2年生の後期くらいからは、急に本を一生懸命読んだり図書館に通ったりするようになり、いわば「変身」したわけです。

その後、大学の3年生くらいから、大学院に進んでもっと勉強してみたいと思うようになりました。大学院で研究するということはどういうことなのだろうか、あるいは留学するということがどういうことなのだろうか。大学院に行くことが今ほど一般的ではなかった時代に、あるいは留学ももっと困難であった時代に、私はそれを普通のことのように行っていた女性たちに囲まれていました。それゆえに私自身もまずはチャレンジしてみようかと恐れずに考えることができたわけです。

津田塾大学では、教職員が、女性である学生に本当に真剣に向き合って実力をつけていくことにとても熱心です。そして、女性の教員も男性の教員も学生に対して励ましと期待をかけてくれ、それが津田の一つのカルチャーになっていて、それが知らないうちに身体にしみ込むという経験を私はしたと思います。

津田塾大学では、英語では“Empowering Women since 1900: Tsuda”と、日本語では「百年女性を勇気づけてきた」というキャッチフレーズを100周年のころから使っています。女性を勇気づける、エンパワーするというこの言葉は、私が過ごした津田塾大学での4年間の経験を言い当てています。こうした環境が18歳から22歳までの4年間に、私のアカデミックな基盤づくりに大きな影響を及ぼしたと思っています。これが、私自身の津田塾大学ですごした学生時代の個人的な思い出です。これが余りにもポジティブで、私

は女子大学を研究するようになり、さらにまたそこで働くようにもなったのだと思います。

その後、私は国立大学の大学院に進学しました。そこでは、女性の先生からは1人もお習いすることはありませんでした。私が所属した研究科には唯一1人、津田塾大学出身の技官の女性がいらただけで、それ以外は全員男性でした。大学というところは通常はこういうところなのかと、1980年でしたけれども、そのように思ったものです。

アメリカでの体験

それから、1981年にアメリカに行きました。そこは州立大学でしたが、到着間もなく受けたオリエンテーションで、「私はディレクターです」「私はこの部署の責任者です」と、女性の管理職者が次々に登場してこられ、随分、日本の国立大学と違う、というある種の衝撃を受けました。私の日本での指導教授の先生たちからは、戦後間もなくアメリカに留学されて、蛇口をひねったらお湯が出て、驚愕したという話を聞いたことがあります。私の世代は、最初にアメリカに行って一番何に圧倒されたかということ、次々に現れてくる女性の管理職者や責任ある立場にある女性の多さではないかと思います。というのは、それがあまりにも日本の国立大学の状況とかけ離れていたからです。女性教員比率の高さ、大学アドミニストレーションの女性管理職者の多さに、目をみはったのを今でも覚えています。

私は80年代のほとんどを米国の共学大学で過ごしましたが、その時代の女性学や女性史、ジェンダー研究を学び研究する大学院生や女性教員たちとよいネットワークをつくることができました。そのように過ごした時間も、もちろん、私が研究者として生きていく基盤の形成に大きくかかわったと思います。

彼女たちは、女性同士がどのようにして厳しい共学大学の中で生きていくのか、サバイブ(survive)していくのか、そのことに非常に自覚的でした。女性たちが支え合って、ネットワークづくりを自覚的に行って、そして実力を発揮していく。そのノウハウを共有しようとする姿勢に、私は大変刺激を受けました。同時に、伝統的な結婚以外のライフスタイル、選択肢の多様性を目の当たりにして、個人的なニーズと職業の組み合わせ方に、数多くのやり方があることを体験的に学びました。ここまでが、私自身が体験した学部学生、大学院生時代のお話です。その後、専任教員として、1990年から桜美林大学の国際学部勤務し、1997年から津田塾大学に勤務しております。

以上が、私のロールモデルに支えられた学部学生・大学院生時代の経験についてですが、私がどうしてこれほどまでにロールモデルの存在に敏感であり関心があるのか、そしてどこに行ってもなぜ私がロールモデルを探そうとするのか。そういう問いを自分自身に立てたこともあります。これには、一つの明快な回答があるのではないかと思います。それだけ日本の女性が置かれている状況が厳しいということだと私は思っています。

2. 日本の女性を取り巻く現状

そこで、皆様と平成21年版の内閣府発行の『男女共同参画白書』に所収されているデータを見ながら、一体、日本の女性はどういうところに置かれているのか、とりわけ高等教育の状況はどうなっているのかをご一緒に考えてみたいと思います。

まず、日本の豊かさを示す人間開発指数を見てみたいと思います。この指数は、国連開発計画の『人間開発報告書』によるものです。例えばある国では生まれてきたら平均寿命はどれくらいか、また、識字率はどれくらいか、さらに就学率はどれくらいかについて、179カ国が調査対象となっています。

この数字を見ると、日本は世界と比べて豊かであることが分かります。日本は、先ほど言った観点から国際比較をしますと、8位（2008年の報告書によれば）についています。（ただし、09年には182カ国中10位）。上位の国を列挙しますと、アイスランド1位、ノルウェー2位、その次カナダ、オーストラリア、アイルランド、オランダ、スウェーデン、日本、ルクセンブルグ、スイスと続いています。

日本におけるジェンダー・ギャップ

ところが次の、女性が社会の中で意思決定に参画できているかどうかを示すジェンダー・エンパワーメント指数では、1位スウェーデン、2位ノルウェー、3位フィンランド、そしてデンマーク、アイスランド、オランダ、オーストラリア、ドイツ、ベルギー、スイスと続いて、日本はなんと58位です。

さらにこれを男女格差の視点から捉えたジェンダー・ギャップ指数では、日本はもっともっと下がって、1位のノルウェーから、フィンランド、スウェーデン、アイスランドと続いて、日本はなんと98位です。

この98位というのは、私もずっと日本で生活していると実感しにくくなるわけですが、長く海外で暮らして久しぶりに帰ってくると、このことを強く実感します。テレビのニュースを見ていても、会議に出たり、新聞・雑誌を読んだり、その他何をするときでも、留学生活から帰ってきたときには、常に違和感を覚えたものです。

なぜこのような開きがあるのでしょうか。日本の女性の地位は、男女共同参画局発行の『共同参画』という雑誌の平成21年1月号に掲載されているのですが、2008年の日本のジェンダー・ギャップ指数値は、130カ国中98位です。「特に、政治分野及び経済分野における男女差が大きいため、このような低い順位になっています」ということです。

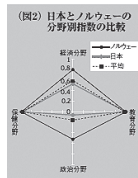
例えば、1位のノルウェーと分野別指数の比較をしてみたいと思います（図1）。上が経済分野で、下が政治分野です。そして右側が教育分野、左側が保健分野です。

日本はグレーの線で一番低い線です。大きい外枠がノルウェーです。1に近ければ近いほどギャップが少ないということです。日本の女性は、保健と教育分野では基本的な機会は得ていますが、経済分野と政治分野において、格差が大きく、社会に影響を与える分野

(図1) ジェンダー・ギャップ指数ランキング

順位	国名	値	順位	国名	値	順位	国名	値
1	ノルウェー	0.839	35	エクアドル	0.791	69	チェコ	0.670
2	フィンランド	0.805	36	ブルガリア	0.707	70	ルーマニア	0.676
3	スウェーデン	0.839	37	エストニア	0.708	71	ニカラガ	0.674
4	アイスランド	0.809	38	タンザニア	0.708	72	ドミニカ国	0.674
5	ニュージーランド	0.789	39	ボリビア	0.709	73	ブラジル	0.677
6	フィリピン	0.768	40	モンゴル	0.709	74	マダガスカル	0.676
7	デンマーク	0.738	41	キルギス	0.705	75	ギニア	0.677
8	アイルランド	0.718	42	ロシア	0.694	76	キプロス	0.664
9	オランダ	0.759	43	ウガンダ	0.698	77	ガーナ	0.670
10	ラトビア	0.797	44	ジャマイカ	0.690	78	アルメニア	0.667
11	ドイツ	0.794	45	カザフスタン	0.695	79	スリナム	0.664
12	スリランカ	0.701	46	クロアチア	0.692	80	ボスニア	0.665
13	韓国	0.766	47	パプアニューギニア	0.690	81	マラウイ	0.664
14	スイス	0.760	48	ペルー	0.695	82	グアテマラ	0.664
15	フランス	0.741	49	ポーランド	0.691	83	マルタ	0.664
16	レソト	0.700	50	コロンビア	0.694	84	シンガポール	0.665
17	スペイン	0.741	51	スロベニア	0.697	85	カンボジア	0.662
18	モザンビーク	0.766	52	タイ	0.697	86	ベリーズ	0.661
19	トリニダード・トバゴ	0.715	53	マダガスカル	0.694	87	アルバニア	0.659
20	モリタニア	0.704	54	リビア	0.692	88	ケニア	0.667
21	オーストラリア	0.741	55	ウズベキスタン	0.690	89	タジキスタン	0.641
22	南アフリカ	0.720	56	イスラエル	0.690	90	パナマ	0.651
23	リトアニア	0.722	57	中国	0.679	91	モルディブ	0.650
24	アルゼンチン	0.709	58	エルサルバドル	0.685	92	ジンバブエ	0.648
25	キューバ	0.705	59	ベネズエラ	0.685	93	インドネシア	0.647
26	パナマ	0.718	60	ハンガリー	0.697	94	カンボジア	0.649
27	オーストリア	0.729	61	アゼルバイジャン	0.685	95	モリタニア	0.646
28	ベネチア	0.703	62	ウクライナ	0.685	96	スロバキア	0.642
29	オーストリア	0.729	63	ボツワナ	0.689	97	メキシコ	0.641
30	ナミビア	0.741	64	スロバキア	0.682	98	日本	0.643
31	カナダ	0.736	65	チリ	0.688	99	ブルキナ・ファソ	0.632
32	コスタリカ	0.711	66	ルクセンブルグ	0.682	100	パラグアイ	0.639
33	ペルー	0.709	67	イタリア	0.688			
34	パナマ	0.705	68	ベトナム	0.678			

(130カ国)



(注) 経済分野：労働力の男女比、製品の労働における賃金の男女格差、決定権の両者の男女比、管理・技術職の男女比
 教育分野：識字率の男女比、初等教育識字率の男女比、中等教育識字率の男女比、高等教育識字率の男女比
 政治分野：国会議員の男女比、総選挙の男女比、最近50年における国政選挙の在任年数の男女比
 保健分野：平均寿命の男女比、出生時比

図1 ジェンダー・ギャップ指数
 男女共同参画局『共同参画』平成21年1月号より

で意思決定に参画できている割合が極めて低いのです。

その理由を考えてみなくてはなりません。なぜ人間開発指数、つまり健康な生活が守られ、教育を受ける点では男性と同じようにできているのに、とりわけ政治・経済の分野で意思決定に参画できる割合が男女間でこれほどの格差が出るのか。このことについて、考えなくてはならないと思います。

女性の労働力率

次は、「女性の年齢階級別労働力率の推移」です(図2)。

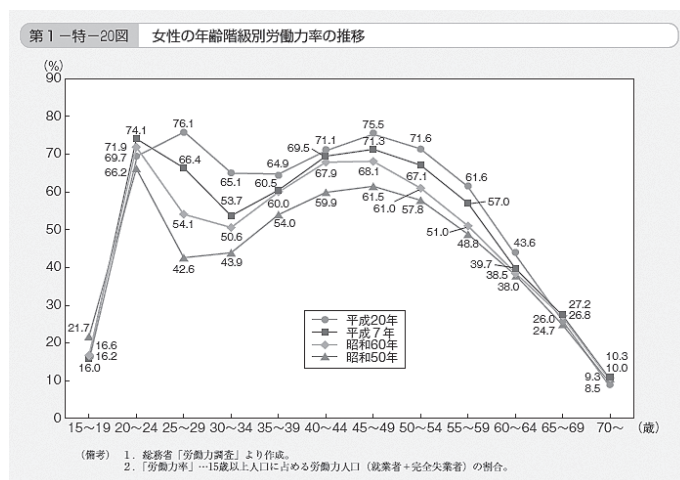


図2 「女性の年齢階級別労働力率の推移」
 『男女共同参画白書』平成21年版より

このM字型カーブは、皆さんも何度もごらんになったことがあると思います。私が大学1年生のときに体験した大企業の状況は、まさにこのカーブにあらわれていると思います。M字型の底の深い部分が、昭和50（1975）年の図です。私は、76年に大学に入りましたので、その当時は底への急カーブの部分が20歳から30歳です。この年齢層で激しい勢いで女性の労働力率が下がる時代でした。20歳から29歳くらいまでの間に正社員であったとしても、そこで女性は中断してしまうという状況があったわけです。

その後、現在に近づくにつれて、M字型の底が上がってきて、底のポイントが右側にずれていっています。晩婚化と晩産化がここに表わされています。しかし、このM字型の底が上がっているから状況はよくなっているといえるのか。結論をいうと、私が大学生だった時期と2009年とを比べて、それほどよくなっているはいないわけです。もちろん少しはよくなっているのですが、極めてゆっくりゆっくりとよくなっている。だから、あれほどジェンダー・エンパワーメント指数やジェンダー・ギャップ指数が低いのです。そこで「女性の年齢階級別労働力率（国際比較）」を見てみましょう（図3）。

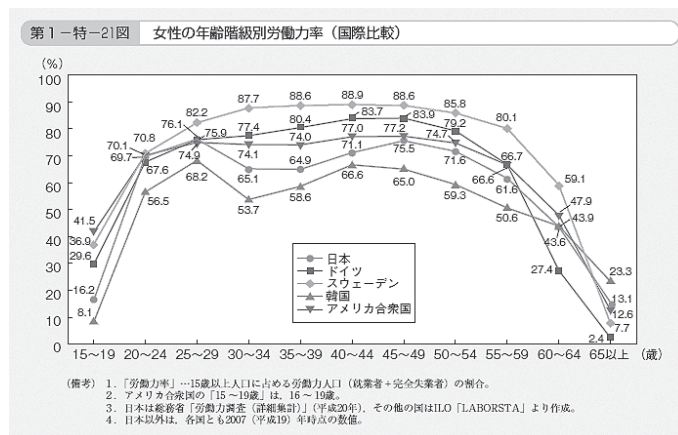


図3 「女性の年齢階級別労働力率（国際比較）」
『男女共同参画白書』平成21年版より

日本や韓国には、図のようにM字型の底がありますが、スウェーデンやドイツ、アメリカ合衆国は台形の形になっています。ピンクの線が日本で、一番下の紫の線が韓国です。その次がアメリカ合衆国、ドイツ、スウェーデンと続いており、スウェーデンは台形に近い形になっています。

教育機関における女性比率

高等教育に係るデータも、見ていただきたいと思います。「女性研究者数及び研究者に占める女性の割合の推移」です（図4）。

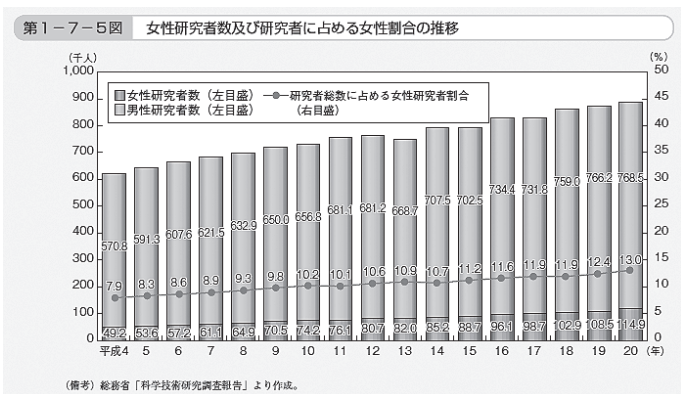


図4 「女性研究者数及び研究者に占める女性割合の推移」
『男女共同参画白書』平成21年版より

これを見ると、女性研究者数の占める割合はきわめてゆっくりとしか伸びていません。本日のパネリストの中で、お一人、理系の研究者の先生がいらっしゃいますから、なぜ日本は男女雇用機会均等法ができた後も、女性研究者の割合がこれほど緩やかにしか伸びないのか、伺ってみたいと思います。現在は13パーセントという数字が出ていますが、この割合を伸ばすために、女子大学には何ができるのか、ということを考えなくてはなりません。研究者に占める女性割合の国際比較を見ても、日本は非常に厳しい状況にあります(図5)。

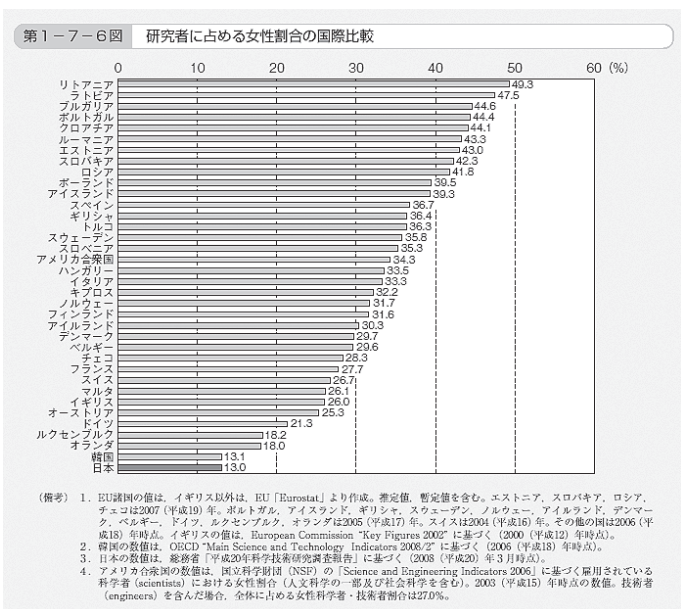


図5 「研究者に占める女性割合の国際比較」
『男女共同参画白書』平成21年版より

次は、「大学教員における分野別女性割合」です（図6）。

研究分野は人文科学、社会科学、理学、工学、農学、保健、商船、家政、教育、芸術と分類されています。それぞれの分類の中で一番右側の背の高い棒グラフが助手です。その次、右から2番目の棒が助教です。その次が講師、それから准教授、教授となっています。家政では、女性の教授は30.3%までに届いておりませんが、一番低い、例えば農学は1.9%、工学は2.2%となっています。社会科学でも11.1%、人文科学でも19.4%にとどまっています。そしてどの分野においても職位が上がれば上がるほど、女性比率が小さくなっています。つまり女性は、大学においてどの分野においても低い階層に沈殿している状態が今も続いているということです。

本日のパネリストの方はご所属の大学の工学部（今は工学部と言わないそうですが）で、唯一の女性教授でいらっしゃるそうですので、そういう環境の中でどのようにして女性が生き延びてこられたのか。また、女子大学は、このような社会を生き抜いていくために女性にどのような力をつけることができるのか、また、つけなければならないのか。これがとても重要なポイントだと思います。例えば、教育といった分野でも、女性の助手はこれほど多いのに、その助手がなかなか上のポストに上がっていけない状態になっています。

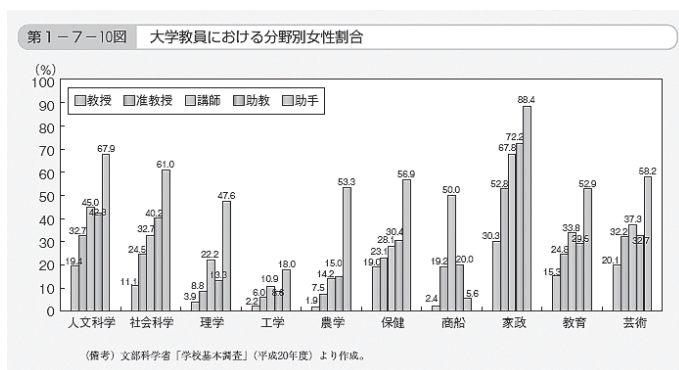


図6 「大学教員における分野別女性割合」
『男女共同参画白書』平成21年版より

次の「本務教員総数に占める女性の割合」をご覧ください（図7）。本日のパネリストとして小学校の校長先生が来てくださっていますので、小学校はどのようになっているのかお聞きしたいと思います。

この図を見ますと、女性の割合は教諭で65.2%に達しているのに、校長になると17.8%です。中学校になると、さらに下がりますが、女性校長の割合は中学校と高等学校はほぼ同じです。そして大学・大学院でも、助手は51.4%ですが、講師は27.1%、准教授、教授、とだんだん少なくなり、学長にいたっては8.1%です。短大でも同じ現象が起きてい

ます。職位の低いところには女性が多く、職位が上がれば上がるほど女性が見えなくなってくるということです。

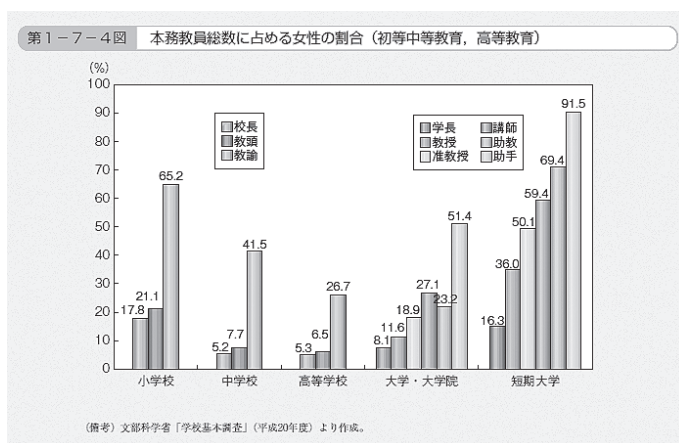


図7 「本務教員総数に占める女性割合」
『男女共同参画白書』平成21年版より

管理職に占める女性比率

日本の大学のホームページを見ると、私は必ずチェックするところがあります。理事に女性は何人いるか、1人でも入れているかどうか、それを必ず見るようにしています。そして、いわゆる大学執行部の中に女性は何人くらい入っているか。私自身は、学長補佐として、広報・学生担当を2年、学務担当を2年勤めました。現在は、研究支援担当学長特別補佐となりましたので、日常の学長室会議には出ておりませんが、研究支援担当ということで大型補助金による取組を束ねる立場になりました。津田塾大学の場合は現在、学長が女性で、広報・学生担当学長補佐が女性です。事務局長も女性です。

大学執行部の中にどれくらい女性が入っているかということが、その大学がどれほど女性を真剣に育てる意思を持っているかということの指標にもなるのではないかと思います。国立の大きな大学を見ましても、男女共同参画担当として女性が理事や副学長になっている場合がありますが、複数置いているところはそれほど多くないのが現状です。

アメリカ合衆国では、アイビーリーグの大学が女性の学長を輩出してきています。ハーバード大学も女性の学長を出しました。初めての女性学長となった方の学部教育はプリンマー大学という女子大学で受けたということです。日本も、例えば東京大学や京都大学や早稲田大学や慶應義塾大学がいつ女性の学長を輩出できるのか、あるいはなぜ輩出できないのか、そういうことが世界からも注目されていると思います。今のところ、白書が示している状況を見ますと、そう簡単なことではないだろうという印象です。

「役職別管理職に占める女性割合の推移」についても、同じような現象が見られます

(図8)。その伸び方は極めて緩慢であり、平成20年になってもその状況が続いているということです。

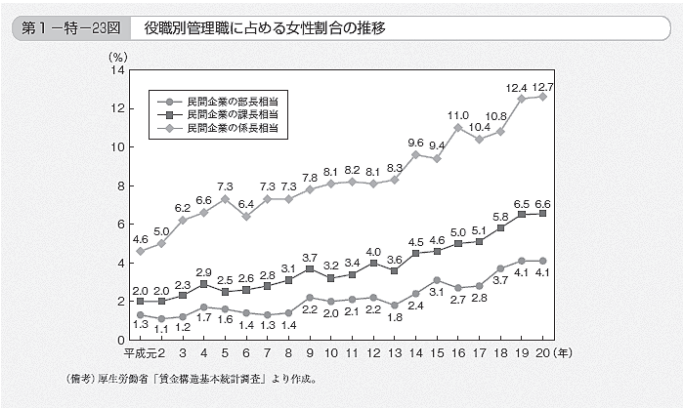


図8 「役職別管理職に占める女性割合の推移」
『男女共同参画白書』平成21年版より

次は、「各分野における『指導的地位』に女性が占める女性の割合（10年前との比較）」です（図9）。

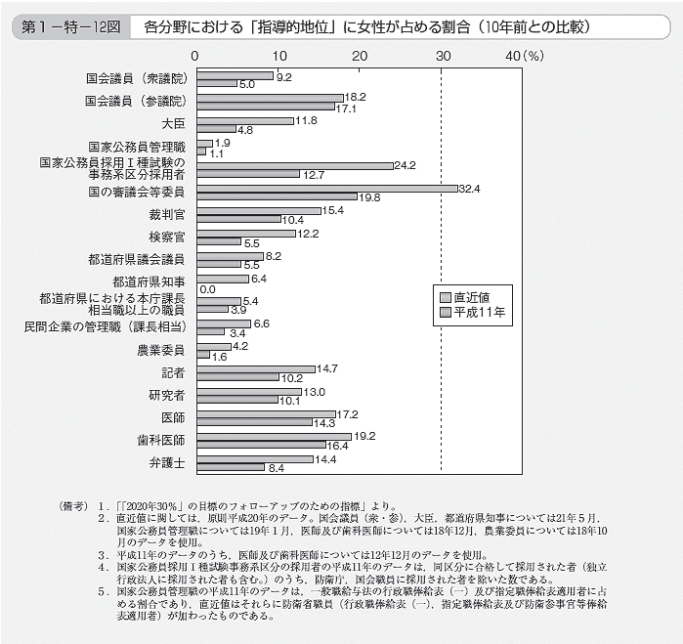


図9 「指導的地位」に女性が占める割合
『男女共同参画白書』平成21年版より

この図には反映されていませんが、まず国会議員では、この夏の選挙で衆議院で随分女性が増えたようですが、それでもそんなに多いわけではありません。飛躍的に伸びているのは審議会の委員です。しかしその任期は短く、3割程度女性を入れたいというのであれば、それは単発的に、比較的容易に実現できることです。そのほかの部門に関しては、女性はまだまだ、平成11年と比べて、10年たった今も、決して飛躍的に伸びているという事態にはなっていないようです。

性別の給与差と雇用者割合

給与の格差もはっきりしています(図10)。男性の一般労働者を100とした場合、女性の一般労働者は、平成20年のところでもうやく69.0パーセントになっています。次の青の線は男性短時間労働者の給与水準です。男性は53.3パーセント、女性の場合は48.5パーセントで、これくらい未だに給与水準に大きな格差がついているということが分かります。

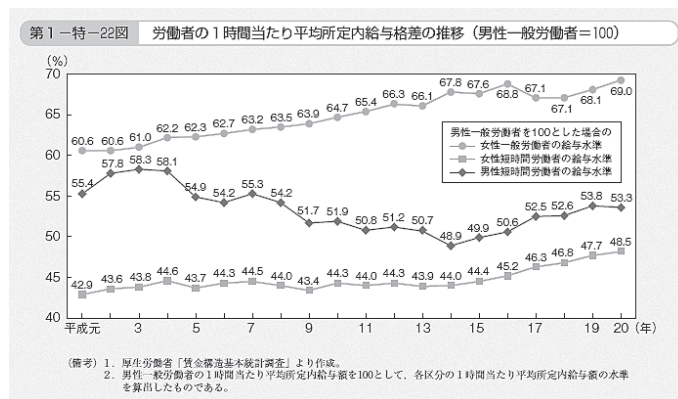


図10 給与格差の推移
『男女共同参画白書』平成21年版より

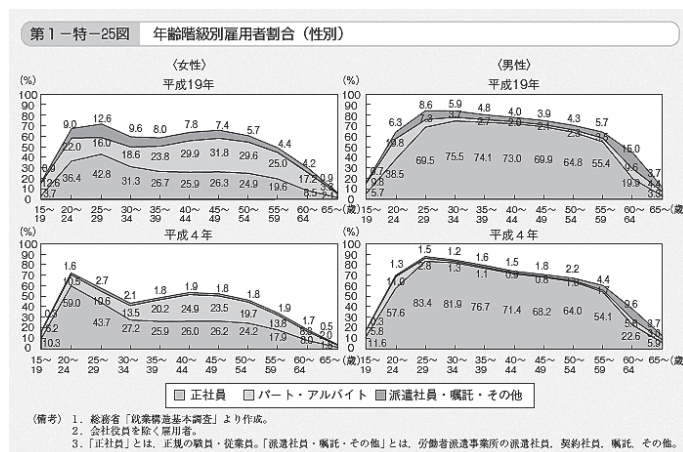


図11 年齢階級別雇用者割合
『男女共同参画白書』平成21年版より

「年齢階級別雇用者割合」を見てみても、M字型カーブの底が上がってきているから喜べるのかというと、必ずしもそうではないことがわかります（図11）。

正規雇用はそれほど増えていないようです。むしろ、パート・アルバイトの部分が大きくなっていて、派遣社員・嘱託という形での非正規雇用の割合が増えてきているという状態です。男性と比べても、正規の労働と非正規の労働の形態に大きな差がついているために、M字型カーブの底が上昇していても、中身をよく見ると、女性は大変厳しい状況に置かれていることがわかります。

3. 津田塾大学の取組：女性研究者支援

このような女性が置かれた厳しい状況を、とりわけ、高等教育における女性の状況を少しでも改善しなくてはならないということで、津田塾大学は、女性研究者支援の取組、具体的には「世代連携」と「理文融合」ということを2本の柱に据えて、女性研究者支援センターを設置いたしました。

これは、文部科学省の「科学技術振興調整費」の「女性研究者支援モデル育成」事業として補助金を得て、展開しているセンターです。ここに七つの目標を掲げてあります（図12）。

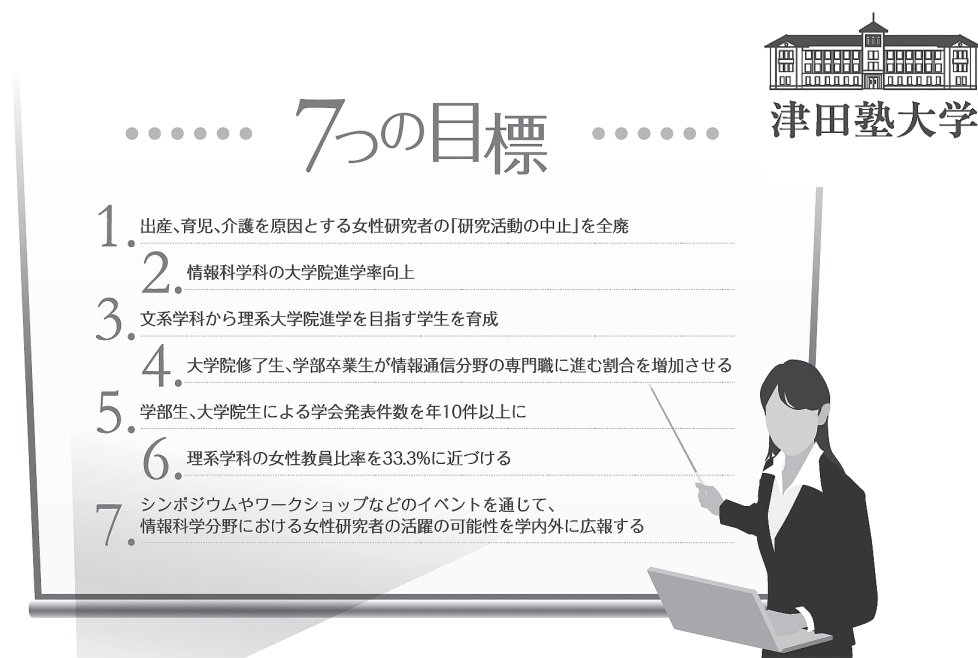


図12 女性研究者支援センター（津田塾大）の「7つの目標」

津田塾大学は1900年に創立されて以来、英語教育に重点を置いてきたわけですが、自立する女性の育成を建学の理念の一つとして据えてまいりました。創立当初より、「オールラウンド・ウーマン」、オールラウンドな女性という表現を用いて、幅広い教養を持った女性を育てる、リベラルアーツ教育を重視してまいりました。

理系の学科は、1943年に理科という学科が初めて設置されまして、それ以来、数学教員や技術系専門職につく卒業生を輩出してきました。武庫川女子大学のように、たくさんの理系学科はございません。たった二つしかないのです。理系分野は、数学科と情報科学科、これのみです。大学院に理学研究科が一つあります。他大学と比べて極めて小規模ではありますが、その歴史は長く、女性のための理系教育には早くから着手してまいりました。

この取組では、こういった小規模なリベラルアーツ大学である本学の特色を生かして、「世代連携」と、私たちはあえて「理文融合」という言葉を使っておりますが、これを通じて、女性研究者の支援・育成を進めていくことを目指しております。

本取組の核となる女性研究者支援ということは、先述のように厳しい状況にあるので、文部科学省も女性研究者をもっと増やすべきだということで2006年から本事業を開始して、多くの国立大学がこれに採択され、また、私立の大学もそれに続いて採択されるようになりました。女性研究者支援では、女性研究者の研究に必要な環境の整備、特に人的な支援体制を整備するということを念頭に置いております。

さまざまな実施項目の中で、私たちが一番重視していますのはメンター（mentor）制度です。つまり、メンタリングと、研究支援員の導入です。七つの目標をここに掲げておりますので、ご紹介します。

1. 出産・育児・介護を原因とする女性研究者の「研究活動の中止」を全廃する（不本意に研究を断念しなくてはならないようなケースをなくさなくてはならないということ）
2. 情報科学科の大学院進学率向上
（男女格差のある理系の大学院進学率を何とかしていかなくてはいけないということ）
3. 文系学科から理系大学院進学を目指す学生を育成（理系と文系が融合する分野の大学院にもっと学生を送り込むということ）
4. 大学院修了生、学部卒業生が情報通信分野の専門職に進む割合を増加させる
5. 学部生、大学院生による学会発表件数を年10件以上に
6. 理系学科の女性教員比率を33.3%に近づける（全体では、津田塾大学の女性教員比率は49.数%で、50%に近いのですが、理系はまだ33.3%に近づいておりませんので、それに近づけるということ）
7. シンポジウムやワークショップなどのイベントを通じて、情報科学分野における女性研究者の活躍の可能性を学内外に広報する

実施体制図に示したような形で、各世代間連携のプログラムを実施しております（図13）。これは、必ずしも理系の研究者だけではなくて、ほかの分野にも応用できることだと思います（図14）。

さまざまな世代の人たちが連携できるようにし、インターンシップを行ったりメンターになったり、大学の学部学生や大学院生は高校生のイベントを補助することで、ロールモデルになることも経験する。このようにして、中高生から研究者までの有機的なつながりを生んでいきたいと思っております。



図13 世代連携・理文融合による女性研究者支援の実地体制

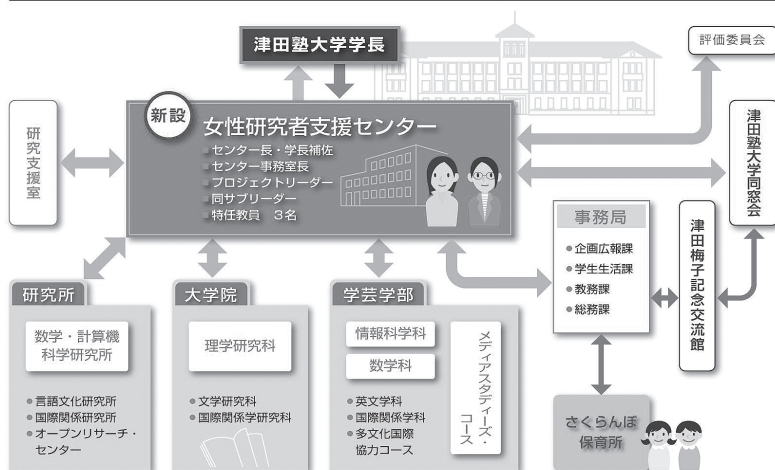
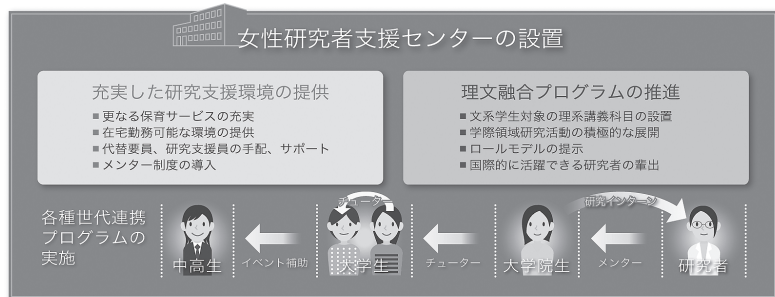


図14 世代連携・理文融合による女性研究者支援の実地内容

ミッションステートメント

- 出産等を原因とする女性研究者の不本意な「研究活動の中断または中止」を廃止する。
- 大学院進学率を情報科学科で25%にする。
- 文系学科から理系及び理文融合分野の大学院進学を目指す学生を毎年5人育成する。
- 情報通信分野の専門職に進む割合を16.3%程度までに増加させる。
- 学部生、大学院生による学会発表件数を年10件以上にする。
- 理系学科の女性教員比率を33.3%に近づける。
- シンポジウム（年2回）、ワークショップ（年1回）を実施する。



4. アメリカにおける女性研究者支援：グレース・ホッパー会議の事例

アニータ・ボーグとグレース・ホッパー会議

私どもは、昨年度、キックオフシンポジウムとして「テクノロジー分野で働く女性研究者支援を考える」というタイトルで、日米の事例を中心に比較検討しながら議論しました。今年はフィンランドとドイツからゲスト・スピーカーの講師を招聘して、先進的な取組から学ぶことにしました。昨年度、アメリカ合衆国のシリコンバレーから来ていただいたキャロライン・シマード先生には、情報科学やエンジニアリングの分野で女性たちが、一体どういう障壁に直面し、それをどうやって克服しているのかについて、米国の事例を中心に基調講演をしていただき、その後、フランス出身のパネリストにも加わっていただいて活発なパネル討論を行いました。

それで私は、シマード先生がご所属のアニータ・ボーグ・インスティテュート（Anita Borg Institute）という機関が開催している、グレース・ホッパー会議（Grace Hopper Celebration of Women in Computing Conference [GHC]）の会合に参加してきました。まずはこの会議の雰囲気をつかんでいただくために、昨年度の本会議の様子をビデオクリップで上映いたしますので、ご覧いただきたいと思います。

ちなみに、このグレース・ホッパー（Grace Hopper）という女性は、これは米国の歴史の中で、コンピュータの先生方のご存じかもしれませんが、女性のコンピュータ・サイエンティストの草分け的な存在です。ヴァッサー・カレッジ（Vassar College）という女子大学の出身で、数学と物理を学び、イェール大学大学院に同じ分野で進学し、女性で初の数学の博士号を取得しました。海軍にも入って、技術系分野で活躍し、Rear Admiral（海軍少将）となって、当該分野の技術者、研究者として大成したパイオニアです。

その人の名前を冠に置いて、この会議が1994年から開催されているわけです。その会議を企画・運営しているのが、このアニータ・ボーグ・インスティテュートというところです。アニータ・ボーグというのも、著名な女性コンピュータ・サイエンティストの名前です。コンピュータ・サイエンスというのは新しい分野でしたから、博士号（Ph.D.）を取得したばかりの女性たちが、お互いに支え合うために、1997年に最初の組織（The Institute for Women in Technology）をつくりました。さらに、テクノロジー分野で働く女性たちを支援する会合を開こうということで、アニータ・ボーグはテレ・ホイットニー（Telle Whitney）という友人とともに、このグレース・ホッパー会議を開催し始めました。具体的には1997年の第2回の会合を持ったわけです。

ところが、アニータ・ボーグが2003年に癌でお亡くなりになったので、その組織の名前をアニータ・ボーグという、今度は彼女の名前を冠にして、テクノロジー分野で働く女性たちを支援する非営利組織になったわけです。アニータ・ボーグと一緒にこの組織を設立したテレ・ホイットニーという女性は、ご健在で、今から見ていただくフィルムの中にも

出ています。テクノロジー分野で働く女性を支援するこの会議には、23カ国、約1,600人の人たちが集まりました。

グレース・ホッパー会議の魅力

私は、ダイナミックな支援の方法とその雰囲気、そしてこの会議が与えるメッセージ力に圧倒されて帰ってきました。会議は9月末の水曜日に始まって、木、金、土曜日の朝まで続きました。3泊4日の会議の密度の高いこと、その雰囲気を少しでも味わっていただくと思ひまして、次のフィルムを見ていただきます。

タイトルは非常に単純でして、“I am a technical woman”です。“I am a technical woman.”ということを皆さんがおっしゃっているわけですがけれども、皆さんと一緒にこの空間が持つ不思議な力は一体何なのかということを考えてみたいと思います。

(ビデオ上映の URL <http://www.anitaborg.org/news/video/>)

これが、アメリカのテクノロジー系分野で働く女性たちを支援しようとする、一つのダイナミックな方法です。コンピュータ・サイエンスというのは、ご存じのとおり男性の牙城になっているわけです。マイクロソフトにしろ、アップルにしろ、グーグルには副社長がいますけれども、トップの人は全員男性で、女性の顔がなかなか見えない状況にあると思います。

そういう分野に女性たちがどうやって参入しているのか、あるいは参入していけるのかということで、最初のパイオニアとなったアニータ・ボーグやテレ・ホイットニー（ビデオの中では青い洋服を着た方で、この会議の創立者の1人）が、次世代の道を切り拓いていくためにこの会議を開催することを考えたわけです。1,600人が参加するというこの大掛かりな会議は、1年をかけてアニータ・ボーグ・インスティテュートで計画されます。

私は、この空間が持つ不思議な力についていろいろと考えてみました。この空間は、まるで人工的につくった女子大学のように直感しました。3泊4日で女性のコンピュータ・サイエンティストやテクノロジー分野で働く女性たちを支援する女性たちとともにすごす会場の雰囲気は、まさに人工的につくられた女子大学さながらでした。

例えば、そこではロールモデルを積極的に提示しています。私は、初めてグーグルの女性の副社長のお話を聞いて、彼女がどんなに大きな視野で世界の問題を考えているか、知ることができました。その話を聞いたのは、私のように大学教員としてアドミニストレーションにかかわっている者のみならず、大学院生や学部生、奨学金を取ってその会議に参加していた学生たちです。

この会議では、具体的な問題への解決策を提示しています。例えば、先ほどのキーワードでメンタリングがありましたけれども、私が参加したメンタリングの講座では、ロール

プレーまで行っていました。先輩は後輩に、このようなときどのようにして助けたら良いのかというロールプレーをしながら、ここは良いが、あれは悪いとか、この表現は良くない、こういうふうにもっと言ってあげるべきだとか、コンピュータ・サイエンスを専門とする方々が集まって、コミュニケーションのスタイルについていろいろなことを真剣に、具体的に語り合う試みでした。また、ネットワークキングの構築が重要ということで、私たちはバーコードがついた名札を首にかけていましたが、初対面の方とお話をしていたら、「ホッパー」というアルバイトの学生たちが、お互いに情報交換をしたいのであればということで、バーコードリーダーをかざしてくれて、後で、メールによってその人の情報が届くように仕掛けが作ってあるわけです。さすがテクノロジー系の方々が主催されている会議だと思いました。とにかく対面しているこの時間を大切に使うと同時に、その後はインターネットでつながることもできるから、ネットワークのためにどんどん情報を交換できるように工夫しているのです。

世代連携での支援も、極めて活発に行われていました。フィルムの中で、青い洋服を着ていた白髪の女性は、チューリング賞という、コンピュータ・サイエンスで言えばノーベル賞、数学のフィールズ賞のような賞だと聞きましたが、それを女性で初めて受賞されたフラン・アレン (Fran Allen) です。彼女も、この会議には毎回出席して、大学院生や学部生への相談やお話に積極的に乗ってくださっているそうです。

私がフラン・アレンとお話ししているときに、中東からの留学生たちが、「あなたはフランシス・アレンなのですか。」と尋ねて、ぱっと7、8人で彼女を取り囲んで「一緒に写真を撮って下さい」と言いました。その学生たちが、フラン・アレンを見るそのまなざし、これが最初に申し上げたロールモデルの重要性を表しているのだと思います。

そしてリーダーシップ養成。これにも本当に画期的なものがあって、たとえばエグゼクティブになるにはどうしたらいいのかというパネルが行われていました。そこには例えばアマゾン (Amazon) の技術系のトップ (Chief Technology Officer) であるとか、フェイスブック (Facebook) の副社長であるとか、そのようなエグゼクティブの前に次々に並んで、そして中高年の女性ばかりではなくて、大学院生や学部生がその方たちに列をつくって質問をするのです。これだけのエグゼクティブ、重役になっている方たち5、6人を一堂に集め、25、26歳の若者が列をつくっていろいろな質問をしているわけです。多様なグループに対して、こうしたらいい、ああしたらいいという、分け隔てないサポートのあり方に、私は本当に感銘を受けました。

リーダーシップ養成に関しても、どのようにして影響力を持てる人物になるのかという話を、技術の話とはまた別に、コンピュータ・サイエンティストたちにも提供し、同時に、いかにして困難な状況を生き延びていったらいいのかという、そのようなワークショップも行われていました。

そして何より、ポジティブな女性のイメージを、きわめて自覚的に提示しているのです。グレース・ホッパーと会議を命名するところから、ポジティブな女性の達成を顕彰していますし、亡くなったアニータ・ボーグを顕彰するというのもそうです。私が、初めてこの会議に参加する人のために、というセッションに参加したときに、アニータ・ボーグが一体どのような人物であって、どのようにして次世代に道を切り拓こうと努力したかという説明を受けました。専門のコンピュータ・サイエンスの業績が優れていたことに加えて、彼女は、美味しいものを食べることが大好きで、いろいろな人と出会うことが大好きで、ダンスをすることも大好きで、とても楽しい人生を送った人なのだとすることを、若い人たちに伝えているのです。

もはや、ロールモデルがこんなに立派だったというだけでは不十分で、そのロールモデルの人たちが生活を、人生をエンジョイしていることをしっかりと伝えているのです。この職業についたから、私はこういう人たちに会えて、こういう楽しい人生を送っているのだ、あなたたちだって、このようなことができるのですよということを次の世代に伝えようとしているわけです。こんなに立派なのだ、こんなに賞を取ったのだということだけで、次世代にアプローチはしてはいないのです。

若い世代との連携のセッションに行っても、例えば休日に私はこのように過ごしているのだと言って、サイクリングしたり、山登りに行ったりした写真を見せたり、また、出張ではこのようなところに行ってきたのだと話すという。出張で回った世界の様々な場所の写真を次の世代の人たちに見せ、人生の豊かさと、楽しさ、そして職業から得られる充実感を思い切り次の世代に伝えていこうとする、女性たちの強い熱意が感じられました。

これらは、日々、私自身が教員として意識していることと重なりますけれども、これについては後でパネルディスカッションのときにパネリストの方々とお話したいと思います。私はこのグレース・ホッパー会議（Grace Hopper Celebration of Women in Computing Conference）に参加して、女子大学のエッセンスがここに凝縮されているような気がいたしました。また、こういう取組を女子大学ではないところで盛んに行うようになってきているわけですから、女子大学は女性をエンパワーするために、当然もっと何をしてゆかなければならないのかということを、私は考えようとも思っていました。

ここで、一つ非常に残念だったことは、日本人の学生に会えなかったことです。私はそこで多くの外国人学生に会いました。具体的には、中国からの留学生が先生に推薦されてこの会議に来ました、インドからの留学生が先生に推薦されてここに来ました、イランからの学生が先生に推薦されてここに来ましたという大学院生にたくさん会いましたが、日本人学生のコンピュータ・サイエンティストには1人も会えませんでした。日本から行った私の同僚と、もう1人、慶應義塾大学の先生の3名だけで、日本の女性たちは、コ

ンピュータ・サイエンスの分野ではどこにいたのだろうと思いました。私は、来年度はぜひ津田塾の学生をこの会議に、奨学金を取って送り込みたいと思っています。これは、女性研究者支援センターの活動を行っている私が、是非果たしたいことの一つでもあります。

5. 女子大学の存在意義：アドリエヌ・リッチ「魂をもつこと」

私は、今でも、女子大学の存在意義を、「女性の大学の魂」という講演をしたこの人ほどうまく言葉にした人はいないのではないかと考えています。それは、アドリエヌ・リッチ（Adrienne Rich）というアメリカの詩人が、スクリプス・カレッジ（Scripps College）という、ロサンゼルス近郊にある女子大学で講演をしたときに語ったものです。その翻訳をご紹介します。

「世の中の大部分は、女^メの場所ではなくて、女を否定する場所だということ、そして女は、女の場所とは何でありうるかを確かめる必要があるということ — そこに引きこもって庇護されるのではなくて、力を与えられ、みずからの価値と全体性^{インテグリティ}に確信をもって、そこから前進していけるような場所として。わたしはそのとき、それが意味しているのは美しい寄宿舎ホールや庭園があることではなくて、魂をもつことなのだ^メと悟りました。」（出典：アドリエヌ・リッチ、大島かおり訳『血、パン、詩。』晶文社、1989年、288-289頁）

スクリプス・カレッジにはとても美しい庭園があって、校舎も美しく、もう目をみはるほど美しいキャンパスなのです。しかしリッチは、キャンパスの美しさではなくて、「魂をもつことなのだ^メと悟りました」と言っているのです。女子大学で魂をもつ経験をするところ^メが、女子大学の存在意義であると、スクリプス・カレッジの講演でアドリエヌ・リッチは語りました。

つまり、私がお伝えしたいのは、日本の『男女共同参画白書』の統計のいくつかをご覧いただいてお分かりだと思いますし、また、直接的にご経験もされていると思いますけれども、日本社会のまだまだ多くの部分は、女性にとっては職業人として生きていくのが大変難しい社会だということです。特に政治・経済の分野で女性の参画は極めて難しい状況にあり、それが現実だということです。そのような中で女子大学は女性に何ができるのか。女性に力を与え、女性には価値があって、自分自身のインテグリティ（Integrity）に確信を持って、そこから前進していける、そういうあなたたちを私たちは信じていますよ、というメッセージを女子大学の教職員がどれくらい学生たちに語りかけることができるのか^メが問われているのだと思います。

そういうメッセージを伝えられたときに、学生たちが、その場で本当に魂をもつような

— 人間としてこれからあらゆる問題に対峙して生きていくための、その基盤をつくる —
そういう人生の4年間というその時間、それに大きな意味があるということです。そういう空間と時間になるようにと、私は女子大学がもっと工夫しながら、研鑽を積みながら、変革していかななくてはならないのだと考えております。

付属資料

グレース・ホッパー会議（Grace Hopper Celebration of Women in Computing Conference）大会参加記

はじめに

2009年9月30日から10月3日までアリゾナ州ツーソンで開催されたグレース・ホッパー会議（Grace Hopper Celebration of Women in Computing Conference（GHC））に津田塾大学女性研究者支援センターの業務の一環として参加した。グレース・ホッパー（Grace Hopper）という情報科学の分野で歴史的に重要な功績を残した女性科学者の名前を冠にしたこの会議、GHCは、テクノロジー分野で働き、また研究する女性を支援する目的で、1994年に開始された。今年はその9回目にあたるが、“Creating Technology for Social Good”というテーマで開催された本会議に、1600名をこえる人びとが23カ国から参集した。

グレース・ホッパーは、女性コンピュータ・サイエンティストの草分けだ。ヴァッサー大学（女子大学）の出身で、数学と物理学を学び、イェール大学大学院に同じ分野で進学し、女性で初の数学の博士号を取得している。海軍にも入り、技術系分野で活躍し、海軍少将（Rear Admiral）となって、当該分野の技術者、研究者として大成したパイオニアである。その人の名前を冠に置いて、この会議が開催されている。

1. アニータ・ボーグ・インスティテュート（Anita Borg Institute）

その会議を企画・運営しているのは、アニータ・ボーグ・インスティテュート（Anita Borg Institute）という非営利組織である。アニータ・ボーグというのも、著名な女性コンピュータ・サイエンティストの名前だ。情報科学は新しい分野であったため、博士号（Ph. D.）を取得したばかりの女性たちが、互いを支え合うために、1997年に最初の組織（The Institute for Women in Technology）をつくった。

さらに、テクノロジー分野で働く女性たちを支援する会合を継続的に開こうということで、アニータ・ボーグはテレ・ホイットニー（Telle Whitney）という友人とともに、1997年からこのグレース・ホッパー会議を企画運営した。ところが、アニータ・ボーグ氏が2003年に癌で亡くなったので、その組織の名前をアニータ・ボーグという、彼女の名前を冠にして、テクノロジー分野で働く女性たちを支援する非営利組織として活動を展開している。

2. スピリット

テクニカル・ウーマンを支援するという理念の下、GHCを組織するアニータ・ボーグ・インスティテュートの代表テレ・ホイットニーとスタッフが会議を通じて示していた、構想力、組織力、そして何よりあらゆる困難を突破して前に進む力強い実行力には目をみはるものがある。私は、ダイナミックな支援の方法とその雰囲気、そしてこの会議が与えるメッセージ力、そして何よりそのスピリットに圧倒されて帰ってきた。会議は9月末の水曜日に始まって、木、金、土曜日の朝まで続いたが、3泊4日の会議の密度の高いこと、その雰囲気を少しでも味わうために是非、次のビデオ・クリップをご覧いただきたい。タイトルは実に明快で、“I am a Technical Woman”というものだ。ビデオの視聴には次を参照されたい。(http://www.anitaborg.org/news/video/)

基本的にグレース・ホッパー会議の報告者はほぼすべて女性である。GHCでは、学部生から大学院生、若手研究者から教授、副学長、学長まで、就職を探している大学院生から中堅のプロフェッショナル、管理職、そして企業の役員までが同じ場になって、女性が当該分野で活躍する道を広げてゆくための方策について様々な位相からのアプローチを展開している。報告者もテクノロジーを活用して社会に貢献したい、人に触れられるものをつくりたいなどと、人びとと「繋がり」を持っていくことに高い意識がある発話が印象的だった。アニータ・ボーグ・インスティテュートは、すべての人びとの「声」をテクノロジーに反映させ、テクノロジーの文化を変えてゆくことを目指すという思想のもとに、本会議の企画運営を展開している。そのためにも、多くのスポンサーを探して、多様な奨学金を準備し、学生たちに参加しやすい環境の実現に力を尽くす。1600名以上の参加者のうち男性は数えるくらいで、会場の洗面所も男性用を女性用に変更するほどだった。詳しくはオンラインでプログラムを参照されたい。(http://anitaborg.org/initiatives/ghc/)

コンピュータ・サイエンスという分野は、周知の通り、男性の牙城である。マイクロソフトにしろ、アップルにしろ、グーグルには女性の副社長がいるが、トップは全員男性で、女性の顔がなかなか見えない状況にある。そのような分野に女性たちがどのようにして参画しているのか、あるいは参画していけるのかということをめぐる情報を共有するためにも、創設者となったアニータ・ボーグやテレ・ホイットニーが、次世代の道を切り拓いていくためにこの会議を継続的に開催することを考えた。1,600人が参加するというこの大掛かりな会議は、1年をかけてアニータ・ボーグ・インスティテュートで計画される。

女性たちのエネルギー溢れるこの空間には、不思議な力—女性たちを勇気づけるスピリットがある。私は、この空間が持つ不思議な力についていろいろと考えてみた。3泊4日で女性のコンピュータ・サイエンティストやテクノロジー分野で働く女性たちを支援する女性たちとともに過ごす会場の雰囲気は、女性であることを肯定的に捉え、ネットワー

クをつくって前進してゆこうとする熱気に包まれていた。この会議自体が人工的につくった4日間の女子大学といった、そのようなスピリットで貫かれていた。

3. ロールモデル、ネットワーキング、世代連携

グレース・ホッパー会議ではロールモデルを積極的に提示していた。私は、グーグルの副社長、ミーガン・スミス（Megan Smith）の基調講演を聞いて、彼女がどのような視点で世界の問題を考えているか、知ることができた。彼女の話は、アフリカの貧困や世界のパンデミック、環境など、世界を横断する問題解決のためにテクノロジーを使ってどのように貢献してゆける可能性があるかということに焦点があてられていた。その話を聞いたのは、大学教員や企業の役員、そして大学院生や学部生、奨学金を取ってその会議に参加していた多くの学生たちも含まれていた。講演終了後には、ミーガン・スミスが多くの学生・院生たちに取り囲まれ、質問攻めにあっていた光景が思い出される。

グレース・ホッパー会議ではまた、具体的な問題への解決策も提示していた。例えば、私が参加したメンタリングの講座では、迫真の演技でメンターとメンティのロールプレーまで行って、さあどの点に問題があるでしょうか、どこを修正する必要があるでしょうかと会場の皆を巻き込んで議論を始めた。先輩は後輩に、このようなときどのようにして助けたら良いのかというロールプレーをしながら、ここは良いが、あれは悪いとか、この表現は良くない、こういうふうにもっと言ってあげるべきだとか、テクノロジー分野の専門家が集まって、コミュニケーションのスタイルについていろいろなことを真剣に具体的に語り合う試みだった。

さらに私が出席した個別のセッションでは、推薦状を書く際に、被推薦者が女性である場合と男性である場合とで、どのような形容詞を無意識に使っているか、また、褒め方にもどのような違いが認められるのかといった研究も紹介されていた。他方では、パテントの獲得数についても男女間で比較し、女性の獲得率がいかに低いか、また、なぜそのような状態にあるのかといったことも示唆されていた。

ネットワーキングの構築が極めて重要視されていたこともGHCの大きな特色である。私たちはバーコードがついた名札を首にかけていたが、初対面の方と話をしていたら、「ホッパー」というアルバイトの学生たちが、互いに情報交換をしたいのであればということで、バーコードリーダーをかざしてくれて、後で、メールによって双方の情報が届くように仕掛けが作ってあった。さすがテクノロジー系の専門家が主催している会議だなと思う。とにかく対面している時間を大切に使うと同時に、その後はインターネットでつながることもできるから、ネットワークのためにどんどん情報を交換できるように工夫が仕掛けてある。

世代連携型の支援も、極めて活発に行われていた。学部学生、大学院生、中間管理職、

会社役員、大学教員と様々なレベルの女性たちを架橋する世代連携が展開されていたことが映像の中からも見て取れる。ビデオ・クリップの中には、チューリング賞（コンピュータ・サイエンスにおけるノーベル賞、数学のフィールズ賞のような賞と言われている）を女性で初めて受賞したフラン・アレン（Fran Allen）も登場している。彼女のような偉業を達成した女性も、この会議に毎回出席して、次世代の女性たちの相談に積極的に乗っているそうだ。私がフラン・アレンとお話ししているときに、中東からの留学生たちが、「あなたはフラン・アレンなのですか。」と尋ねて、さっと7、8人で彼女を取り囲んで「一緒に写真を撮って下さい」と言っていた。学生たちが、フラン・アレンを見るそのまなざしに、目に見える傑出したロールモデルを提示する重要性を再確認した。

4. リーダーシップ

そしてリーダーシップ養成にも力が入れている。例えば、エグゼクティブになるにはどうしたらいいのかという、“Technical Executive Plenary Session – What You Need to Know on the Road to Becoming a Technology Executive”と題したパネルも行われていた。アマゾン（Amazon）やゼロックス（Xerox）の技術系のトップ（Chief Technology Officer）やゼロックス、フェースブック（Facebook）の副社長など、男性も含む登壇者が、どのようにしてエグゼクティブになったのか、どのような困難があったのか、それをどのように乗り越えたのかなど、きわめて具体的な体験談及びアドバイスを提供する活発なセッションだった。共通して語られていたことは、自らの仕事に対する情熱であった。朝、目が覚めたときに、さあ今日もこの仕事に立ち向かうのだという情熱を傾けられる対象に出会えることが大切であると熱く語っていることが際立っていた。そのような複数のエグゼクティブを前に次々と並んで、中堅の女性ばかりではなくて、大学院生や学部生が列をつくって彼らに質問をしていた。これだけのエグゼクティブ、5、6人を一堂に集め、20代の若者が列をつくっていろいろな質問をする。職位・年齢・人種・国籍等においてきわめて多様な参加者に対して、こうしたらいい、ああしたらいいという、分け隔てないサポートを提供するスタイルに、私は感銘を受けた。

リーダーシップ養成に関しても、どのようにして影響力のある人物になるのかという話を、技術の話とはまた別に、コンピュータ・サイエンティストたちにも提供し、と同時に、いかにして困難な状況を生き延びていったらいいのかということを話し合うそのようなワークショップも行われていた。プログラムの企画は、多様な側面からの実践的な情報提供に配慮されていた。

5. イメージ

そして何より、ポジティブな女性のイメージを、きわめて自覚的に提示しているのであ

る。グレース・ホッパーと会議を命名するところから、ポジティブな女性の業績を顕彰しているし、また、亡くなったアニータ・ボーグをインスティテュートの冠にして顕彰するというのも同様の趣旨である。顕彰することの意義は、ポジティブなイメージを多くの人びとの心の中に彼女たちのイメージを残すことにある。それが、次世代の歩みに勇気を与えるからである。

私が、初めてこの会議に参加する人のために、というセッションに参加したときに、アニータ・ボーグが一体どのような人物であって、どのようにして次世代に道を切り拓こうと努力したかという説明を受けた。アニータは、専門のコンピュータ・サイエンスの業績が優れていたことに加えて、美味しいものを食べることが大好きで、いろいろな人と出会うことが大好きで、ダンスをすることも大好きで、とても楽しい人生を送った人なのだというのを、テレ・ホイットニーが若い参加者に熱心に伝えていた。

もはや、ロールモデルがこんなに優れた業績を上げた人物であったというだけでは不十分で、そのロールモデルが日々の生活を、そして人生をエンジョイしていることをしっかりと伝えたいという意図が明示されていた。この職業についたから、私はこのような魅力的な人たちに会えて、こんなに楽しい人生を送っているのだ、あなたたちも、このようなことができるのだということを若い世代に伝えようとしている。こんなに立派なのだ、こんなに賞を取ったのだということだけで、次世代にアプローチはしてはいない。ポジティブな女性のイメージを積極的に打ち出す魅力的な空間は、日本の若い女性たちがICT分野に抱いている暗い、きついというイメージを払拭するかのようだった。

若い世代との連携のセッションに行っても、例えば休日に私はこのように過ごしているのだと説明し、サイクリングをしたり、山登りに行ったりした写真を見せ、また、出張ではこのような興味深いところに行ってきたと話すという。出張で回った世界の様々な場所の写真を見せながら、人生の豊かさと、楽しさ、そして職業から得られる充実感を思い切り次の世代に伝えていこうとする、女性たちの強い熱意が感じられた。

おわりに

私はこのグレース・ホッパー会議に参加して、女子大学のエッセンスがここに凝縮されていると直感した。ロールモデル、リーダーシップ、ネットワーク、世代連携、イメージ、女性たちの足跡の顕彰等、女子大学が女性をエンパワーするために大切にしている要素がこの3日間には詰まっていた。新しい分野でイノベーションを起こすには、ダイバーシティ（多様性）が必要である。いまだに女性の参画が困難な分野・業界であるからこそ、この会議のように、人種、国籍、地域、職位等を横断し、多様な女性の参画と連携を可能にしようとする。そうすることで、テクノロジーの文化を変える突破口を見

出そうとしている。この会議自体、テレ・ホイットニーが歓迎の辞で述べている通り、参加者に「人生観を変えるような経験」を提供している。女子大学のさらなる躍進のためにも、この会議から学ぶことは多い。

武庫川学院創立70周年記念シンポジウム

卒業生によるパネルディスカッション

女子大学で学ぶとは

パネリスト：本仲 純子（薬学部卒・徳島大学大学院教授）
木村 泰子（短期大学体育科卒・大阪市立南住吉大空小学校校長）
稲村 和子（家政学部卒・奈良県文化観光局文化課課長）
佐守 香里（音楽学部卒・レイドバックミュージックスクール声楽講師）
伊覇ゆかり（短期大学人間関係学科卒・キッザニア甲子園デパート
パビリオンマネージャー）

コメンテーター：高橋 裕子（津田塾大学教授・研究支援担当学長特別補佐）

コーディネーター：安東 由則（武庫川女子大学教授・教育研究所研究員）

学 生：後藤 早紀（武庫川女子大学文学部健康スポーツ科学科4年）
新井 菜月（武庫川女子大学生活環境学部情報メディア学科3年）

シンポジウムの目的

〔安東由則〕 コーディネーターを務めます、教育学科の教授で、教育研究所研究員の安東と申します。よろしくお願いいたします。

高橋先生のご講演を受けまして、パネルディスカッションに移ります。テーマは、シンポジウムのテーマどおり「女子大学で学ぶとは」ということです。

主催者の立場から、このテーマ設定について一言説明を申し上げます。

女子大学に限らず、大学の主役は学生です。その学生にとって最も重要なことは、大学における学びではないかと考えます。近年、盛んに各大学でFD（Faculty Development）が行われておりますが、これも学生の学びの充実を目指すということが第一の目的としてあります。文部科学省の各種GP（Good Practice）もまた、各大学が創意工夫して学生の学びを促進しようというものです。

今日、大学にとって学生の学びをどう深め、どう広めていくのかということとは、従来にもまして大きな課題となっております。そうした大学での学びという共通の課題の上に、ここでは、女子大学だからこそできる学びとは何なのか、あるいはそうした学びを推進していくために女子大学は何をすべきか、ということについて検討をしていきたいと考えました。ここで言う学びとは、学問や授業ということだけではなく、学生間の交流あるいは教職員との交流を想定した、幅広い学びというふうに捉えております。

こうした広い学びを捉えるために、5名の本学卒業生にお集まりをいただきました。本学院は今年で創立70周年、大学は創立60周年を迎えます。現在、本学では4年制大学で4学部、13学科、8,000人、そして短期大学は7学科で2,000人、合計1万人の学生が学んでおります。卒業生の数は、短大が10万人、4年制が6万人を超えています。また、学部、学科構成も、伝統的な日文や英文といった文系から、建築あるいは薬学といった理系まで非常に幅広い領域に及んでおり、その幅広さが武庫川女子大学の特色でもあります。

今日のパネルディスカッションには、異なる領域、幅広い年齢層の卒業生からご意見を伺おうということで、バラエティーに富んだパネリストの構成とさせていただきました。

これから行いますパネルディスカッションでは、次の2点について語っていただきます。

まず一つは、武庫川女子大学での各人の多様な学びの経験を振り返っていただき、思い出に残っていること、今でも役立っていること、あるいはさらにはこういった援助が欲しかったといったことについて、それぞれの経験から率直に語っていただきます。

もう一つは、女子大学であることに焦点を当てます。女子大学だからこそその学びとはどのようなものか、その長所、短所についても意見をいただきたいと思います。先ほどの高橋先生のご講演の内容にも照らして、幅広く会場の皆さんも含めて議論ができればと考え

ております。

このパネルディスカッションが、これからの女子大学あるいは武庫川女子大学において、学生の学びをさらに充実・向上させるための手がかりになれば幸いです。

パネリストに加えまして、現役の学生さんにも2名来てもらっておりますので、また後で、ご意見を聞きます。そして、高橋先生には、ご講演に引き続き、コメンテーターとしてご意見をちょうだいしまして、女子大学での学びについて幅広い観点からの議論を深めたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、パネリストの方のご発言に移ります。

学生時代の学びを振り返って

〔安東由則〕 皆様には、出身学科と現在の職業、そのやりがいについて、自己紹介をかねて語っていただいた上で、学生時代の学びを振り返って、思い出に残っている学びがあれば、それについて語っていただきたいと思います。時間がなくて申しわけないのですが、だいたい1人5分くらいをめどにお願いします。

それでは、手前の本仲さんからよろしくお願いいたします。

〔本仲純子〕 本仲純子と申します。本日は、このような席にお招きいただいて大変光栄に思っております。

私は、薬学部の薬学科を卒業しております。昭和42年3月の卒業でして、薬学部の2期生です。薬学部ができて2年目に入学しましたので、上級生は1学年だけでした。

それで現在の職業なのですが、ちょっと皆さんにはわかりにくいと思います。私の職業紹介としては、徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部と書いてあります。これは、大学の大学院への改組によりまして、こういう名前がついておりますけれども、徳島大学の工学部、化学応用工学科というところで、分析化学と環境化学を教えております。私自身の研究は、センサー関係、それと環境の研究をしております。



大学時代の思い出ということなのですが、何しろ私は2期生ですので卒業生がおりませんでした。大学側としましては、薬学部を出るということは、まず薬剤師にさせるというのが大目標でございました。卒業生がまだ出ていませんから、先生方は非常に神経質になっておられたわけです。多分、大学のトップの方からは、100%合格させろということ

だったと思います。とにかく非常にタイトな授業と実験がございました。月曜日から土曜日の5時まで、ずっと午前中は講義、そして午後が実験になっていて、びっしりと、全く休む暇なく授業と実験が入っておりました。この大学に入ったとき思ったのですが、薬学部は高校よりも厳しいところで、もう1回選べるとしたら、薬学部はやめようと思うくらい詰め込まれました。

後で私は、大学院を徳島大学の薬学部（研究科）に入ったのですが、そこでの授業の内容に比べますと、本学の方がもう2倍くらいきっちり詰まっているという感じでした。単位も、149単位取っておりますから、恐らく今に比べますとよっぽどハードな授業で、先生方も大変であっただろうと思います。

何よりもよかったと思うのは、先生方の力も入っていたと思うのですけれども、非常におもしろい授業だとか、心惹かれる授業とか、感動する授業がところどころにありました。もうそれで来るのが楽しみでしようがないといった状況でした。

例えば、京都大学とか大阪大学が近いからでしょうか、そこを定年された先生を呼んできたという場合もあるんです。そういう先生方がされる授業というのは、歴史的な背景を含めて授業をしてくれますし、人間性が感じられて、非常に興味をそそられました。それから生薬の授業では、野外へ連れて行ってくれて、外で直接、生薬、薬用植物の授業を受けたのが、懐かしい思い出として残っております。

今、私はいろんな学会に所属しておりますけれども、この11月に、私どもの方で日本ポーラログラフ学会の討論会を引き受けております。日本ポーラログラフ学会というのは、ヘイロフスキーという方と、志方益三という京都大学農学部の先生が、ポーラログラフというものをチェコで創案されまして、その志方益三先生のお弟子さんの舘勇先生が、日本ポーラログラフ学会をつくられました。その学会の討論会を私が開催するわけです。

その舘勇先生から、私は学部のとくに授業を受けております。それを知ったときは非常に衝撃的でして、本当にそのときに存じ上げていたら、直接行っていろんなお話を聞いたのにと、とても残念でしたが、何も知らないで授業を受けておりました。それから、音楽などの授業でも、非常に有名なオペラの先生が、授業中に歌ってくださるんですよね。そういうぜいたくな授業をこの武庫川女子大学で受けることができ、とても感謝しております。

それで、私自身のことなんですが、私自身は、本学の薬学部にはすんなりと入学してきました。うちが薬屋でしたので、父親の白衣姿を見て非常にあこがれていて、私も白衣を着ようというのが何よりの目的でした。それから薬用植物だとか、薬のにおいが大好きなんですね。小さなときからクレゾールのにおいとか、天秤の上に薬包紙を置いて、そこにメリケン粉みたいな、小麦粉みたいなのを乗せて測っては喜んでおりましたので、薬学部に入るのは非常によかったんです。

ところが、すんなり入ってきたのですけれど、入った瞬間に、じゃあ私は何になるのかと考えました。高橋先生のお話を聞いたときに思ったのですが、薬剤師になると薬局に勤めるか、病院の薬剤師になるか、会社に行きますよね。うちは薬屋ですので、ずっと小さな時から見ておりまして、これちょっと私にはできないなと感じました。病院の薬剤師というのもありまして、いろいろ考えましたですね。

高校のときにキュリー夫人の本を読みまして非常に感動しておりましたので、どうしても私は研究者になりたいと思いました。一番どこがいいだろうといろいろ考えましたが、やっぱり大学に勤めたいなと思いました。それが18歳で大学に入ったときでございます。それからは、もう何になれるとかなれないとか、そんなことは関係なく、是非とも研究者になりたいという希望がございまして、それに向かって進んだということです。

大学というところに勤めまして、とても生きがいを感じております。どうしてかと言いますと、学生さんを相手にして、その学生さんたちを育てるという強い実感があるからです。特に女子大生たちに一生懸命、私の考え方とかを話すのですけれども、そういう教育に関してとてもおもしろいと思っています。それと大学での研究は、自分の好みでできますので、割合と自由に研究テーマが選べるということも、たいへんおもしろいと思っております。

そういう意味で私はよかったと思っておりますが、このように何になろうか、どうしようかと考えるようになったのは、やはりこの大学に入ったからでございます。それと、自宅から出て寮に住んでおりましたので、いろんなことが外から見えるようになったという利点もございました。

私は来年の3月で退官になりますが、大学には41年勤めております。先ほど高橋先生が言われましたけれども、大学にいる間は、自分が女性であるということは全く感じておりませんでした。もう自由に、伸び伸びと、頭の中は夢いっぱいでもございました。しかし、勤めたもうその瞬間から自分が女性であるということを突きつけられました。結婚、それから出産といった、いろいろなことをどういうふうにやっていくのかということ、ずっと考え続けた41年でもございました。ただ、私としては思うようにやってきましたので、全く後悔はありませんし、この武庫川女子大学が私の現在の原点であったと思っております。

〔安東由則〕 ありがとうございます。続きまして木村さん、お願いいたします。

〔木村泰子〕 大空小学校で校長をしております木村泰子です。よろしくお願いします。

大空小学校という名前を聞かれて、皆さん、変わった名前やな、と思われるでしょうが、とてもすてきな名前でしょう。これは大阪市に298番目に新しく開校して4年目のピ

カピカの小学校なんです。子どもたちがこの名前をつけ、大空のように広い心をもった人になりたいという願いを込めて、大空小学校という名前をつけました。

開校当時から4年間、もちろん教職員と保護者の方たち（今日もお顔が見えるのでびっくりしているんですが、はがきで申し込まれたのかなと思います）、地域の方たちと、チームで子どもたちを育てようとがんばってきました。そして10年後の社会はどんな社会になっているのか。そのときに必要な力を今、子どもたちにということで、新しいタイプの学校を目指して、とても楽しい毎日を過ごしています。



私は、40年前、短大の体育科を卒業しました。そのころの体育科というのは、今もそうかもしれませんが、まさに想像を絶する、一言で言えば地獄のような毎日でした。もうその当時の先生はいらっしゃらないと思うので、大丈夫かなと思いながらしゃべっておりますが、本当にいつ自分の命がなくなるか、オーバーな話じゃなくて、本当に腕の1本や2本が飛んでいったって、おかしくないというような日々でした。

もちろん授業は充実していました。とてもレベルが高かったのです。体育科というのは、実技が中心になりますので、特にその中でも、当時（今でもそうですが）、体操部というのは花形だったんですね。体操部のセンスというのは、たとえば、ダッと走って行って、ピョーンと上に飛んで、ひっくり返って、パッと着地するということです。それができないと単位をもらえない。もらえないイコール退学ということです。それくらい厳しい条件の中でしたから、必然的に先生を恨みますので、仲間にはものすごい結束力が生まれます。これも一つのマネジメントです。今、それをぞんぶんに使わせていただいております。

だから短大の2年間というのは、授業とクラブだけで、それ以外は、「ひまわり」というおうどん屋さんがあって、そこにおいしいするめのてんぷらの入ったおうどんがある。そのおうどんを食べに行くことだけが楽しみでした。

小学校というと、きっとモンスター・ペアレントとか悪い話ばかりを学校現場に想像されると思うのですが、とんでもない。本当に夢を持って、大人も子どもも、一つの目標に向かってみんなで学び合っていて、こんな楽しい毎日はないと思っています。そんな毎日を過ごせるようになった原動力は、まさにいじめ抜かれた2年間にあります。

そういう意味では、武庫川の体育科を卒業した体育人としての自分を常に誇りに思っていますし、どんな大学で学んでこられた方よりも、自分は全く劣っていないなということです。少なくとも、体育の学習に関しては、今でも私の大きな誇りです。

校長になって、退職を間際にした今でも、毎年、体育の授業をしています。体育の授業ができなくなったら私は教師をやめよう。これが卒業したときの自分の誓いです。小学校に勤めていますが、今年は6年生と1年生の体育の授業を週1時間しています。体育の授業をすることで、すべてのストレスが飛んでいきます。

もう一つの思い出はクラブです。クラブは弱小クラブの水泳部だったのですが、私たちがいた2年間で、関西リーグで優勝することができました。水泳部が強くなった一番のスタートは、私たちの2年間だったんです。それは、それは、すばらしい先輩がおられました。その先輩は、体操の先生よりも恐ろしい先輩だったのです。もう本当に今でも苦しいことがあれば、そのときの出来事を思い出します。それよりも苦しいことはないというのが現在の心境です。その当時はプールなんてありませんでした。小さな声で言いますが、私たちは体育館を「ぼろ校舎」と言っておりました。陸橋の向こうには立派な、すばらしい建物があつたのですが、こっちの体育館は本当にぼろぼろの体育館でした。私たちが一番誇りにしていたその体育館なんですが、そこにはプールはありませんでした。だから附属高校の50メートルプールへずっと練習に行きました。合宿になると、朝から夜まで泳いで、2キロや3キロはざらな練習量でした。

私は背泳ぎが専門なのですね。みんなが練習を終えて食事に上がったときに、私は小杉という旧姓なのですが、1人の先輩が、「小杉、残り」と一言いいました。そこから50メートルを恐らく20回くらい(1000m)泳がされました。先輩はプールの上をクマのように歩かれるだけなんですね。50メートルプールで、私は足が立たないんです。途中でしんどくなくても立てないんです。だから、溺れるか泳ぐか、二つに一つを選択しかない。夜遅くなってきて、ものすごい雨が降ったんですね。背泳ぎですから上を向いているでしょう、そしたら雷がピカピカピカと走るんです。「当たって、当たって」と、もう雷に当たってというくらいの練習だったんです。その20往復の練習が終わった直後、私はその先輩を心の中ではとっても恨んでいました。

何でこんな苦しいことを自分はしているのだろうと思いながら、やり終えた後に、50メートルプールの端と端を考えました。練習をスタートしたのはこちらの端、そこにビーチサンダルを置いていました。練習が終わったのはあちらの端だったんですね。練習が終わった後、その先輩が何も言わず、雨の中、そのビーチサンダルを私のところへ持ってきてくれました。私は水着で濡れています。先輩は水着を着ていないので、ほとほとに体中が濡れています。その姿を見たときに、人を教えるってこんなことかなと、ずっとその先輩に与えていただいたその力を、今現在も自分の中でみんなに与えたいと思って仕事をしています。以上です。

〔安東由則〕 ありがとうございます。続きまして、稲村さん、お願いします。

〔稲村和子〕 奈良県文化観光局文化課の稲村でございます。よろしくお願いいたします。

私は、昭和52年に家政学部の被服学科を卒業いたしました。現在の仕事の内容とそのやりがいにつきまして、お話ししたいと思います。

現在、県の文化行政の総合企画及び調整に関する
こと、それから文化芸術の振興にかかわることという
ような、かた苦しい、漢字で書くとややこしい仕事
をしております。俗に言う箱物行政、県立文化施設
の運営とか管理とか、そういったことをしております。
それからもう一方で、奈良県に世界遺産が三
つあるのですが、それに加えて飛鳥・藤原京の世界遺産登録を目指して、登録とか
保全活用に関する仕事をしております。



私はこれまで農林部の生活改良普及員を皮切りに、農村の現場を回ったり、農業試験場
で調査研究をやったり、児童福祉の方でDV対策や子ども対策をやったり、若年者の雇用
ということで雇用対策をいたしました。それから文化施設である万葉文化館という県の施
設で現場の仕事も行いました。そのようなことを踏まえて、今、文化課で課長という立場
にあります。自分が行動することで、そしていろいろな行政施策を考えて打っていくこと
で、少しずつではありますが、住民の方にとって暮らしやすい環境が提供できているのか
なと思っています。部分的ではありますが、県の政策決定の一端を担って、行政の
方向づけができていているように思います。

私の周りには、立派な大学を出た男性の方が、たくさんおられます。しかしながら、そ
ういう方々は仕事人間で、生活者としての経験がないわけです。それから、子どもを育て
ることも奥さん任せにしています。それに比べて私には生活者としての経験がありますの
で、その切り口から提言をさせてもらえるということは、非常にすばらしいことだと、
今、考えているところです。

振り返りながら、大学時代の思い出についてお話しさせていただきます。私はいいかげ
んな学生でしたが、4年生の1年間につきましては、一生懸命、卒業論文に取り組みせて
いただきました。繊維科学研究室の、今は亡くなりました安田先生、それから今日も来
ていただいているのですが、奥野先生にご指導をいただきまして、6人のグループで
卒業論文に取り組みました。

1年間、研究室に入って、毎日毎日みっちりと染色実験をするわけです。長いときは24
時間の徹夜実験をしたこともございます。学校で寝泊まりしたこともあります。友人の
下宿でお互いに眠らないようにつつきあいながら、「起きよ、起きよ」と言いながら卒論

をまとめたことも、よい思い出でございます。

今考えますと、そういう実験というのは、本当に稚拙なもので、先生の手伝いの研究でございました。しかしそれを通して、一つの真実を得るために、多くの労力と時間が必要だということがわかりました。緻密な実験研究の手法と技術が身についたと思います。

その中で、1日の終わりにお茶の時間がございまして、先生方とすごく親しくお話をさせていただきました。そういう中でお話を聞きながら、目上の方とのお話の仕方とか、皆さんが考えておられることについて、いろいろ知ることができました。人間的には、卒業実験に取り組むことで忍耐力と協調性が身についたように思います。それから、先生方との深いつながりによりまして、親しき仲にも礼儀ありといったような、目上の方との付き合い方を学んだように思います。

今、大学時代を振り返りまして、深くはないけれども、基本的な学問の知識や技術を広範囲に学べたという利点がございます。今、申し上げましたように、職場ではいろんな部署に配属されますが、入り口で戸惑うことはありません。それから、武庫川女子大というのは、かなりクオリティーの高い女子大でございまして、そういう中にいさせてもらいましたので、万葉文化館には画家の先生方とか、それから国文学の一流の先生方がたくさんいらっしゃいますが、そういう方々との対応につきましても、堂々と応対ができるというのが利点だと思います。

それから、実験で培われたプラン・ドゥ・シー（Plan-Do-See）ですね。これは卒業してから実感したのですが、課題解決の方法とか問題解決とか、それから目標値の設定とか、そういったものはどこの分野に行っても必要なことでございます。行政の政策決定にも、これがないと提案が通りません。そういうことを勉強させていただいたというのは、たいへんな強みだなと思います。

一つ心残りなことがあります。今では長年の職業経験から、集中して勉強すると割と早く頭に入ります。でも、どうして、せっかくあれだけ勉強の時間があつたあの4年間にきっちり勉強しておかなかったのかと、それが非常に残念です。

さらに言うと、もっと真剣に英会話を勉強しておけばよかったと思います。今、文化観光局にありますので、世界遺産の関係で、今年も6月にスペインの世界遺産会議に行っていました。ところが、英会話ができる方は直接会議内容を聞き、理解することができそうですが、私は通訳を間に置いて、何となくムードで聞いているだけでした。いつも勉強しようと思いながら、その場に臨んでしまうというところがございまして。そういった国際会議も多くございますし、来年は奈良県も平城遷都1300年ということで、もっと国際会議も増えてまいります。それまでに何とか英語を勉強しようと思います。

ありがとうございました。

〔安東由則〕 ありがとうございます。続きまして、佐守さん、お願いします。

〔佐守香里〕 これだけ素晴らしい方々がおられる中に、なぜ、今、私がいるのかと、ちょっと悩んでいます。

私は平成10年に、音楽学部の声楽専攻科を修了した佐守香里と申します。現在は、オペラ団体である関西二期会に所属し、演奏会などにも出演させていただいています。また、レイドバックミュージックスクールという音楽教室で、毎日、声楽・ヴォーカル・ボイトレーニングを、5歳から78歳くらいまでの幅広い年齢の方に教えています。ジャンルも演歌、シャンソン、クラシックなど幅広く、時にはしゃべり方まで習いに来る方に、レッスンをさせていただいています。

今まで自分自身が学んできたことを土台にして、こういう仕事ができていることをとてもうれしく思っています。また、それを自分なりにアレンジしてレッスンをしているのですが、全然歌えない、声が出しにくいと言って来られた方が、1年くらい経ったときにすごく歌えるようになって、とてもうれしいとってくださることがあります。私が何かを伝えて、そのことによってものすごく喜んで幸せになってくださり、それを毎日見られること、しかも30分ごとに人が替わって、みんな幸せになってくれることがすごくうれしくて、この仕事は天職だと思って頑張っています。



大学時代の思い出としては、たくさんありますが、まずは恩師、師匠との出会いです。音楽ですのでマンツーマンで教えてくださる師匠ができました。そのときに出会った先生が本当に素晴らしい方でした。はっきり言って、私は本当に全くできなかったのですが、そのできなかった私を見捨てることなく指導してくださいました。私は今もドキドキしていて、マイクを胸に当てたら、バクバクという音が皆さんに聞こえるのではないかなと思うくらいなんです。すごい上がり症で、歌っても、歌っても緊張して全然だめだった私を、ため息と涙を流しながら「どうしてかね、どうしてかね」と考えて、「じゃあ、あなたやったらこうしてみたら」「ああしてみたら」と言ってくださったのです。今もその先生に習っているのですが、「あなたみたいに手のかかった生徒はいなかった。本当に苦労させられたから、今は結構らくよ。いろんな生徒がいるけど、何でも対応できるわ」と言ってくださいます。そういう先生と出会えて、そのおかげで憧れだったオペラであるとか、演奏会とかにも出させていただけるようになりました。一生懸命指導してもらえる先生に出会えたのが、一番の大きな思い出です。

今の音楽教室で教えるということは、私の大好きな仕事です。私がすごく真剣に教えられるのは、この師匠が私に対してすごく真剣に教えてくださったからであり、真に教えるということ、レッスンを通して、自然に教えていただけたからだと思っています。

私は、この大学の特徴でもある学友会という組織で、総務委員長をさせていただきました。そのことによって、普通の一般学生であつたら全く経験できないような有意義な経験をたくさんさせていただきました。

まず、総務委員というのが、各学科から1名ずつ選出されます。立候補される方もいますが、私は当たらないように欠席したら当たってしまいました。初めはちょっとふてくされていましたが、毎日ミーティングがあつたので、その決められた日から毎日行きました。ものすごくやる気のある人たちがいっぱいおられるので、「ああ、私、この中で1年間もまわれるのかな」と、とても不安になりました。また前年度の総務委員会の先輩方が、怖い感じでいらんではるんですね。その中で、自分の意見を的確に伝える、そして、人の意見に対して的確な答えをする。これほど苦手なことはないというような日々を毎日繰り返しているうちに、何を血迷ったのか委員長になりたいと思ってしまいました。本当はそこそと欠席でもできそうな部署を探して入ろうと思っていたのですが、やるならやっぱり委員長をやろうという気持ちでなっていました。それが一番苦しい思い出です。

それからいろんな経験をしました。12月に委員長に決まって、1月に阪神大震災が起きました。そのとき、普段の大学では経験できないような、そしてもちろん総務委員長をやっても経験できないような経験をしました。震災後すぐに大学の方からも要請があつて、ボランティアを何とかして立ち上げました。すぐに要請されたところにボランティアを送ってほしいということで、自分の家も何かめっちゃくちゃになっているのですが、なぜかボランティアの張り紙を学校に張りに来ました。そして申込みの電話を受けて、全体を統括してボランティアを派遣して、自分も参加しました。役所の方たちといろんなコミュニケーションをとることによって、何か大人の社会の裏側みたいなものも見てしまいました。でもすごく真剣にやったおかげで、今でもその役所の方たちと交流があります。

また、それのご褒美みたいなことがたまたま回ってきました。日本の学生代表が台湾へ行くというイベントがあつて、それに参加させていただきました。全国のいろんな大学の学生組織の中で委員長をされていたり、事務局長とかで頑張っている方々、32、3名の集まりに入れていただいて、台湾まで行きました。途中でまた、場違いな雰囲気だなということには気づいたのです。みんな経済とか政治とかをすごく勉強している方ばかりでしたので。私なんか音楽を中途半端にやっているだけでしたのに、台湾の政治家との意見交換の場に出してしまったのです。何もわからないままに参加することによっ

て、世の中の同じ世代の人々でも、学ぶことが違うとこんなに違うのかとしみじみ思いました。

総務委員長として活動させていただいて、文化祭で挨拶をさせていただいたり、普段だったら関係することのできないような学長先生や諸先生方とも直接お話をする機会がありました。そういう中で緊張感も学べましたし、人の立場に立ってものごとを考えると、リーダーシップをどのようにとっていくのかも体験しました。また、さまざまな年代や、役職の方と交流させていただいたので、コミュニケーション能力が身についたと思います。目上の方にはどうやって話すと話が通じるのかというテクニックも身につけられて、今の仕事にも役立っていると思います。それが私の大学で学ばせてもらったことです。

身につけておけばよかったと思うのは語学ですね。私たちは声楽科なので、必須言語としてはイタリア語が入っているんですね。ただ、イタリア語もよくよく思い出してみると、前期10回、後期10回、1年間しか学んでなかったんです。当時はすごくしゃべれると思っていましたが、20回の授業で何がしゃべれるんだというのが実感です。しかも、英語が必須じゃなかったのも、ラッキーと思いました。その代わりにドイツ語とかフランス語とかも歌には必要なので、学科の授業と全学共通教育の授業でフランス語を受講して、ウキウキしていました。しかし、世の中でやっぱり必要なのは英語です。できれば学科でもっとちゃんと英語があればよかったと後悔しながら、今、必死で英語を勉強する気持ちになっているところです。

以上です。

〔安東由則〕 ありがとうございます。ちなみに、本学でも今は英語が必須になっていますので、付け加えておきます。

では、最後になりますが、伊覇さん、お願いします。

〔伊覇ゆかり〕 伊覇ゆかりと申します。

私は、平成18年度に短大人間関係学科を卒業し、大阪ガスのガス科学館に就職いたしました。幅広い年齢のお客様に館内をアテンドする仕事をしていたのですが、2年間勤務した後、今までの経験を生かして、子どもとずっと接するお仕事が何かないかなと探しておりまして、今勤めているキッザニア甲子園へ転職をすることにいたしました。

キッザニアとは、ご存じの方もいらっしゃるかも



しませんが、子どもたちのための体験型施設です。子どもたちに、働くということを実際に行ってもらい、仕事を学ぶことができる場所です。3歳から15歳までの方に働くおもしろさ、気づきや達成感を感じていただけるように、私たち従業員がレクチャーをしながらサポートしております。幅広い年齢のお子様にあわせるというだけに、対応の仕方も気配りの難しさも日々感じております。自分自身が向上できていることも毎日感じており、また勉強にもなっていますので、やりがいを常に感じながら仕事に務めております。

現在、私は、そのキッザニア甲子園の中にある、デパートパビリオンでパビリオンマネージャーをしております。社会人経験は浅いのですが、本日は大学時代の話も含めて皆様にお伝えさせていただきます。

私の在籍していた人間関係学科では、主に心理学と社会福祉学を学んでおりました。カウンセリングと対人関係の授業では、カウンセリングの方法について学ばせていただきました。カウンセラーとは、クライアントに答えを出してあげるのではなく、クライアント本人が答えを自ら導き出せるように、しっかりと話をしてあげることだということ、そして聞き方が大切だということを学ばせていただきました。

これは、カウンセリングにとどまらず、人と人が会話をするときにも言えることなので、例えばお客様からご意見をいただくときも、そういった人と人との話なので、言いたいことがあっても、まず相手の話を最後まで聞くということを実践しております。そうすることによって会話も解決策もスムーズに進行し、とても対話がスムーズに行えております。

また、私は、社会福祉に興味があってこの学科を選んだのですが、その中でもレクリエーションの授業や余暇活動の支援実習が、とても楽しかったことを覚えております。講義だけではなかなかわかりづらい、想像しづらいこともあったのですが、実際に体を動かしながら、体験することで、余暇活動やレクリエーションがなぜ必要なのか、その本当の意味を知ることができました。実践することによって、私がレクリエーションのインストラクターだったら、あるいは余暇生活指導員だったら、対象者が何を求めている私は何をすべきなのかと、さまざまな視野から深く考えることができるようになりました。このように、相手の立場に立って物事を考えるという力は、大学時代に養えたと思っております。

最後に、私の大学生活で一番思い出に残っていることは、体育祭のコスチュームに参加させていただいたことです。私は、クラス幹事をやっていたため、参加メンバーも自分で集めないといけなかったのですが、私も含めてダンスの経験者が多かったこともあって、たくさんの学生が参加してくれて、毎日ダンスの練習をしておりました。私は、大学時代にクラブ活動をしていなかったのも、まさかこんなすばらしい経験ができるとは思っていませんでした。メンバー全員でつくり上げたコスチュームによって、最後の学生生活を

謳歌することができました。また、一つの目標に向かってみんなで取り組むことで仲間との絆も深まりました。

今でも大学時代の多くの方とつながりがあり、それが大切な友人です。すてきな友人に出会えただけでも、この大学で学べたことは本当によかったと強く感じております。勉学だけではなく、体育祭や文化祭など、学生が力を注いで取り組む行事があったことで、一つのことをみんなで協力し合うという、一緒になし遂げる力をこの学校で身につけることができたことに、非常に感謝をしております。

私は、短期大学だったので、大学に在籍していた期間は2年ととても短かったのですが、多くのことを学び、また、たくさんの思い出をつくることができたので、大変充実した学生生活を送ることができました。

以上です。

〔安東由則〕 ありがとうございました。

もっといろいろ裏話なども含めて語っていただけたら、もっとおもしろいのでしょうか、時間がないので申し訳ありません。

現役学生による学びの振り返り

〔安東由則〕 これまで卒業生の方にお話いただきましたが、現役の、現在進行形の学びはどうか、その声を聞いてみようということで、二人の現役の学生さんに来てもらいました。その二人に武庫川女子大学での学びについて語っていただこうと思います。

まずは、生活環境学部情報メディア学科の新井さん、お願いいたします。

〔新井菜月〕 生活環境学部情報メディア学科に所属しております、3年の新井菜月と申します。よろしくお願いいたします。

私がこの大学で学びまして、最もよかったなと思うことですが、それは先ほど佐守さんにお話しされました学友会活動で、私も佐守さんと一緒に、総務委員会の委員長をさせていただいております。私の場合は、もともと私の前の先輩がいろんな事情がありまして、途中で総務委員会を、続けることができなくなりました。いきなり前の委員長から電話があって来てくれということになり、びくびくしながら行って、引き受けることになりました。その際に、私の場合はリーダーシップをとることが中学・高校の時代から何度かありまして、それがいい経験であったことと、先輩の方から就職活動にも役立つからやってみなさいと言われて、やらせていただくことになりました。

引き継ぎをしながら、私は前の委員長の先輩に「あんたやったらできるから頑張ってみ

て」という説得をしていただきまして、委員長になりました。各学科の幹事長さんがすごくリーダーシップをとることができる学生ばかりですので、会議でたくさん話し合っ、ぶつかり合う中でそれをまとめなきゃいけないということで、すごく悩みました。

その際に、同じ学科でバイト先も同じ先輩に私が、「顧問の先生に相談しようと思うんです」という話をしたら、「何を相談するの」と言われました。そして「自分の考えは持っているの」と言われたんです。私は何も自分の考えを持っていなくて、ただこういう現状の中で、どうしたらいいですかということだけを相談しようと思っていました。そのことを伝えたら「そんなこと、今は通用するかもしれないけど、社会に出たら通用しないよ」と言われました。「あと何年間かで社会に出て、自分の悩みとかを、相談する機会があるかもしれないけども、それをする際に自分の意見を持ってないと捨てられてしまうよ」と言われました。その際に、「ああ、私今は学生なのですが、今やっている経験というのは社会に出る一歩手前のすごい経験をしているんだな」ということに、その先輩の一言で気づきました。

それからは、自分がもし不安になってしまっ、て相談したい場合があったなら、自分の意見と、自分の意思を持って、それを顧問の先生に相談して、その際にいろいろ意見をいただいて、そしてみんなに報告して一緒に考えていくようにしています。

そういう経験ができるのは総務委員会に所属できたからだと思っております。勉強とかでは、そこまではできませんので、すごく残っている思い出はないのですが、学友会活動を通して、学科に所属して普通の勉強をしているだけではできないことをたくさん学べたので、それが今一番よかったなと思っていることです。

ありがとうございます。

〔安東由則〕 卒業したら感じ方が変わるかもわかりませんが、現在進行形の学びについて語ってもらいました。ありがとうございました。

もう1人、文学部の健康・スポーツ科学科の4年生、後藤さん、お願いいたします。

〔後藤早紀〕 文学部健康・スポーツ科学科4年の後藤早紀と申します。よろしく申し上げます。

私は、最初は短期大学部の健康・スポーツ学科に所属しておりました。編入学を経て今は四年制に所属しております。

学科の勉強のことも紹介したいのですが、今日、私が紹介させていただきたいのは、先ほど伊覇さんがおっしゃっていた体育祭のことです。私は応援団に所属していました。1年生のときに人数が足りないということで、本番1週間前にいきなり呼ばれて、人数合わせの形で入団いたしました。既に入団している学生には「すごく歓迎されるよ」と言われ

ていたので、ウキウキして入りました。しかし、本番の1週間前だったので、もう死にも
の狂いというか、すごい状態になっており、歓迎どころか、早く覚えることだけに追いま
わされて、すごくしんどい思いをしました。たった1週間なのですが、先輩の指導が本当
に厳しくて、練習帰りに自転車で駅から家に帰るとき、車が飛んでこないかなとか、看板
が落ちてこないかなと考えるくらいつらいこともたくさんありました。

そんなつらさを経験したにもかかわらず、結果としては3位ということになってしまっ
て、すごく悔しい思いをしました。もうやめてやると思っていたのですが、次の年の副団
長に選ばれてしまい、やらないといけない状況になってしまいました。でも与えられたか
らにはこの悔しさをぶつけてやろうと思い、1年間かけて応援団優勝という目標に向けて
準備をしました。

体育祭といっても、有志の集まる応援団なので、人数が集まらないことには始まりませ
ん。短期大学部の健康・スポーツ学科というのは、常に1、2位を争うハイレベルな学科
なんですね。しかし最初、本当に人数が集まらなくて、このままじゃダメじゃないかなと
思い、みんなのいないところで泣いたこともありました。それでも、授業の終わりに1年
生のクラスに顔出しに行って、「入って、入って」と頼んで、何とか人数を集めることが
できました。

1年生のときの悔しさを2年生全員が持っているので、みんなで話し合いを何回も何回
も重ねて、いろいろな壁を突破しながら、乗り越えながら、1年生が入団してからの2カ
月間くらい本当に頑張っていました。その結果、優勝することができました。私はその
とき、総務委員会にも所属しており、学科の代表もしておりましたので、コスチューム
の方にも少し顔を出しながらやってきました。コスチュームも、前年度が2位という結果
で、応援団と同じように悔しい結果に終わっていたので、コスチュームと応援団の両方と
も優勝という目標が達成できたことを本当に嬉しく思っています。

武庫川女子大学で本当によかったなと思うことは、応援団に参加できたこともそうす
し、短期大学部のときには、学科の幹事長と総務委員会をさせていただいたこと、そし
て、今はオープンキャンパスの学生スタッフとして、司会やトークライブをさせてもらっ
ていることです。もう一つ、「Muko ナビルーム」というものが今年から始まったのです
が、その中で、休日に受験生や保護者の方が武庫女の見学に来られた時、その案内など
を行っております。

いろいろなところに首を突っ込んでいたら、すぐ声をかけていただいて、こんなにいろ
いろな経験ができるなどとは、本当に入学する前には思ってもいませんでした。今、4回
生で就職先も決まっているのですが、その就職先に出会えたのは、こういう活動をしてい
たからだと思い、本当に武庫川女子大学に入学できてよかったなと思っております。

以上です。ありがとうございました。

〔安東由則〕 今も昔も地獄はあるみたいですね。皆さんにいろいろ語ってもらいました。聞かせていただいて私は少しホッと胸をなでているのですが、それはやはり授業とかゼミということで、学問や授業からいろいろ学ぶことがあったことを卒業生のどなたからも言っていたことです。当然といえば当然なのですが、やはりそこが皆さんの一番の基本になっていると思います。いろんな意味で奥深さやおもしろさ、あるいは何をやるにしてもその経験がその基礎になっているというお答えをいただいたと思います。

もう一つは、クラブやゼミ、それから学友会などにおける、同期生や先輩－後輩といった人間関係における支え合いや厳しさを通しての切磋琢磨であるとか、リーダーシップということが出てきたかと思います。

それから、三つ目は応援団やコスチュームという、学生が主体となってやっているもの、特に伝統行事というものの意義を感じました。そうした行事においては今も昔も非常につらい経験もされたようです。私もクラス担任をやっていて、いろいろ1年生からの愚痴を聞かされました。とてもつらいこともあるようです。しかし、そうした学生たちも3年生、4年生になれば自慢そうにその経験を語っていますし、あるいは卒業してもその経験をいきいきと語ってくれます。このような学生や卒業生の言葉を聞きますと、伝統の尊さと申しますか、大切さをひしひしとを感じる次第です。

高橋先生、本学の卒業生・在学生の学びの経験をお聞きになったわけですが、外側から見られてどのように感じられたでしょうか。武庫川の裏側も見えたかと思いますが、ご感想があればお願いします。

〔高橋裕子〕 やはりいろいろな場面で先輩方とともに、あるいは同級生とともに、リーダーシップのスキルをよく磨かれていることを強く感じました。その厳しさの中から、例えば、水泳部の先輩のサンダルの話などもすごく心に残りましたし、そういう横のつながりや縦のつながりを築かれながら、実社会で生きていく力を培われているという印象を受けました。

私たちの大学でも、「私たちの宝は卒業生なのです」と、よく津田塾大学の学長は述べています。まさに武庫川女子大学におかれましても、卒業生は本当にこの大学の宝で、どのようにしてこの厳しい実社会を生き抜いてこられたかということを、次の世代に伝えていく、そういう機会を大学や同窓会が積極的に、作っていかななくてはならないと思いました。それが次世代の女性たちの道を拓く上で、大きな役割を果たしてくれるのではないかと思います。



〔安東由則〕 ありがとうございます。

先輩のご経験を聞いて、それを後輩に伝えてもらうという機会をもっと設けていくべきだとも感じました。時間の関係もありますので、先に進ませていただきます。

女子大学であるからこそ、武庫川女子大学であるからこそその学び

〔安東由則〕 次に、二つ目の課題に移ります。女子大学ということに焦点を当てまして、その学びを振り返っていただきます。女子大学であるからこそ、あるいは武庫川女子大学であるからこそできた学びとは何かを検討していきたいと思います。パネリストの皆さんには、この観点からの学びを振り返っていただきまして、その長所、短所も含めてお話をいただきます。

女子大と武庫川女子大の二つに分けてそれぞれの長所・短所を述べるのはなかなか難しいかとは思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。

今度は向こうの側の伊覇さんからお願いできますか。時間の関係上、お一人3分と短いのですが、よろしくお願いいたします。

〔伊覇ゆかり〕 女子大学でよかったと思うことは、女性同士ということもあって、すぐに友人関係を築き上げることができたという点です。それと、同性ということで安心感がありました。そういったこともあり、入学してすぐに学校にもなじめましたし、この安心感があったからこそ不安も不満もなく、楽しい学生生活を送ることができました。

女性同士ということで、感性や能力を互いに高め合うということもできました。例えば、全く私は興味がなかったんですけども、諸検定や TOEIC の資格を取ろうという友人がいたとしたら、そういった友人が近くにいと、今まで何も興味がなかった私もそれ取得したいという気持ちになり、ともに情報交換をしたり学んだりしたことを覚えております。

また、就職活動を意識し始めたころから、友達同士でも言葉遣いやマナーというものをお互いに気にかけるようになりました。そういった環境づくりという点で、自然とできた友人が周りにいたということもとてもすばらしく、またそれによって、就職がスムーズにいったのではないかと、今になって思っております。

逆に、男子学生がいる共学と比べることはちょっと難しいと思うのですが、共学に入っていたらどうなのかなと考えます。社会に出ればほとんどの職場では男性がいますし、また、男性のいる中で私たちも働いていかないといけないので、男子学生がいる場所で学ぶということも、もしかしたらいい刺激になったのかもしれない。しかし、少なくとも私は、就職をした上で、女子大を卒業したということに何も支障はありませんでし

た。

本校を卒業してから、女子大学は女性が社会に出るための準備期間であることと、そして、大人の女性として成長することができるということを、卒業してから気づくことができました。

武庫川女子大学の特長とよさですけれども、それはたくさんあるのですが、まず大学では珍しいクラス制、担任制をとっているということですね。担任なので先生と学生の距離が近くて、困ったことがあってもすぐに先生に相談しに行くことができました。また、担任の先生以外でも、授業が終わった後に質問をしに行っても、すごく丁寧に教えてくださる先生がいらっしゃいました。中にはメールで質問をすると、私が簡単に1文書いただけなのに、すごく丁寧に、そのことに対してすごく長いメールを返してくれて、そういった優しい先生もいらっしゃったことをすごく覚えております。

本学での学びについてですけれども、本当に学ぶ環境は整っていました。例えば、多種多様な本がそろっている図書館もありますし、パソコンの設置台数も十分でした。本学では、学生自身が学ぼうという意識さえあれば、幾らでも学べる、すばらしい大学だと思っています。

以上です。

〔安東由則〕 ありがとうございます。では、続きまして佐守さん、お願いします。

〔佐守香里〕 今回の質問で、女子大の長所とか短所とか聞かれたときに、私は中学2年のときから武庫川の附属中学校に通って、そのまま高等学校に行き、大学に行きということだったので、女子大であること自体に気づいていないくらい自然に大学時代を過ごしてしまいました。それで、長所と言われて改めてどうだったのかなと考え直したときに、私にとって長所と感ずるところは、やはり同性ばかりいたということで、それで学業に専念できたのではないかと、同じように、自分自身を自由に伸ばしていくことができたんじゃないか、と思っています。私の性格に関しても、総務の仕事にしても、恥ずかしいとかそういうこともなく、格好つけることもなく自由に成長できたのではないかなと思いました。

短所として感ずるのは、やはり女性ばかりということで、少しだけ世間を狭く見るという癖がついたんじゃないかなと思います。本来共存して生きていくべき男性の欠けた場所ですつといると、もしかしたら卒業して社会に出たときに、先ほども言っておられましたけれども、職場のほとんどの男性がおりますので、その中でうまく自分を出したり、コミュニケーションをとったりというのに、ちょっと時間がかかったかなということは思いました。

武庫川女子大学のよさということでは、私は音楽学部ですから本当に少人数で、1学

年、40から50人でしたので、すべての学生に目が向けられ、落ちこぼれることなくいろんな授業を受けることができました。ほかの音楽大学ですと人数も多いので、上位者しか受けられない授業があったりするようです。私たちの場合はどんなところ（順位）にいても全員同じ授業を経験できて、同じように学んでいくことができた。これは本当にすばらしかったと思います。

また、男性学生がいない分、オペラの試演のときには、本当に手の届かないようなオペラ歌手の男性が来て、「うぉー」と歌ってくださるという、すごくラッキーな経験ができたと思っています。

さらに、この学校が総合大学ですので、全学共通教育というのがあって、好きな授業を受けることができました。音楽のことだけじゃなく、興味のある分野、それがまったく異分野の薬学のものでも、ちょっと薬学科に行って受けてみたり、語学でも、社会的なことでも、何でも学習したりすることができたのは、やはりこの学校ゆえではないか、と思いました。

もう一つ、私は中高からいましたので、そのときからのしつけですね。中学校、高校では正門で一礼するんですね。入るときに「今日もよろしくお願いいたします。いつもありがとうございます」と。初めは何でこんなふうになっているのかなと思っていました。そのうちに、感謝の気持ちも自然と出てくるようになって、店を出ていくときにもありがとうございますと思うようになりました。そういうことがあったおかげで、仕事をしていく上で、愛社精神が早く生まれる。私はここに勤めるのだと思ったその日から、ありがたいという気持ちになれて、仕事にも自然と熱が入ったり、コミュニケーションもうまくとれていきます。また、新しい仕事が与えられ、それも真剣にやると、またさらに上の仕事を与えられるというふうに、すごくいい循環になります。これもやっぱり中高からのしつけのしつけのおかげかなと思って、武庫川女子大学でよかったなと思いました。

以上です。

〔安東由則〕 ありがとうございます。それでは、稲村さん、よろしくお願いします。

〔稲村和子〕 私は、大学から武庫川に寄せていただきました。大学に来たときに、当時、女の子は25歳までに結婚するものといわれていましたので、父親から大学へ行ったら嫁入りが遅れる、それでも家政学部だったら、洋裁も和裁も教えてくれるから行ってもいいというような了解を得て、自分でも何か安直な考えで入学いたしました。それまで共学校におりましたから、年ごろの女の子にとって、女性ばかりで何かおもしろくない環境だと思い、楽しそうに男子学生と遊んでいる共学校がうらやましかったことも事実でございます。

それともう一つは、家政学部がそうだったのかもしれませんが、お嬢さんばかりで、きれいで上品なところだなと感じました。ここは何と無菌状態な大学なんだ、というようなイメージがございました。一般的に、こんなところに居たら、フランクに男の人とつき合えないのと違うかなとか、構えてしまうのと違うかなとか、それから男性を美化してしまうのと違うかなとも思ったこともあります。

一方、外に出ましたら男性社会でございます。特に、武庫川だけではないのですが、女子大生というのは、ものすごくまじめでよく仕事はするんです。係長級までの仕事はそれでいいのですが、その上になったら、人にうまく動いてもらうための力量が求められます。そういうところが割と欠けているのではないかと思います。男性についての知識とか免疫とかがなくて、幅広い視野に欠け、女性中心の考えに偏ってしまうという弊害はなきにしもあらずだと思います。

ただ、先ほども申しましたように、生活者の視点というか、次代を担う子どもを育てていく母性、そういう観点から社会現象を見る目を養う場だというのは、在学中からずっと教えられてきました。今の職場には、法律や経済、工学、農学など、経済性や合理性などの視点でものごとを見て解決していこうという方はたくさんおられます。それとは異なった切り口、例えば生活者といった視点でとらえて、提案・実践できる数少ない人材を育てる場が女子大だというように考えております。

特に、武庫川女子大につきましては、在学中にはそれほど思わなかったのですが、万葉文化館に勤務していたところに、OB会の奈良県支部の先輩方が訪問してくださいました。その方々の見学でのまじめで真摯な態度に、案内を頼んだ研究員や学芸員たちが感心しておりました。武庫川女子大といいますのは、派手さはありませんが、きちんとしたいい家庭、いい生き方のできる女性を育てる場かなと思いました。

在学中は、先程来、述べられておりますように、ちょっと窮屈でした。クラス制とか、私たちのときは上靴への履きかえがあったんですよ。入り口でごあいさつをするとか、しつけの効いたお行儀を教えてくれる、年ごろの女の子にとっては数少ない貴重な場でした。

それから、今になって思うのですけれども、すごく上質なものに囲まれているんですよ。環境といい、友人といい、先生方といい、こういった恵まれた状況にありましたので、上質なものを育てる目の基礎をつくってもらったと思います。ハイソなものにもおびえない、自分というものを考えます。そういった人々を育てる場として、女子大というのはやっぱり大事なところだと今考えている次第です。

ありがとうございました。

〔安東由則〕 ありがとうございました。次に木村さん、お願いします。

〔木村泰子〕 今お伺いして、同じ大学で学んできたのかなと思って聞いていました。

女子学生ばかりの学びの場、その最たる長所は、やはり一人ひとりにオール・ラウンドな学びと体験が与えられることだと思っております。これが最も大きな女子大学の魅力であり、これをいかにして長所に変えられるかが問題だと思います。

小学校でも、1年生と6年生では大きな違いがあります。1年生の子どもたちの集団、その中の男の子と女の子、中学に行く前の6年生たちの集団、その中の男の子と女の子は全然違いますよね。低学年の間は「これしょうか」「これどうする」「だれかしたい人」と言ったら、皆がしたいから「したい、したい、したい」と、自分からその学びを獲得するための積極的な動きを、一人ひとりの子どもが本能的にとります。ところが6年生になると、「したい、でも失敗したら恥ずかしい」と思うようになる。恥ずかしいと感じる対象は、女の子の場合は男の子、男の子の場合は女の子です。その目に見えない空気が積極的な学びを妨げているのであり、それをいかに私たちが崩すかということで、日々奮闘しているのです。そういう意味では、暗黙のうちに、これは男子学生がやってくれるだろうとか、これは女子学生がやるだろうとかいうような空気が、支配的なのです。その意味では、そういう空気が一切ない女子大で人としての学びを確実に獲得できること、それが女子大学の大きな魅力だと思います。

反対に、短所というのは、長所イコール短所といえるかもしれません。大学の2年間、あるいは4年間、女子学生ばかりの中で学んでいる学生自身が、女性だからという視点に立っていると、自分自身もそうですが、きっと社会に出たときに生きていく力は弱くなっているだろうと思います。つまり、女性だからということではなくて、社会で生きていく1人の人間として学ぶのであれば、女子大学の短所を克服できると思います。

〔安東由則〕 ありがとうございます。それでは、最後に本仲さん、お願いします。

〔本仲純子〕 私は4年間だけ女子大学で過ごしました。高校まで共学でしたし、それから大学院は男性と女性が修士課程では半々でした。そして勤務した先はほとんどが男性で、女性がほとんどいないという状態でした。

女子大を出た後、すぐ工学部へ行っていたら、もうパンクしていたと思いますが、間に男性が半分のところ（徳島大学大学院薬学研究科）があったので、少しは救われたかもしれません。女子大学ということを考えたとき、やはり男性と女性が一緒にいるところの教育よりは、女性の特色を生かした教育はしやすいと思います。女性がこれから自立していくべきだという、この大学の立学の精神ですね、それは日本の伝統的なものを生かしつつ自立した女性をつくりたいということであり、この精神で女性を教育していかなければな

らないと思います。男性に従属していることをよしとするようでは、しっかりとした女性にはできないと思います。自立した女性を教育するということは非常に大切であり、武庫川女子大学ができたのも、そういう目的のためだと思います。

私は、先ほども申しましたけれども、就職した途端に、自分が女性であるということを実感させられました。まず、女性は研究ができないとか、結婚したらやめろとか、せめて子どもができたらやめろといったことを、具体的に言われながらずっとやってきました。ただ、それまでの私には、女性という意識が自分の頭の中に全くなかったのですが、就職した途端に自分が女性であるということを実感させられてしまって、しかも女性であるからという理由だけで、否定されるという場面ですとずっと過ごしてまいりました。

その中でいろいろ考えてきたのですが、やはり女性というのはこの世の中に半分います。この半分の女性が、全部の人類を産んでいるのです。10カ月間は、男性も女性も女性のおなかの中で過ごします。そして子どもをちっちゃいときから、育てていくということを考えたときに、女性の力がいかに大切であるかということを、私としては非常に真摯な感じで受けとめました。

女性がしっかりしてないと、いい国はつくれないと思っているんですね。男性もやはり女性から生まれますので、母親の影響が非常に大きいということです。そういう意味で、女性をしっかり教育していく、しかも自立した女性をつくっていくことが非常に大切であると実感しております。

女性が、男性と同じでなければいけないかという点について、私のとらえ方は少し変わっています。男性も女性も人間としては同じです。しかし、非常に表層のところで男性と女性には違いがあります。男性は、大まかに言って力があったり、新しいことを考えつくのが早かったり、繰り返しを嫌がったりするという特性があります。女性の方は、粘り強く、同じことを繰り返しても平気です。これは、恐らく子どもを育てるときに必要な能力であろうと思います。そこで日本と世界を考えたときに、男性と女性がそれぞれの特徴を生かしながら共同してやっていかないと、いい世界はできないと思っております。

先ほど申しましたポーラログラフ討論会というものがあまして、私が非常に困ったときに、そのポーラログラフ学会の先輩の女性の先生がおられまして、その先生が励ましてくれたことによって、非常に女性であるということに対して自信を持つことができました。

それから、仕事をしていきますと、子どもをなかなか産めません。そして産んだらやめろと言われて、私は非常に悩みました。文学者でもう亡くなられた芹沢光治良先生という方が、『巴里に死す』という本を出しておられます。私はこの先生に非常に傾倒しておりましたので、その先生のところにお話に行ったことがあります。そして、非常に女性として悩んでおりますということをお伝えしました。

そのときに話してくださったのですが、日本はまだ遅れているが、アメリカではどんどん女性が活躍しており、日本も、近い将来そういう時代になるから、頑張るよにということで、キュリー夫人の話をしてくださいました。先生がパリに留学されていたときに、友達がキュリー研究所におられて、そこでキュリー夫人と話す機会があったとのことでした。そのときに、芹沢先生がキュリー夫人に、子どもを育てることと研究することの両方をやられているけれど、どういう気持ちでそうしているのかと尋ねられたそうです。そうすると、キュリー夫人は、研究することも社会への奉仕であるが、子どもを育てることも社会への奉仕であるので、どちらも均等にしているとのことでした。そういうことがありまして、女性の役割というものが、パッとわかった気がしたんです。

そういう意味で、女性であるということがいかに大切であるかということを、それぞれの女性が自覚して、自立した女性になるために努力するということが非常に大切だと思います。そういう意味で、集中的に女子学生に教育できる女子大というのは、非常に効果的な教育のできる場であろうと思っています。

以上です。

〔安東由則〕 ありとうございました。

それぞれ女子大学のよさについて語っていただきましたが、高橋先生の講演の内容ともかなり重複し、関連した視点のあるお話しであったと思います。

高橋先生、今の5人の方の意見を聞かれて、どのような感想やコメントがおありでしょうか。

〔高橋裕子〕 やはり、それぞれの卒業生の方々が、さまざまなターニングポイントでいろいろなメンター（mentor）に出会われて、それで道を切り拓いてこられてきているということを強く感じます。

前回の教育研究所の研究会（2005年12月）でも申し上げたのですが、これからの時代は女子大か共学かという二項対置的な問いの立て方は、もう時代遅れになっています。そして、それぞれのニーズに合った大学に進学する学生たちが増えてきています。そういう中で、それぞれの大学がどのような特色を打ち出していくかが問われると思います。共学大学の中にも、女子大学のような雰囲気をつくっていくことが求められます。女性研究者支援センターも同様なのですが、多くの国立大学、旧帝大系の大学がこういうセンターをつくって女性の支援を始めています。そこで女子大学はさらに女性支援をしていく上で、どのようなことを、改革して進めていかなくてはならないのかが問われているように思います。

先ほどのグレース・ホッパー会議も、同じようなことを提示していると思います。アメ

リカ合衆国においても、女性の参画ということは、まだまだこれからというところがあります。むしろ北欧の方が、女性が先進的な役割を果たしているようです。そういう中で、女性たち自身も、次の世代に対して何ができるのかということを — ご定年が近い先生もいらっしゃると聞きましたけれども — そういう先生が、次の世代のために何ができるのか。武庫川女子大学は、そのような卒業生をリソースとして活用されていて、同窓生が次の世代を引き上げてくださる、そういう牽引力として活用していかなくてはならないと思います。そのような試みが、これからの10代や20代の女性たちの道を、さらに広げていくと思います。今日のパネリストになられた方々は、そのような決意をきっと持っていていらっしゃる、そういう卒業生ではないかと拝見いたしました。

会場からの質問

〔安東由則〕 ありがとうございます。

会場の皆様には、今までずっとお聞きいただきましたが、今のパネリストのご意見あるいは高橋先生のコメント、さらには先ほどのご講演も含めて、何かご質問やご意見がありましたら、ぜひ発言をお願いしたいと思います。どなたかいらっしゃいませんか。

よろしければ、お名前を言っていただければと思います。

〔高橋享子〕 武庫川女子大学生活環境学部食物栄養学科の高橋です。私も本学の卒業生で、本学で教員をしておりますので、卒業生の皆様にご質問をさせていただきたいと思います。どなたからでも結構です。

長く内部におりますので、内部のいいところ、あるいはまだ不足しているところも十分理解しているつもりです。しかし、なかなか外からの視点をもつことは難しいように思います。皆さんが卒業生として外から武庫川女子大学の後輩の卒業生を見られ、また卒業生に接しておられて、ここがまだ足りないよとか、ここをもう少し充足したらもっとよくなるのではないかなという点がありましたら、教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

〔安東由則〕 それでは、本仲さん、お願いします。

〔本仲純子〕 武庫川女子大学の発展というのは、もう端から見ても驚くばかりでございます。非常に時代の波に乗りまして、新しい学科をどんどん立ち上げておられます。そういう意味で受験者も増えていますし、私なんかのころよりもずっと入学するのが難し

くなっておりますので、本当に驚いているんです。私は毎年、「大学ランキング」を見ます。徳島大学を見ますので、武庫川女子大学も必ず見るのですが、ブランド性だとか経営のいいところとか、皆ランキングされているのを見させていただいております。

ただただ驚くばかりなのですが、もし気になるとすれば、学科を新しく立てたときに、その充実度でしょうね。つくったけれど、どのくらい中味が充実していくのか、そこでの教育はどうなるのか、そういうところは非常に興味のあるところでございます。ただ、経営手腕がすごいということで、本当に驚いております。同じ大学人としても感心するところでございます。

〔安東由則〕 ありがとうございます。
木村さん、お願いします。

〔木村泰子〕 もう今年で大空小学校は創立4年目ですが、毎年、教育実習生がたくさん来てくれます。教育実習生の学ぶ姿を見ると、本学の教育は素晴らしいと感心しています。大学の授業だけではなくて、授業を基盤に置いて、将来、自分がどんな道を目指し、その道で自己実現を図るため、外へ出ていくまでの期間に何が必要なのかを見極め、そういうかかわりをととても手厚くしておられます。採用試験の面接の練習とか、子どもの前に立ったときのノウハウとか、そのあたりのとても細かい部分での丁寧なかかわりがうかがえます。このあたりについては、私たちの頃はほとんど記憶にないことなんです、今の学生はとっても幸せだと思います。大阪市でも、新任採用をされる武庫川の方々が、ものすごく急なカーブで上昇しながら伸びています。大阪市の教育を支えているのは武庫川の卒業生だと言い切れる状況になっています。

〔安東由則〕 卒業してからも、先生として、大丈夫だということですね。
次に稲村さん、お願いします。

〔稲村和子〕 私は常々、女性の自立というのは精神的な自立、それから経済的な自立、そういったものがあってのことだと考えております。

その中で、一般の女子大生も含めてなのですが、県庁には大卒の若い女性がたくさん働いています。

アルバイトの人たちに、グレードアップするために公務員試験を受けてみないかと声をかけてみても、自分の今の生活が満ちたりているからか、そういう暮らしの方がそこそこの給料ももらえるし楽だからか、それで欲がないようです。もう結婚したらどうなるかわからないしと言って遠慮されます。

学校としては体制を整えていただいていると思いますけれども、学生さんたちに自分の将来を見据えてほしいと思います。公務員になってから、なぜ私がやめずに今までいるかと言うと、やはり将来、退職したときに自分の生きていくお金が欲しい、それだけです。そういったところも見据えて、就職を真剣に考えてもらいたいと思います。

パネルディスカッションからの示唆

〔安東由則〕 ありがとうございます。質問をいただいた高橋享子先生、よろしいでしょうか。

もっといろいろお話を伺いたいのですが、時間となってしまいました。卒業生の方にいろいろ語っていただいて、本当に豊かな資源といいますか、リソースをお見せいただきました。それらを、私たちはこれからの大学教育に役立てていきたいと思っています。今回のシンポジウムは一つの序幕でありまして、まだまだこれからお聞きすることがいろいろあると思いますので、皆様方にはこれからもご協力をよろしくお願いいたします。

今日は短い時間ではありましたが、女子大学での学びを考えていく上で、非常に重要だと思えるさまざまな経験であるとか、観点が語られたと思います。それは、もちろん高橋先生のお話を含めてであることは申すまでもありません。あえてそれをまとめることはできませんし、できないと思います。今日の講演や議論を通じて会場の皆様が大切にしなければいけないと感じられたことを、これからどう生かしていくのかということを、考えていただければと思います。

女性教育の大切さや女子大学としての視点といったことを真剣に捉えて、それをどう生かしていくのかについては、本大学の教職員が本当に真剣に考えて取り組んでいくべき課題であり、それができるかどうかは私どもの姿勢にかかっていると思います。

本日、コーディネーターをという役割を引き受けさせてもらい、皆さんの意見をお聞きしておりまして、最後にまとめではありませんが、簡単に感想めいたことを言わせていただきます。

まず一つは、学生の学びを高めるための大きな可能性の一つとして、卒業生という存在の大切さということを改めて感じました。本当に短い時間でしたけれども、皆さんには、卒業生ならではの視点、あるいは卒業生ならではの率直さで語っていただいたと思います。高橋先生のお話にもありましたように、女性の社会進出というのは、まだまだ日本では非常に厳しい状況にあります。女性が自立して生きていくためには何が必要であるのか、ということを学生たちに伝え、そして励ましていこうとするときに、このパワーのある卒業生の皆さんの存在が非常に大きいと思います。パネリストの皆さんを初め、卒業生とどう連携してこれからの学部学生の学びを豊かにしていくのかということが、一つの大

きな課題であると考えます。こうした試みを今回だけにしないで、これからも引き続いて卒業生と連携をとりながら、どういうふうに豊かな学びに結びつけていくのかということが一つの課題だと考えます。

もう一つは、逆の方向です。つまり、一生を通じて女性の学びをサポートしていくための女性大学としてどう取り組んでいくのかという課題です。どのように、卒業生に学びのチャンスを開いていくのかということです。卒業後も学びのチャンスを本学で持ってもらうとか、さらには、頑張っている卒業生に対してどう励ましていくのか、どう勇気づけていくのか、あるいはどのようなメッセージを送り続けるのかということを考え、実行していくことが大事だと思います。これは高橋先生のご講演でも述べられておりましたことであり、とても重要な課題です。

武庫川女子大学では、今、「その先が見える大学」をキャッチフレーズにしています。その先を見据えて、女性たちをエンパワーしていく、あるいは励まし続けていくサポート体制をどうつくるのかということです。つまり、大学の中にいる今の女子学生をどうエンパワーするのかを考えるとともに、卒業生に対してもどういうふうに励まし続けていくのかということにも目を向け、双方向で取り組んでいく必要があらうかと思います。女子大学とその卒業生が相互に協力できるにはどのような体制づくりが必要かを考えることの重要性を指摘して、本日のパネルディスカッションを終わりたいと思います。

パネリストの5人の卒業生の皆様、講演に引き続きましてコメンテーターとして参加いただきました高橋先生、そして現役の2人の学生の皆さん、どうもありがとうございました。貴重なご意見を頂き、心より感謝いたしております。

女子の大学進学に伴う諸効果に関する考察

—広義の人的資本論によるアプローチ—

An Examination of Various Effects of Women's University Education
Applying a Broad Definition of Human Capital Theory

西 尾 亜希子*

NISHIO, Akiko

目次

1. はじめに
2. 女子の大学進学率が低くとどまる理由とそれに伴う問題：先行研究の整理から
3. 社会の現況：ジェンダーと学歴による違いと問題
4. 人的資本論と教育分野におけるその応用
5. 女子の大学進学に伴う諸効果
6. むすびに

* 武庫川女子大学教育研究所・研究員、共通教育部・講師

1. はじめに

わが国では、戦前、女子⁽¹⁾は少数の例外を除いて、大学への入学を認められていなかった。しかし、戦後には、新制女子大学や女子短期大学が創設されたり、男女共学大学制が実施されたりするなど、女子に対する高等教育機会は急速に開かれていった。このような女子の高等教育機会の拡大とともに、女子の大学・短大への進学者も急増した。女子の大学・短大進学率について、1960年から2000年までの推移を10年毎にみると、5.5%（男子14.9%）、17.7%（29.2%）、33.3%（41.3%）、37.4%（35.2%）、48.7%（49.4%）である。さらに、2008年には54.1%（56.5%）にまで上昇している（国立女性教育会館 2009）。

このように、戦後、女子の高等教育機会が急激に拡大したことや、それに伴って女子の大学・短大進学率が急上昇し、今日それにおける男女差がほとんどないことをみれば、「高等教育では男女⁽²⁾平等が達成されている」または「高等教育では男女対等になっている」と広く受け止められるのも無理がないように思える。また、北欧諸国、アメリカ、イギリスなどでいわれてきたような「高等教育の女性化」現象がわが国においても急速に進行しているようなかのようにもみえる。

しかし、それでは本当に高等教育では男女平等が達成された、あるいは男女対等になったといえるのだろうか。答えは「ノー」である。例えば、大学と短大への進学者の内訳を男女でみると、男子の場合、そのほとんどが大学に進学するのに対して、女子の場合、大学に進学する者と短大に進学する者とに分かれるという男女差が依然顕著である⁽³⁾。例えば2008年の大学・短期大学進学率を男女別および大学・短期大学別にみると、男子の場合、大学55.2%、短大1.3%（計56.5%）に対して、女子の場合、大学42.6%、短大11.5%（計54.1%）である（文部科学省 2009）。国際的にみても、先進諸国の中で、大学進学における男女差が日本ほど顕著に見られる国はなく、例えば OECD は、「OECD 各国平均では、大学型高等教育の卒業率は、女性が47%、男性が31%と、女性の方がかなり高」いにもかかわらず、「日本では男性の大学型高等教育の卒業率の方がかなり高い」（OECD 2009 62-63）と日本の特異性を指摘している。わが国では、高等教育機関への入学者の動向について言及する際、大学進学率と短大進学率を合わせた「大学・短大進学率」⁽⁴⁾が用いられることが多く、そのために高等教育における男女差が不可視化あるいは隠蔽されているといえよう。その他にも、専攻分野における男女の偏りという問題や、大学院進学率に見られる男女差など様々な問題がある⁽⁵⁾。

高等教育におけるこのようなジェンダー問題については、海外の研究を含め、すでかなりの研究の蓄積がある。次節で考察するように、男子の大学進学率に比べて、女子の大学進学率が低いという問題に限れば、そのような男女差が生じる理由や、男女差があることによって生じている問題について、これまでもかなり詳細な研究が行われてきた。その

一方で、それらの背景や問題点を踏まえて、女子の大学進学に伴う効果の有無についてや、効果がある場合には、どのような点においてなのかについて検討を試みる研究は少ない。特にそのような効果について理論的な説明を試みる研究はほとんど見あたらない。しかし、女子の大学進学に伴う効果を明らかにすることができれば、女子の大学進学を促す契機になるのではないか。

よって、本稿では、女子の大学進学に伴う効果について理論的に検討することを試みる。理論的な説明については、これまでも教育の効果に関する研究の中でしばしば用いられ、特に1990年代後半以降、経済協力開発機構（以下、OECD）によって積極的に活用されている人的資本論を用いることにする。

本稿の構成は次のとおりである。まず、女子の大学進学率が低くとどまる理由と女子の進学が阻まれることによって生じる問題について、これまでの議論を整理することにより、女子の大学進学に伴う効果の検討が必要であることを明らかにする（第2節）。次いで、社会の現況をジェンダーと学歴の関係から考察し、特に女子が大学に進学した場合としなかった場合に着目しつつ、社会の中でどのような違いや問題が生じているのかについて確認する（第3節）。次に、人的資本論と広義の人的資本論の教育分野での応用例について確認することにより、女子の大学進学に伴う効果を検討する上で、広義の人的資本論の活用が有効であることを示す（第4節）。その上で、女子の大学進学に伴う効果について明示する（第5節）。最後に、結論と今後の課題について示す（第6節）。

2. 女子の大学進学率が低くとどまる理由とそれに伴う問題：先行研究の整理から

ここでは先行研究の整理を通じて、女子の大学進学率が低い理由と女子の進学が阻まれることによって生じる問題について考察する。女子の進学が様々な理由から阻まれている現実を認識することにより、女性の能力の開発・活用が遅れにつながったり、結果として人的資本の蓄積が進んでいなかったりする現況を確認するためである。

2.1. 女子の大学進学率が低いことに関する研究

まず、男子の大学進学率に比べ、なぜ女子の進学率が低くとどまっているのか、その理由を探る研究および調査報告は数多く存在する。特にそれらの多くは、親の子どもに対する教育期待にジェンダー差があることについて繰り返し指摘している。例えば2001年に内閣府が実施した「第二回青少年の生活と意識に関する基本調査」によれば、小学校高学年の男の子を持つ親の場合、父母とも約65%が大学進学を期待しているのに対し、女の子を持つ親の場合は、父親41%、母親47%にとどまっている。このように、「親の子どもに

に対する教育期待は、男の子の場合に高く、女の子の場合に低い」という調査結果は、NHK 世論調査部が1973年以来、5年毎に同じ調査方法・同じ質問を用いて継続的に調査を実施している「日本人の意識」調査においても報告されている（NHK 放送文化研究所編2004）。また、「きょうだい」構成や性別が高等教育進学にどのような影響を与えているのか考察する研究もある。例えば、近藤（1996）は1985年 SMM 調査データの分析により、きょうだい規模を統制すれば、出生順位による教育達成の差異はそれほど大きくないものの、女子の高等教育進学では出生順位が上の方が有利になることを明らかにしている。その他、中西（2004）や平沢・片瀬（2008）なども、性別・出生順位と高等教育進学の関係について研究を行っており、どちらの研究も女子が負の影響を受けることを明らかにしている。また、田中（1998）のように、女子の大学進学率決定要因を都道府県別に分析する研究もある。同論文は、女子の場合、短期大学が自宅の近くにあればそれを選ぶが、4年制大学もある場合にはその方を優先すること、自営率が高いほど高等教育進学率が高く、その場合には短期大学進学を優先することなどを明らかにしている。さらに小林（2008）は、現在の高校生の進路選択に最も影響を与える要因として高校生の学力、家計の経済力、性別を挙げている。そして性別に関しては、女子には専門学校や短大進学希望者が多い一方、私立大学進学や浪人希望者が少ないこと、その理由として女子は学力や家計の経済力、さらに親の教育観の影響を受けやすいことを明らかにしている。特に本人の学力が低い場合、低所得者層の場合、親の教育観にジェンダー観が強く影響している場合、高校生本人がそれらを認識している場合に、これらの要素が複合的に作用し、総じて女子は、男子に比べ、大学ではなく、短大もしくは専門学校へ、私立大学ではなく、国公立大学へ、自宅外通学ではなく、自宅通学という選択を迫られるという。

以上の調査結果や研究からは三つの示唆を得られる。第一に、親のジェンダー観が子どもに対する教育期待に強く影響しているということである。第二に、少子化が進行する一方で、高学歴志向の高まりによって、就学期間が長期化したり、学校外教育投資も含めた教育費が高騰したりしているため、性別によって教育資源を傾斜的に配分することによって、子どもの教育戦略を練る家庭が増えているということ（広田 1999）である。そして第三に、そのような教育戦略は、女子の大学進学を犠牲にすることによって成り立っているということである。

今後、高学歴志向が高まることはあっても低下することはないだろう。しかし、小林（2007, 2008）をはじめ、家計による教育負担に関する数々の研究が明らかにしているように、経済的な心配をすることなく、子どもを皆大学に進学させるだけの余裕がある家庭はほんの一部に限られている。このような状況を考慮すれば、女子の大学進学を抑制する力は今後もしもはたらく続けることは間違いない。

2.2. 大学に進学しないことに伴う問題に関する研究

次に、大学に進学をしなかった女性に関する研究についてみてみよう。Britton & Baxter (1999) は、イギリスの大学に入学予定の成人女性に面接調査を実施し、若い時に大学に進学しなかった（またはできなかった）ことがその後の人生にどのような影響を及ぼすのか、女性の心理について考察し、次の二点について明らかにしている。第一に、調査対象となった女性の多くは、強い「教育の『自己達成』指向（‘self-fulfillment’ orientation to education）」があるにもかかわらず、女性の運命として結婚することや家族を持つことが期待され、その期待に応えるように自分の潜在能力を試さないまま結婚に至ったことに対するやりきれなさを感じていることである。第二に、結婚後については、家事、育児、介護など私的領域における役割が評価されていないという思いが強いことである。成人女子学生のうち、既婚女性の多くは、長い間このようなやりきれなさや不満を持ち続けてきており、子育てが一段落した時に、「やっと自分の時間が来た」と感じて、進学に至っている（Osborne 2004, 300）。この研究は、イギリスに限らず、日本においても、大学に進学しなかったことに対する不満感や焦りを抱きながら生活を送っている成人女性が多く、そのような女性の間では大学進学に対する潜在的需要が大きいことを示唆している⁽⁶⁾。

3.3. 先行研究の整理から明らかになったことと本稿の視角

以上、女子の大学進学率が低いという問題を扱う研究について整理を行った。これらの研究からは、(1)「女」に生まれたために、大学に進学する機会を阻まれ、大学に進学できない女子（女性）が多く、(2)そのような女性は結婚してからも不満感や焦りを抱きながら生活している傾向が高いことが明らかになった。これらの研究は、今なお女性女性であるがゆえに不利益を被っていることを如実に表しているといえる。そして、このような問題は女性個人の問題にとどまらない。社会は、政治・経済のグローバル化で国際競争が激化し、少子・高齢化が急速に進行している。そのような状況においては、ジェンダーに関わらず、大学教育をはじめとする高度な教育や訓練を通じて、人的資本を蓄積し、有効活用することが不可欠である。それにもかかわらず、これまで見てきたとおり、女子については、高等教育における能力開発が著しく遅れている。以上の問題点を考慮すれば、女子の大学進学に伴う効果の有無について調べ、ある場合にはどの領域で、どの程度あるのかについて理論的に説明することは、女性個人にとってだけでなく、社会にとっても有益である。

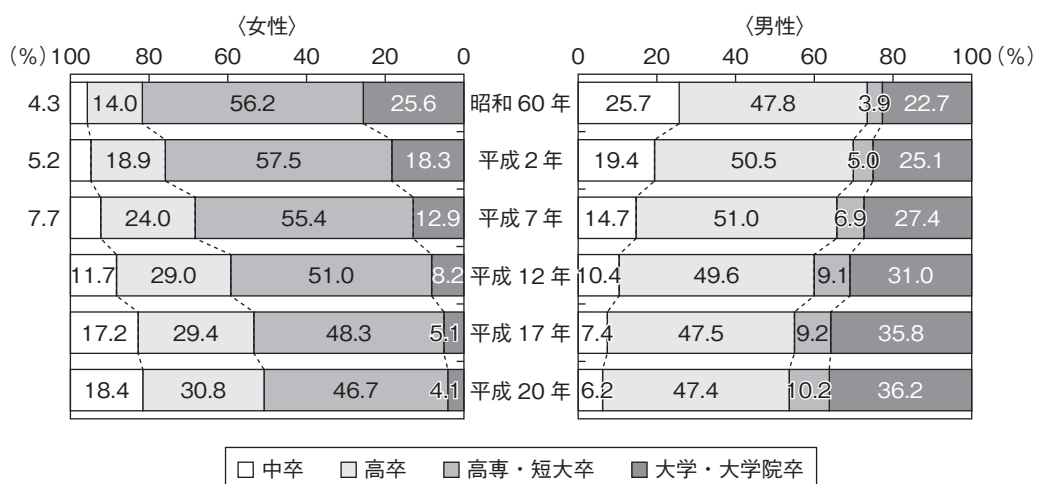
3. 社会の現況：ジェンダーと学歴による違いと問題

第1節で述べたように、本稿の目的は、人的資本論という新たな理論的枠組みを用いて、女子の大学進学に伴う効果について明らかにすることにある。いうまでもなく、その目的を遂行することによって、女子の大学進学を促す契機になればという思いがある。しかし、そのような目的を遂行するには、まずジェンダーと学歴をめぐる社会の現況について認識しておくことが肝要である。いいかえれば、大学に進学した女性としなかった女性の間でどのような違いが生じているのか、また、どのような問題が生じているのかについて把握しておく必要がある。ジェンダーと学歴をめぐる社会の現況がどうなっているのか認識してはじめて女子が大学に進学することによって得られる効果を測れるからである。よって、以下では、ジェンダーと学歴による違いと問題が顕著にみられる領域について考察を行う。

3.1. 一般労働者の男女間賃金格差

労働市場における問題として、正規雇用者など一般労働者における男女間賃金格差の問題がある。内閣府（2009）によれば、2008年では、男性一般労働者の給与水準を100とした時、女性一般労働者の給与水準は69.0とされる。男女間賃金格差について、比較可能なOECD加盟21カ国の中で比べると、韓国が最も大きく、次いで日本が大きい（OECD 2006=2008）。このような男女間賃金格差が生じる理由として、勤続年数、昇進、学歴構成の違いの他、家族手当など、世帯主（多くは男性）を対象とした生活手当のシステムが影響していることが考えられる。勤続年数、昇進、学歴構成の違いについて具体的にみる

図表1 学歴別一般労働者の構成割合の推移



出典：内閣府（2009）66ページの第1-2-6図を複製。

と、まず平均勤続年数は男性13.1年に対して女性8.6年である。管理的職業従事者（公務及び学校教育を除く）に占める女性の割合は9.8%と依然として低い水準にとどまっている。さらに、雇用者全体に占める大学・大学院卒の割合は、男性36.2%に対し、女性18.4%で、女性の場合、高専・短大卒が30.8%と依然高くなっている（図1）。

ここで、最近の男女間賃金格差の状況を詳しくみておこう。2008年の労働者の賃金について、学歴別および男女別でみると、大学・大学院卒が、男性399,600円、女性273,500円（男性賃金の68%）、高専・短大卒が、男性306,500円、女性243,600円（79%）、高校卒が、男性297,000円、女性200,600円（68%）となっている（厚生労働省 2009a）。全学歴で女性の賃金が男性の賃金を大きく下回することはすでに周知の事実である。むしろ、驚くべきことは、女性の大学・大学院卒および高専・短大卒の賃金が、男性の高校卒の賃金を大きく下回っていることである。大学・大学院卒の女性の場合は、大学または大学院での就学のために高卒の人よりも4～9年間、短大卒の女性の場合で2年間余分に教育投資を行うことによって、それぞれそれより低い学歴の女性よりは賃金を上げることが可能になっている。しかし、高校卒の男性にはかなわないのである。高卒の男性の場合、工業高校卒の男性は、かつてから「一人勝ち」といわれるほど、就職に強く、現在もその状況が続いている（小杉 2008）。高卒男性の中でも、このような工業高校卒の男性が比較的高い賃金を得ていることが、男性の賃金全体の高止まりを助ける理由のひとつになっているのかもしれない。一方で、高卒女性については、かつてその多くが事務職に就くことができたが、女性の高学歴化の影響で、短大卒女性や大卒女性がその職に就くようになった。同時に、事務職では非正規雇用化も進んでいる。販売職やサービス職などについても非正規雇用化が進んでいるため、結果として、高卒の女性が正規雇用者として就労可能な職業は限られ、不安定雇用・低賃金労働を余儀なくされている。この点に関連して、小杉（2009）は、地域の労働市場と職業教育に関する研究の中で、在学中を除く20－24歳層の学歴別就業状況の推移（1992年から2007年）を考察し、特に最近の2002年から2007年の5年間に、学歴の低い、高卒学歴の女性が最も正規雇用から排除されてきたこと指摘している。そして、本項でのこれまでの議論を総括するかのように、荒井（2002）は労働賃金を学歴とジェンダーの視点から分析し、男性の賃金に比べて、女性の賃金はキャリアの不連続性がなくても相対的に低くなっているとする。そしてその理由として、高卒の女性標準労働者の賃金が低く抑えられていることを指摘する。

次いで同学歴にみられる男女間賃金格差についてみると、現在のところ、高専・短大卒者の間で最も小さく、大卒・大学院卒者と高卒者の間では同程度の大きさとなっている。しかし、大卒・大学院卒者間の男女間賃金格差については、今後、女性の大卒・大学院卒者が増加し、これらの女性の勤続年数が伸びたり、昇進が増えたりする可能性は高く、それに伴ってそうした格差が縮まる可能性は高い。

3.2. 非正規労働者・無業者・ニート⁽⁷⁾

フリーターを含む非正規労働者や無業者は、男性より女性の方に多く、相対的に学歴が低い者や、高校や高等教育機関からの中退者に多い（男女共同参画会議 2009）。ニートについては、かつては裕福な家庭の子どもが多かったが、昨今では、貧しい家庭で育った高卒や中卒の男性ほど働くのを断念し、結果としてこれらの男性のニートが増えているという（玄田 2008）。女性の非正規労働者やニートの場合は、自立に対する本人や親の意識が弱い上に、そのような女性ほど結婚が遅れることが明らかになっており（太郎丸 2009）、非婚中高年女性の貧困にもつながっている（橋本 2008）。また、女性の高校中退者の中には、在学中の妊娠が理由で中退せざるを得なかった者もかなり含まれる（男女共同参画会議 2009）。経済が不安定な状況が続けば、非正規労働者、無業者、ニートは男女問わず、今後ますます増加するだろう。

3.3. 10代の女性の妊娠・出産、母子家庭、貧困

10代の女性の妊娠・出産は、OECD 加盟国中、日本とイギリスにおいてのみ、増加している（OECD 2005=2006）。OECD 加盟国や EU 加盟国の間では、10代の女性の妊娠・出産は社会問題の一つとして捉えられ、その数を減らす取り組みが展開されている。例えば、10代の女性の妊娠は意図的ではなく、避妊の失敗による場合がほとんどであることから、これらの国々では性教育や避妊具の無料配布などが積極的に行われている。その背景には、この問題が原因で、各国の財政支出が増え続けてきたことがある。相対的貧困率が高いひとり親世帯の中でも、10代の母親が世帯主となっている母子家庭の貧困状況はより深刻であり、そのような世帯は社会保障費に大きく依存している。さらに深刻なことに、10代の母親から生まれた子どもは、出生時の体重が少なく（「低体重児」と呼ばれる）、病気や障がいを持って生まれる子も決して少ないとはいえず、そのような子をもつ母子家庭は、さらに社会保障費に依存する傾向がある。すなわち、10代の女性の妊娠・出産を放置することは、社会保障費のための財政支出の増加を意味する。先ほど女性の高校中退者の中には、在学中の妊娠による者がかなり含まれることを指摘したが、妊娠に至る前に学校からの脱落や学業面での失敗があることも指摘されている（同上）。しかし、日本では10代の女性の妊娠・出産が他の国ほど社会問題化していないこともあり、その問題が放置されたままとなっている。

わが国の母子家庭の状況について確認しておく、まず、昨今の性交渉の早期化に伴い、結婚期間が妊娠期間より短い出生件数が10代と20代前半の女性の間で増えていることがある（井上・江原 2005）。夫婦が離別した場合には、母親が子どもを引き取るケースが多いため、母親とその子からなる母子家庭が増加している。特に若い母親の場合については、低学歴で十分な知識や技能を身につけないまま出産、育児、そして離婚に至った者が

多い。また、そのような若い母親の子どもたちは、「誰からにもかまわれず、学校の成績が悪化することが多い」（同上 98）。このような状況は、貧困の世代的再生産という問題にも発展している。母子家庭の貧困状況についてみておくと、2007年に厚生労働省が発表した日本のひとり親世帯の相対的貧困率は54.3%であり、それは比較可能な OECD 加盟30カ国の中で最も高く、いいかえれば最悪の結果であった（読売新聞 2009年11月13日）。日本のひとり親世帯の実に2世帯に1世帯が貧困に陥っていることになるが、その多くが母子家庭であることは、周知の事実である。その状況は、厚生労働省が5年毎に実施している「全国母子家庭等調査」や阿部（2008）をはじめとする様々な研究によって明らかにされている。

また、樋口美雄慶応大学教授らが、財団法人家計経済研究所による「消費生活に関するパネル調査」をもとに、女性の生活様式の変化について調べた研究によれば、2002年時点で中学卒業者（以下、中卒者）には貧困経験が多く、貧困経験者の約7割が中卒者であるとされる。また、中卒者の36%が持続的・慢性的貧困に陥り、安定層は3割にとどまる（樋口・太田 2004）。同研究は、中卒者と母子家庭の母親との関係については言及しておらず、はっきりしたことはわからないが、同研究の対象となった中卒者の中には、母子家庭の母親も多く含まれているのではないかと予想される。

一方、このように低学歴で、若くして出産、離婚、貧困化する傾向にある母親と対照的なのが大卒の女性である。大谷（1993）によれば、既婚女性のうち、「大卒」で有意に婚前妊娠確率が低く、その理由として「避妊実行率の高さ」があるという。大卒の女性は、他の学歴の者に比べ、より計画的に出産を考える傾向にあるといえる⁽⁸⁾。また、樋口・太田（2004）によれば、高学歴になるほど貧困経験者が少なくなり、大学・大学院卒業者では安定層が8割以上になる。概して、女性は高学歴になるにつれて、妊娠・出産に慎重になり、かつ経済的にも安定化する傾向があるといえる。

3.4. 健康：病気・肥満・ストレス・精神状況・飲酒・喫煙

続いて健康についてみてみよう。まず病気についてであるが、厚生労働省研究班の研究によれば、女性の中でも膜下出血や脳梗塞など脳卒中を発症するリスクが高いのは、中卒者や大卒者であるとされる。中卒者の場合は、運動量が少なく、肥満や高血圧の者が多く、大卒者の場合は、心理的なストレスを感じている者が多いことが原因だという（東京新聞 2008年8月12日）。本節のこれまでの議論では、大卒者は、それより低い学歴の者より常に有利な状況にあったが、ここではじめてそれとは異なる状況があることがわかってきた。その一方で、女性の高学歴化は、中卒の女性に様々な負の影響を及ぼしている。前述の樋口・太田（2004）は、中卒者の精神状況が著しく悪く、自己評価が低いこと、中卒者には神経症傾向や被害的な妄想を持つ傾向が高いことを明らかにしている。先ほど中

卒者の中には、貧困に陥っている者が多いことを指摘したが、そのような貧困状況に加え中卒という学歴への不満が原因になっているという。また、このように辛く厳しい状況にあるためか、中卒者には「『酒を飲み始めるとやめられ』ず、『一人で酒を飲む』人も多い」（同上 289）という。このような中卒者に比べ、大学・大学院卒業者は、学歴自体の影響のためというよりは、経済的な安定とそれがもたらすさまざまな生活様式に恵まれるため、精神状況は良好であり、生活満足度は、短大・高専、専門・専修、高校、中学の卒業者と比べて、突出して高い（同上）。戦後における著しい女性の高学歴化と社会進出は、大学・大学院卒業者に対しては正の影響となったり、負の影響となったりして表れている一方、中卒者に対しては負の影響としてのみ表れているという非対称性がある。

また喫煙については、2008年時点で現在喫煙習慣がある者⁽⁹⁾の割合は、男性で36.8%、女性で9.1%であり、調査を始めた2003年以降、減少傾向にある（厚生労働省 2009b）。男女ともに喫煙習慣が減少傾向にあるとはいえ、その習慣がある男性は決して少なくない。一方で、女性の喫煙習慣と学歴と女性の社会進出の関係について欧州19カ国の比較研究を行った Schaap らは、GDP が高い国では、25－39歳の高学歴女性の間で高い喫煙傾向がみられたが、ほとんどの国では、学歴が高い女性ほど喫煙傾向が低いことを明らかにしている（Schaap, Kunst, Leinsalu, Regidor, Espelt, Ekholm, Helmert, Klumbiene and Mackenbach 2009）。

3.5. 犯罪

犯罪については、女性よりも男性の方が罪を犯す傾向にあることはよく知られている。犯罪者の圧倒的多数が男性であるという状況は長年続いており、例えば2008年の新受刑者総数は28,963名で、うち男性26,768名（92%）、女性2,195名（8%）であった（法務省 2008）。また、高学歴者ほど受刑者の比率が小さいという指摘もある（矢野 2009）。

3.6. ジェンダーと学歴による違いと問題の考察

以上、社会における問題のうち、特にジェンダーや学歴、あるいは女子の大学進学が関係している問題について考察した。本稿で取り上げた問題の他にも、平均寿命、自殺率、ホームレスの問題など様々な問題があるだろう。しかし、すべての問題を扱うのは不可能である上、論文の趣旨からはずれるので、これくらいにとどめておく。ここでは、本節で取り上げた問題について考察し、どのような傾向がみられるのかを明らかにする。

まず先に取り上げた問題を列挙すると、一般労働者の男女間賃金格差、非正規労働者、無業者、ニート、10代の女性の妊娠・出産、母子家庭、貧困、病気、肥満、ストレス、精神状況、飲酒、喫煙、犯罪となる。実に様々な問題がジェンダーと学歴に関係しているといえる。そして、これらの問題を考察することによって明らかなことは、大学に進学し、

卒業することによって、これらの問題に直面するリスクを小さくできる、あるいは望ましくない習慣に陥らないで済むという傾向があるということである。いいかえれば、女子が大学に進学し、卒業することによって、その個人が高い所得を得る、正規雇用に就く、意図的でない妊娠を避ける、母子家庭になるリスクを小さくする、貧困に陥るリスクを小さくする、病気や肥満など健康を損なうような問題および習慣を避けるなどの可能性が高まるということになる。例外は、大卒の女性は高卒の女性より心理的なストレスを感じやすく、そのために脳卒中になるリスクが高いということと、一部の先進諸国において、高学歴女性に高い喫煙傾向が見られるということのみであった。これらの例外については、今後わが国においても慎重に検討していく必要があるものの、概して、女性は、低い学歴にとどまらないで、大学に進学し、卒業することによって、様々な効果を得られることがわかる。

女性は、大学に進学して、高い教育を受けることによって、女性を取り巻く環境をはじめ、社会全般についての知識が豊富になる。就職を有利に進めるための技能の習得や資格の取得にも力を入れるようになる。そして、大変興味深いのは、同時に結婚や出産のタイミングについてもよく考えるという、いわば「生きていくための戦略」を練ることに長けてくるということである。大卒の女性が、それより低い学歴の女性に比して、経済的にも精神的にも安定するのは、このようなしたたかで知的な行動をとるようになるためだろう。

4. 人的資本論と教育分野におけるその応用

本節では、第2節と第3節で明らかになった女子の大学進学をめぐる現状を踏まえて、まず人的資本論とは何か、教育分野でその理論はどのように使われてきたのかについて確認する。

4.1. 人的資本論とは

経済学では教育の効果を説明する理論として、人的資本論とシグナリング理論の二つが提示されている。人的資本論は、Schultz や Mincer が中心となって開発し、その後 Becker が発展させた理論である。この理論では、教育を受けて知識を得ることによって個人の生産性が上昇し、その結果として高い収入を得られるとする。一方、Spence は教育の効果について、人的資本論とはまったく異なるシグナリング理論を提示している。シグナリング理論は、教育を受けることによって、個人の能力や生産性が上昇するとは限らないとする。教育は個人の能力の程度を他者に知らせる「シグナル（信号）」に過ぎないと考えるのである。よって、自分にもともと備わっている能力のことを知らない人々に対

して、その能力について知らしめるためには、何らかのシグナルが必要で、人々はそのシグナルを得たいがために教育を受けると考える。例えば学生（情報の発信者）と企業（情報の受け手）の間であれば、情報の非対称性が存在するため、学生は卒業証書や学歴などのシグナルを得ることによって、自分の能力を示そうとすると考える。企業も発せられたシグナルにある程度依存することによって、その学生の能力を認めようとする。よってこの理論では、大学の卒業証書は、自分が大学で能力を高めたことを示すものではなく、自分にもともとそのような能力が備わっていたことを示すものとして捉えられる。これら二つの理論の妥当性をめぐっては、わが国においてもこれまで様々な議論が展開されてきた。しかし、いまだ決着はついておらず⁽¹⁰⁾、今後も議論が続くものと思われる。

一方、OECD は、明確に人的資本論を支持し、経済政策や教育政策を考える上で広く活用している。OECD では、人的投資は、「発展した経済と民主社会の中核的役割を持つとみなされ」（OECD 2002=2006, 191）、人的資本論は、「今日の主要な経済問題である経済成長、賃金格差、労働移動、所得分布などに積極的な発言を」（同上 291）行う理論として据えられている。

4.2. 広義の人的資本論によるアプローチ

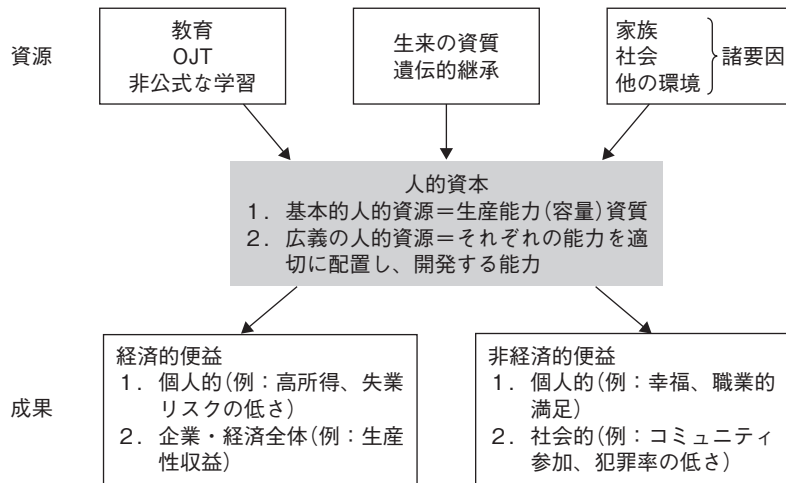
わが国においては、教育の分野で人的資本論を用いた研究というと、労働賃金にみられる学歴効果（学歴による差）を測定したり（例えば荒井1995, 2002, 2007；橋木・松浦2008）、教育投資に対する収益率を学歴別に明らかにしたりするなど（経済企画庁 1996；矢野 1982, 1996；島 2009）、ひとくちに言えば教育による貨幣的效果に着目する研究が主流である。このような研究は、高等教育費に対する公財政教育支出の対 GDP 比が世界の先進諸国の中で最低水準にあり、その分家計による教育費負担に依存しているわが国においてはきわめて重要である。家計の教育負担が大きいだけに、受験生やその親の関心が、大学教育投資収益率がいったいどの程度あるのかについて関心を示さないはずはないし、国として教育費負担問題を考える上でも重要な資料となるからである。

一方で、OECD や矢野眞和昭和女子大学教授は、広義の人的資本論を用いて、教育によって個人が享受する貨幣的效果というより、むしろ非貨幣的效果に、そして個人的効果というよりは社会的効果に着目する研究を行っている。以下では、これらの研究について整理する。

4.2.1. 人的資本論による生涯学習の効果に関する説明：OECD の試み

OECD は、1990年代後半以降、経済の成長と社会の発展を支える中核に人的資本を位置づけ、それを生涯学習によって増大し、活用していく必要があるとの考えに基づき、生涯教育の充実と普及に力を入れている。その背景には、第一に、「知識主導型社会への移行に伴い、教育訓練の必要性が高まっていることがある」（池本 2003, 91）。ICT 化の進

図2 人的資本—資源、諸側面および成果



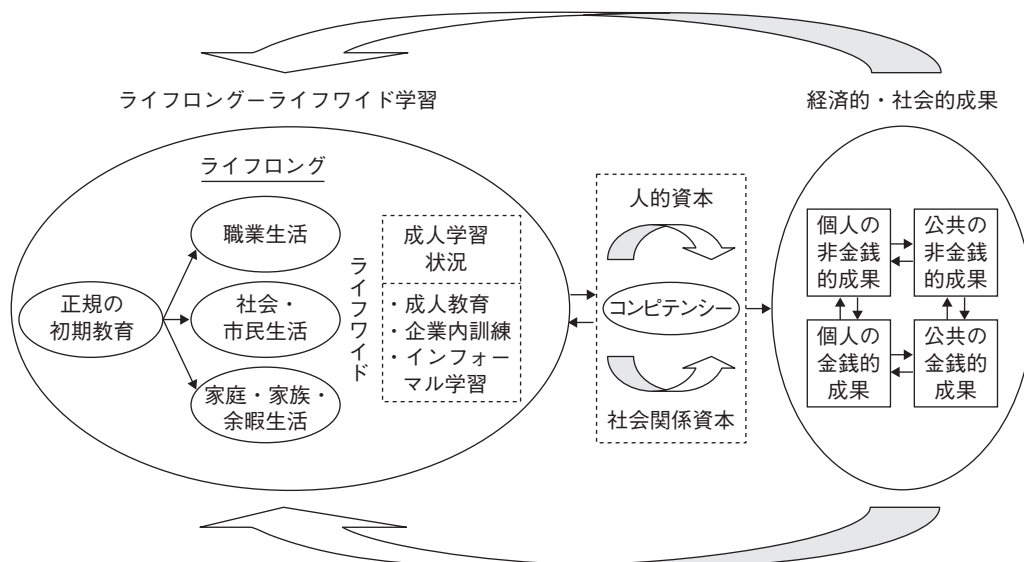
出典：OECD（2002=2006）194ページの図5.1を複製。

展とそれに伴う経済のグローバル化によって、「急激に変化する社会においては、学校で学んだ知識だけでは通用せず、不断の変化に適合していくことが求められる」（池本 2003, 91-92）。第二に、多くの OECD 加盟国で「富裕労働者」世帯と「貧困労働者」世帯の割合が増加し、社会的不平等が拡大していることがある（同上 92）。第三に、家族や地域社会の細分化が進むことによって、社会的紐帯が希薄化しているということがある。生涯学習を通じて、技能の習得を促進し、不平等を縮小させ、社会的なネットワークやコミュニティなどの社会関係資本を強化しようとするねらいがある（同上 93）。OECD が、人的資本の運用効果として、貨幣的效果と同様、非貨幣的效果についても重視していることは大変興味深い。この点について図式化すると図2のようになる。

この図に関連して、OECD（2001）は、教育が社会に対して貨幣的效果だけでなく、よりよい健康、低犯罪、政治やコミュニティへの参加、社会の連帯など非貨幣的效果をもたらすと考えている。特に、教育による非貨幣的效果としてよりよい健康については強調がみられ、より高い教育を受けた人ほど、ひどい喫煙や飲酒、体重過多に陥らずに済んでいるとしている。また、社会保障制度の利用についても、より高い教育を受けた人ほど、社会手当を受ける可能性が低いこと、高い教育を受けた母親の子どもは、福祉手当を（受けられるとしても）受ける可能性が低いことなどに言及している。

OECD 加盟諸国が生涯学習に尽力するようになってきている背景には、そうした国々の間で教育が個人および社会に貨幣的效果および非貨幣的效果をもたらすものであることと、多くの人が生涯学習に参加すればするほど、そのような効果が増大する可能性が高いことに対する認識が深まっていることがある。OECD は、このような自分の能力を準備、

図3 学習、コンピテンシー、資本形成の主要な関係性、ならびに経済および社会に対する学習の影響



時間の経過に伴う複雑な相互作用的かつダイナミックなプロセス

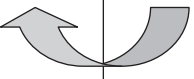
出典：OECD（2007=2008）58ページ、図2.1を複製。

運用、発展させる能力を「広義の社会資本」と呼び（OECD 2002=2006）、それを蓄積する上での有効な方法として生涯学習を捉えているのである。

昨今、OECDの関心事は、従来の教育への投資や参加率から学習の社会的成果にシフトしてきている。なぜなら、学習の成果の多くは意図されたものである一方、そうでないものも多く、学習の成果は、学習した個人においてのみ表れるのではなく、家族、企業、地域社会、さらには社会全体にも影響を及ぼし得ることに気づいたからである。そこで、OECDは、学習が「人的資本と社会関係資本の両方の発達と促進に重要な役割を担っている」と捉えると同時に、「人的資本と社会関係資本は相互的に、学習の成果であるのみならず、学習プロセスへの主要なインプットである」（OECD, 1998, 2001）と考え、生涯学習をはじめとする多様な学習とそのあり方、さらには社会的成果の測定などに力を入れている。OECDのそのような考え方を示したのが図3である。

OECDは、この図の説明として、それぞれの形態をとる学習の成果はもともとの学習目的的成果（図では「コンピテンシー」として表れるが、さらに予期せぬ成果として表れ得ることを示唆する。同時に、「これらの成果はさらに、その後の学習に影響を与える。例えば、教育は個々人に資格を付与し、この資格はその後の職業のタイプとレベルに影響し、さらにその職場における学習機会、その他の場面における学習機会の両方に影響を及ぼす」（OECD 2007=2008, 58）という説明を加えている。OECDは、学習の成果

図4 教育効果の多元性と複合性

	社会のため (皆のため)		個人のため (自分のため)
貨幣的	税金収入の増加 生産性の向上 政府支出依存の縮減		高い所得 雇用 仕事条件の改善
非貨幣的	犯罪率の減少 市民生活の向上 社会的凝集性		健康の改善 生活の質の向上 レジャーの多様化

出典：矢野（2009）6 ページの図1を複製。

を、学習目的の遂行の有無という狭い範囲で捉えるのではなく、より広く、より長期的に、そしてより複合的に捉える必要があることを示唆している。

4.2.2. 人的資本論による大学教育の効果に関する説明：矢野（2009）における試み

わが国においても、先述の矢野眞和が2009年に「教育と労働と社会—教育効果の視点から」と題した論文を発表し、人的資本論による教育効果の説明を試みている。その中で、矢野は教育効果を次の二つの分類軸を用いて検討する。すなわち、ひとつは教育効果が教育を受けた個人に帰着するのか、社会に帰着するのかという軸、そしてもうひとつはその効果が貨幣的なものか、非貨幣的なものかという軸である。そしてその二つの軸をクロスさせるとどうなるかについて図表を用いて説明している。それが図4である。

まず図4のタイトルに注目してほしい。ここでは「教育効果の多元性と複合性」となっているが、文脈から判断すると、矢野はこの図の作成にあたって「大学教育の効果」を想定していることは明らかである。よって、この図は「大学教育の効果の多元性と複合性」と捉えても問題がない。また、図4の内容は、先に挙げた OECD の図3の内容の一部についてよりわかりやすい説明を加えていると据えるのが妥当である。さらに、この図の中で「人的資本」ということばは一度も使われていないが、人的資本論がその基礎にあることは明らかである。ここで矢野が明示しているのは、個人が受けた教育の効果が、その個人に対する貨幣的・非貨幣的效果として表れるだけでなく、社会に対しても貨幣的・非貨幣的效果として表れることである。その上で、矢野は、その説明の具体例として、自身が行った生涯所得計算を挙げ、(1)大卒者が生涯に支払う税金が、高卒者よりも1,600万円程度高いことを示す。そして、大卒者が増えれば、税収入が増加するため、大学に税金の一部を公教育費として活用することは合理的な公共投資であると述べる。さらに、大卒者は、医療費や生活保護費などの政府支出に依存しない傾向にあることや、受刑者に占める高学歴者の比率が小さいことについて触れる。後者の理由については、比較的高くて安定した収入を得られること、より良好な健康状態にあること、レジャーなどに恵まれている

ことなどが複合的に作用しているためとする。図4の中の矢印は、それぞれの効果の複合的作用関係を示しており、大変重要である。⁽¹¹⁾

4.3. 教育分野における広義の人的資本論の有用性

4.2の冒頭で述べたように、教育の分野で人的資本論を用いた研究というと、これまでは労働賃金にみられる学歴効果を測定したり、教育投資に対する収益率を学歴別に明らかにしたりする研究が主流であった。しかし、これまでみてきたように、今日ではOECDや矢野眞和などが、教育によって個人が享受する貨幣的效果というより、むしろ非貨幣的效果に、そして個人的効果というよりは社会的効果に着目し、それらを明らかにしようとしつつある。それらの試みは単に斬新であるだけでなく、見えにくく、理解されにくい教育の効果を測定し、明示しようと試みている点で評価される。さらに、それを明示することによって、教育に対する再評価や新たな教育提言を促す契機を創出しているという点で意義深い。

5. 女子の大学進学に伴う諸効果

これまでの議論の主な点を整理すると、第3節では、一般労働者の男女間賃金格差、非正規労働者・無業者・ニート、10代の女性の妊娠・出産と母子家庭、貧困、病気、肥満、ストレス、精神状況、飲酒、喫煙、犯罪について、ジェンダーと学歴の視点から考察した。そして、女子が大学に進学し、卒業することによって、その個人が高い所得を得る、正規雇用就く、意図的でない妊娠を避ける、母子家庭になるリスクを小さくする、貧困に陥るリスクを小さくする、病気や肥満など健康を損なうような問題および習慣を避けるなどの可能性が高まることを示唆した。次いで第4節では、まず人的資本論はもともと個人の貨幣的效果について理論的に検討する枠組みとして開発されたものであることを示した。その後、人的資本論は、OECDや矢野が試みているように、個人の貨幣的效果に限らず、個人の非貨幣的效果や社会の貨幣的效果や非貨幣的效果というより広い範囲における人的資本の役割についてまで考察可能な理論になっていることを示した。

以下では、これらのことを踏まえて、女子の大学進学に伴う効果について検討する。その際、第4節で取り上げた矢野の図4については、その文脈から判断して「大学教育の効果の多元性と複合性」について表しているものと解釈可能だったので、その図を応用しながら解釈を行っていく。

まず、女子が大学に進学することによって、その個人が享受する貨幣的效果および非貨幣的效果については、高い賃金を得る、正規雇用就くなど本節の冒頭で述べたとおりである。さらに、女性個人の人的資本の役割についてより広く解釈すると、(1)女性が高い所

得を安定的に得ることによって、独身の場合は、親や兄弟の経済的リスクを減らしたり、既婚の場合は、夫の経済的リスクを減らすなど、家庭内の経済的リスクの分散が可能になるということ、(2)若いうちの意図的ではない出産を回避することによって、生まれてくる子どもの健康問題（例えば低体重、病気、障がいなど）のリスクを小さくできる、(3)大学に進学し、卒業することによって自尊心を高めたり、自信を強めたりできるということが考えられる⁽¹²⁾。さらに、第3節第4項で取り上げた樋口・太田（2004）にならえば、(4)経済的安定とそれがもたらす生活様式にも恵まれるため、精神状況は良好になる可能性も高い⁽¹³⁾。

次に、女性が大学卒業後に働くことによって、社会にもたらす貨幣的効果および非貨幣的効果について考えてみよう。まず、貨幣的効果については、税金の収入増加、生産性の向上などが考えられる。さらに、若いうちに妊娠・出産する女性や貧困に陥る母子家庭が減ることによって、政府支出依存の縮減（児童扶養手当、児童手当、就学援助、生活保護費、医療費補助など）も期待できる。次に、非貨幣的効果については、犯罪率の減少、市民生活の向上、社会的凝集性（コミュニティ活動やボランティア活動への参加など）の他、さきに述べたこととも関連するが、計画的妊娠・出産の増加や母子家庭数の減少が考えられる。

以上のことを図示すると図5のようになる。さらに、図5の中の矢印が示すように、それぞれの効果が複合的に作用していることにも注意が払われなければならない。この図は、筆者が先の図4を参考に作成したものだが、図中にはまだ議論していない「情報の量的確保とその活用」ということばを付している。なぜなら、この図をみても明らかなように、大学教育の効果とは考えにくいものも少なくない。大学教育が必ずしも意図していない領域においてもその効果が表れているように思われる。OECDの表現を借りれば、「定められた目標が何であれ、成果（効果）の多くは意図されたものであるが、そうでないものもまた多い」（OECD 2007=2008, 57、カッコ内は筆者による）のである。例えば、「意図的でない妊娠・出産の回避」に関する知識はその典型である。このような効果が表れるのは、おそらく大学教育を通じてだけでなく、ICT、読書、ピアグループ、恋人、先輩など多様な媒体を通じて、情報の量的確保を行い、その取捨選択や応用を行うためであると考えられる。このような「情報の量的確保とその活用」の力がどのように養われるのかについては十分明らかになっていないものの、このような力が備わることこそ、女子の大学進学に伴う効果として、もっとも重要であり、期待できることなのかもしれない。そして理論的な観点からいえば、このような効果については、シグナリング理論で説明することは不可能であり、人的資本論によってのみ説明することが可能である。情報の量的確保とその活用は、大学に進学した個人に蓄積された能力の行使を意味するのであって、自分に関する情報を他者に与えるためのシグナルを意味するわけではないからである。さらにこ

図5 女子の大学進学に伴う効果の多元性と複合性

	社会のため (皆のため)	個人のため (自分のため)
貨幣的	税金収入の増加 生産性の向上 政府支出依存の縮減 (児童扶養手当、児童手当、就学援助、生活保護費、医療費補助など)*	高い所得 家庭内の経済的リスクの分散* 雇用 仕事条件の改善
非貨幣的	犯罪率の減少 市民生活の向上 社会的凝集性(コミュニティ活動・ボランティア活動への参加など)* 意図的でない妊娠・出産に起因する母子家庭の減少*	情報の量的確保とその活用* 健康の改善(肥満、精神状況、飲酒、喫煙)* 意図的でない妊娠・出産の回避* 子の出生時の健康問題の防止(低体重、病気、障がいなど)* 生活の質の向上 生活満足度の高まり* 自尊心・自信を持つ*

出典：図4（矢野 2009 6 ページを複製したもの）をもとに筆者作成。

注：*は、筆者がすべてまたは一部加筆した部分を示す。

の点については、狭義の人的資本論ではなく、広義の人的資本論を用いることによって始めて明示可能であることを強調しておく。

6. むすびに

本稿の目的は、広義の人的資本論を用いて、女子の大学進学に伴う効果について明らかにすることにあつた。そして、女子の大学進学に伴う効果は、その個人に経済的效果や非貨幣的效果としても表れ、同様に、社会においても、貨幣的效果や非貨幣的效果として表れることが明らかになった。女子の大学進学に伴う効果は実に多様であるということである。また、このような効果の中には、シグナリング理論では説明ができず、人的資本論によってのみ説明が可能であるものも含まれた。さらに、効果の中には、広義の人的資本論を用いることによって始めて明らかになるものも含まれた。女子の大学進学に伴う効果を広義の人的資本論を用いて検討することは非常に有益であることが明らかになった。

わが国では、高等教育の大衆化が進み、高等教育の需要側である学生もその供給側である教育機関もその質は一層多様化し、それぞれの間では格差化が進行している。その上、学生の進学動機も多様化している。そのため、女子の大学進学に伴う効果について本質的に据えることには慎重でなければならない。しかし同時に、女子の大学進学に伴う効果は、実に多様であるという認識と、それらの効果は、大学に進学した個人にのみもたらされるのではなく、社会にももたらされるという認識が広がること、そしてそのような認識にたつ研究が増えていくことが望まれる。そのような認識が広がり、また研究も増えてい

けば、女子の大学進学を促す動きも活発になるだろう。同時に、「女だから」という理由で大学に進学する機会を阻まれる者の数も減るだろう。

注

- (1) 「女子」という用語はしばしば学校教育および学校教育に関する研究において用いられ、ややもすれば「女子」を教員他が見下しているような印象を与えがちになる。今日、高等教育では成人学生が増えつつあることを鑑みて、「女子」ではなく、「女性」を使用の方が望ましいという意見も出てきている。筆者自身はこの考え方に賛成であるが、本稿は、若年女子の大学進学に焦点を絞っており、「女性」を使用するとかえって違和感があるので、慣例に従い「女子」を使用する。
- (2) 女性学やジェンダー論では、これまで生物学的性、性別を「セックス」、社会的・文化的性を「ジェンダー」として、明確に区別してきたが、最近では、これらを区別せず、総じて「ジェンダー」とする傾向にある。例えば、「性別」、「男女」、「男女差」の代わりに、「ジェンダー」や「ジェンダー差」という表現がしばしば使われるようになってきている。しかし、本稿では、「男女」の表記を使用している公的機関による統計や資料を頻繁に参考にすることもあり、本稿全体においても可能な限り「ジェンダー」ではなく「男女」の方で統一することにする。
- (3) 橋本（2009）は女性の間での教育が3極化しているとするが、本稿では高等教育に焦点を絞る。
- (4) 本来、高等教育は、大学院、大学、短期大学、高等専門学校、専修学校（専門過程、いわゆる「専門学校」）を指すが、高等教育研究をはじめとする様々な分野で、慣習的に「大学・短大進学率」あるいはこれを「高等教育進学率」と呼んで使用することが多い。
- (5) 文部科学省による「学校基本調査」によれば、ここ数年、女子の間で社会科学分野を専攻する学生が最も多くなっており、2008年では、同分野を専攻している全学生の3割以上を女子が占めている。一方で、工学分野を専攻する女子学生は、同分野専攻の全学生の10.5%にとどまり、人文科学分野を専攻する女子学生は、同分野専攻の全学生の66.4%を占めているという状況で、このような「工学は男子、人文科学は女子」という専攻分野の偏りは依然根強く残っている。さらに、大学院への進学率についても、男子の15.5%に比して、女子は7.5%にとどまっている。
- (6) 内閣府男女共同参画局（2004）によれば、現在30歳以上の女性の約8割が高等教育を受けていない。また、OECDも、2002年現在、わが国における大学型高等教育および上級研究学位プログラムを終了した25歳から64歳の人の割合は、男性の場合が30%であるのに対し、女性の場合は11%にとどまるとしている（OECD 2004, 56-57）。わ

が国における成人女性間での大学進学に対する潜在的需要も相当大きいことが予想される。

- (7) 厚生労働省は、『労働経済白書』の中でニートの定義を「15～34歳の非労働力人口（非就業、非求職）で家事も通学もしていない『若年無業者』」とし、中高年も含めた「無業者」とは区別している。本稿においても、ニートと無業者について厚生労働省の定義に従う。
- (8) ただし、現役女子大学生や大卒女性の中にも、若くして妊娠し、出産する者もいれば、中絶する者もいる。あるいはそのような経験を持つ者もいる。よって、現役女子大学生や大卒女性のこの点については慎重に検討する必要がある。
- (9) これまで合計100本以上又は6カ月以上たばこを吸っている（吸っていた）者のうち、「この1ヶ月間に毎日又は時々タバコを吸っている」と回答した者を指す（厚生労働省 2008）。
- (10) 例えば橋本は（2007）はわが国の状況を鑑みて、かつてはスクリーニング仮説が有力であったが、現在は人的資本論の方が妥当とする。一方、矢野（2009）はそのどちらも支持する調査結果を導き出しているが、本人の考えは明確にしていない。
- (11) OECD（2007＝2008）は、教育による潜在的な非貨幣的效果（以下の付表1では、「非金銭的利益」）について、個人的なものと公的なものに分けて一覧にしているので、それを以下に示す。個々の項目の有意性については、別途検討したいと思う。ここでは、OECDによって、教育の効果が非常に広範囲にわたって表れることが明らかにされつつあるということを指摘するだけにとどめておく。
- (12) Jamieson, A., Sabates, R., Woodley, A. and Feinstein, L.（2009）は、イギリスの二つの大学でパートタイマーとして学ぶ成人学生を対象に、高等教育の効果に関する調査を実施し、その結果として、人的資本、アイデンティティ資本、社会的資本のすべてにおいて著しい効果がみられたとしている。
- (13) ただし、これらはあくまで女性が大学に進学しなかった場合との比較であり、平均としての話であるため、女性が大学に進学すれば、単純に皆が幸せになるとか、すべてがうまくまわるようになるというわけではない。実際、Need and de Jong（2008）は、オランダの大学に在籍する学生の期待所得に影響を及ぼす要因に関する調査を実施し、その結果として、学生の性格的特徴が期待所得に影響を及ぼし、その影響はジェンダー差や専攻分野の違いによってさらに拡大することを明らかにしている。今後は、このような研究を含め、女性の大学進学に伴う効果についてより詳しく、かつ慎重に検討していく必要があるだろう。

付表1 教育による潜在的な個人および公共の非金銭的利益

個人の非金銭的利益	公共の非金銭的利益
健康への影響 乳児死亡率の低下 罹病率の低下 寿命の延長 家庭で生産される人的資本 子どもの教育の向上 家計やりくりの効率向上 金融資産利益の増加 世帯購買の効率向上 労働力率 女子の労働参加率の上昇 失業率の低下 退職後のパートタイム雇用の増加 生涯にわたる適応 学習・継続学習 世帯内での新技術の使用 老朽化：人的資本交換投資 好奇心・教育的読書：教育テレビ・ラジオ 成人教育プログラムの利用 動機づけ特性 非認知技能の生産性 結婚効果の選択 離婚・再婚（マイナスの利益になり得る） 非金銭的仕事の満足 現行消費における効果 教室経験の楽しみ 学校内での余暇の楽しみ 両親に対する育儿的利益 温かい給食・学校－地域社会活動	人口・健康への影響（所得コントロール） 出生率の低下 正味人口増加率の低下 公衆衛生 民主化（所得コントロール効果） 人権 政治的安定 貧困緩和・犯罪（所得コントロール） 貧困緩和 殺人発生率 窃盗犯罪発生率 環境への影響（所得コントロール） 森林伐採 水質汚染 大気汚染 家族構造・退職の影響 教育の地域社会サービスへの影響（所得コントロール） 所得階層内の地域社会サービス・ボランティアに費やす時間 所得階層内の気前の良い金銭の寄付 記事、書物、テレビ、ラジオ、コンピュータ・ソフトウェアおよび非公式な知識の普及

出典：OECD（2007＝2008）69ページの表2.4を複製。

引用・参考文献

阿部彩（2008）『子どもの貧困—日本の不平等を考える』岩波書店。

荒井一博（1995）『教育の経済学—大学進学行動の分析』有斐閣。

—（2002）『教育の経済学・入門—公共心の教育はなぜ必要か』勁草書房。

—（2007）『学歴社会の法則—教育を経済学から見直す』光文社新書。

Becker, G. (1975) *Human Capital: A theoretical and empirical analysis, with special reference to education*, Second edition, National Bureau of Economic Research, Inc. (佐野陽子訳 [1976] 『人的資本—教育を中心とした理論的・経験的分析』東洋経済新報社。)

Britton, C. & Baxter, A. (1999) 'Becoming a Mature Student: Gendered narratives of the self', *Gender and Education*, v11 n2, 179-193.

- 玄田有史（2008）「『若者自立支援』10年後を見据える」『ビジネス・レーバー・トレンド』397号、17-20。
- 樋口美雄・太田清編（2004）『女性たちの平成不況—デフレで働き方・暮らしはどう変わったか』日本経済新聞社。
- 平沢和司・片瀬一男（2008）「きょうだい構成と教育達成」米澤彰純編『教育達成の構造』2005年SSM調査シリーズ5、1-17。
- 広田照幸（1999）『日本人のしつけは衰退したか—「教育する家族」のゆくえ』講談社現代新書。
- 法務省（2008）『矯正統計年報』<http://www.moj.go.jp/TOUKEI/gaiyou/kyousei-2.pdf> アクセス日2010年1月28日。
- Jamieson, A., Sabates, R., Woodley, A. and Feinstein, L. (2009) 'The benefits of higher education study for part-time students', *Studies in Higher Education*, v34 n3, 245-262.
- 経済企画庁（1996）『国民生活白書』大蔵省印刷局。
- 小林雅之（2007）「高等教育機会の格差と是正対策」『教育社会学研究』第80集。
—（2008）『進学格差—深刻化する教育費負担』ちくま新書。
- 国立女性婦人会館（2009）「性別大学進学率の推移（1954～2008）」http://winet.nwec.jp/cgi-bin/thesaurus/extend/th_main.cgi アクセス日2010年1月28日。
- 近藤博之（1996）「地位達成と家族—キョウダイの教育達成を中心に」『家族社会学研究』第8号、19-31。
- 小杉礼子（2008）「高校生の就職とキャリア形成支援—日本の就職システムの行方と課題」『ビジネス・レーバー・トレンド』405号、2-4。
—（2009）「地域の労働市場と職業教育（JILPT・日本学術会議共同フォーラム「特集 若者問題への接近—誰が自立の困難に直面しているのか」における報告」『ビジネス・レーバー・トレンド』415号、7-11。
- 厚生労働省（2009a）『平成20年賃金構造基本統計調査（全国）結果の概況』<http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2008/dl/gakureki.pdf> アクセス日2010年1月28日。
- 厚生労働省（2009b）『2008年国民健康・栄養調査』<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/11/dl/h1109-1b.pdf> アクセス日2010年1月28日。
- 文部科学省（2009）「学校基本調査」http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/_icsFiles/afieldfile/2009/12/18/1288104_2.pdf アクセス日2010年1月28日。
- 内閣府（2001）『第二回青少年の生活と意識に関する基本調査』財務省印刷局。

- 内閣府（2009）『男女共同参画白書 平成21年度』佐伯印刷。
- 内閣府男女共同参画局（2004）『男女共同参画白書 平成16年度』国立印刷局。
- 中西祐子（2004）「『愛情』家族の教育戦略—教育投資、愛情投資に対する性・出生順位の影響について」『年報社会学論集』第7号、60-71。
- Need and de Jong（2008）Personality traits and gender-specific income expectations in Dutch higher education, *Social Indicators Research*, v86 n1, 113-128.
- NHK 放送文化研究所編（2004）『現代日本人の意識構造 第6版』日本放送出版協会。
- OECD（2001）OECD（2001）*The Well-being of Nations: the role of human and social capital*, Paris: OECD.
- （2002）*Education Policy Analysis 2002*, Paris: OECD.（OECD [2006]『OECD 教育政策分析』明石書店。）
- （2004）*Education at a Glance : OECD indicators 2004*, Paris: OECD.（OECD [2004]『図表でみる教育—OECD インディケータ [2004年版]』明石書店。）
- （2009）*Education at a Glance : OECD indicators 2009*, Paris: OECD.（OECD [2009]『図表でみる教育—OECD インディケータ [2009年版]』明石書店。）
- （2005）*Society at a Glance : OECD social indicators 2005*, Paris: OECD.（高木郁朗監訳 麻生裕子訳 [2006]「10歳台の出産」『図表でみる世界の社会問題—OECD 社会政策指標 貧困・不平等・社会的排除の国際比較』明石書店。）
- （2006）*Society at a Glance : OECD social indicators 2006*, Paris: OECD.（高木郁朗監訳 麻生裕子訳 [2008]「男女間賃金格差」『図表でみる世界の社会問題 2—OECD 社会政策指標 貧困・不平等・社会的排除の国際比較』明石書店。）
- OECD（2007）*Understanding the Social Outcomes of Learning*, Paris: OECD.（OECD 教育研究革新センター編著、NPO 法人 教育テスト研究センター監訳、坂巻弘之・佐藤郡衛・川崎誠司訳 [2008]『学習の社会的成果—健康、市民・社会的関与と社会関係資本』明石書店。）
- Osborne, Michael, Marks, Andrew, and Turner, Eileen（2004）'Becoming a mature student: How adult applicants weigh the advantages and disadvantages of higher education', *Higher Education*, v48, 291-315.
- 大谷憲司（1990）「結婚と妊娠にいたる過程に含まれるいくつかの時間分布について」『人口問題研究』第45巻 第4号、1-16。
- 佐野陽子（1976）「訳者あとがき」Becker, G.（1975）*Human Capital: A theoretical and empirical analysis, with special reference to education*, Second edition, National Bureau of Economic Research, Inc.（佐野陽子訳 [1976]『人的資本—教育を中心とした理論的・経験的分析』東洋経済新報社。）

- Schaap, M., Kunst, A., Leinsalu, M., Regidor, E., Espelt, A., Ekholm, O., Helmert, U., Klumbiene, J. and Mackenbach, J. (2009) 'Female ever-somoking, education, emancipation and economic development in 19 European countries, *Social Science & Medicine*, Apr.2009, v 68 n7, 1271-1278.
- 島一則 (2009)「教育負担問題を考える—私立大学教育の経済効果」『アルカディア学報 (教育学術新聞掲載コラム)』No.364、<http://www.shidaikyo.or.jp/riihe/research/arcadia/0364.html> アクセス日2010年1月25日。
- 橋本俊詔 (2007)「教育機会と格差について」文部科学省『中央教育審議会 教育振興基本計画特別部会 (第4回配布資料 [資料2])』http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo7/shiryo/07051703/002.htm アクセス日2010年1月23日。
- (2009)「高教育費支出の増額を」『日本労働研究雑誌』588号、1。
- 男女共同参画会議 (2009)『新たな経済社会の潮流の仮名で生活困難を抱える男女についてとりまとめに向けた論点整理』<http://www.gender.go.jp/danjo-kaigi/kansieikyo/konnan-ronten/zenbun.pdf> アクセス日2010年1月28日。
- 橋本俊詔・松浦司 (2008)「階層・学歴・収入—3期間パネルデータによる検証」『学歴格差の経済学』勁草書房、1-20。
- 田中寧 (1998)「女子の大学進学率決定要因：4年制と短期大学の選択—都道府県別のクロスセクション分析」、京都産業大学『経済経営論叢』第33巻2号、21-44。
- 太郎丸博 (2009)「自立困難な若者の研究動向」『ビジネス・レーバー・トレンド』415号、3-7。
- 東京新聞 (2008)「脳卒中の発症率、高卒女性が最低—厚生労働省研究班」8月12日付。
- 矢野眞和 (1982)「女子教育の経済学」市川昭午・菊池城司・矢野眞和著『教育の経済学』第一法規出版、63-80。
- (1996)『高等教育の経済分析と政策』玉川大学出版部。
- (2009)「教育と労働と社会—教育効果の視点から」『日本労働研究雑誌』588号、5-15。
- 読売新聞 (2009)「一人親世帯の貧困率、54.3%OECDで最悪」11月13日付。

武庫川女子大学教育研究所／ 子ども発達科学研究センター 2009年度活動報告

Progress Reports on
Mukogawa Women's University Center for The Study of Child Development 2009

河 合 優 年* 難 波 久美子** 佐々木 恵***

KAWAI, Masatoshi, NAMBA, Kumiko & SASAKI, Megumi

目次

- I. 子ども発達科学研究センターの成
り立ちとその理念について
- II. 2009年度活動概要
 - 1. すくすくコホート三重・武庫川
チャイルドスタディ
 - 2. 西宮市研究協力・受託事業
 - 3. 子どもの育ちと学びを支える専
門職の方のための「子どもの発
達」を学ぶ会
- III. テクニカル・レポート
コホート研究における画像データ
の管理・分析システムの検討
- IV. 研究業績

*武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・研究員、文学部心理・福祉学科・教授、**武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・助手、***武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・副手

I. 子ども発達科学研究センターの成り立ちとその理念について

1. はじめに

今日、子どもを取り巻く環境は急速に変化するとともに、その厳しさを増してきている。少子化が進み、もはや進行形としての少子化ではなく、現実のものとしての少子社会がそこにあるというのが現状である。国をあげての取り組みは、平成元年の合計特殊出生率が過去最低になったいわゆる「1.57ショック」からと言える。平成6年には「今後の子育て支援のための施策の基本方向について」といういわゆるエンゼルプランが策定され、平成16年には「少子化社会対策大綱」が策定されている。この後、次世代育成支援対策推進法の施行など今日実施されているさまざまな子育て支援が進められてきている。

経済政策を中心として国の施策が進むなか、子どもについての基礎的な情報や子育ての環境、教育の環境についての確認とそれに基づく施策がようやくその重要性を認められたのかもしれない。また、これらとともに、学校教育の中においても子どもを取り巻く環境は大きく変化し、特別な支援を必要とする子どもたちの教育や、保護者との関係性の悪化など、子どもを巻き込む形での問題が急速に表面化してきた。

家庭や地域、学校などシステムとしての育ちと学びをとらえる必要性が高くなってきているのである。教育研究所では、福祉領域、学校教育領域、発達心理学領域、臨床心理学領域などの教員がそれぞれの立場から、子どもを取り巻く環境の問題について研究を重ねている。武庫川女子大学子ども発達科学研究センターは、そのような「育ちと学びをつなぐ研究を遂行し、社会に還元する」という目的のもと、乳幼児期から児童期にいたる子どもたちを中心として、子どもの実態、親の実態についての研究を進めることとなった。

2. 子ども発達科学研究センターの成り立ち

武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター（以下、子どもセンター）は、平成21年4月に、教育研究所の下部組織として設置された、時限付きの研究組織である。設置規定にあるように、子どもの発達に関する研究を進めると同時に、その成果を地域の子育てや教育に還元し、その研究成果を内外に発信する使命を有している。

子どもセンターの前身は平成16年4月より開始されたJST（独立行政法人科学技術振興機構：Japan Science and Technology Agency）の「脳科学と教育」計画型研究「日本における子供の認知・行動発達に影響を与える要因の解明研究（JCS：Japan Children's Study）」の、発達心理学領域の拠点であった、学術研究交流館（IR館：4F、5F）の子ど

も発達科学研究センターである。この研究は平成21年3月に終了し、現在その成果発表のため東京のJSTに事務組織のみが残されている。この成果は、出版物や報告書、学術雑誌などによって発表されてきている。

武庫川女子大学は、この研究において全国の発達データ、その中においても質問紙による調査データと観察時の画像データの集積と分析を行ってきた。そのデータは、JCS終了後も、子どもセンターに保管されるとともに、継続研究としてその追跡研究が学術振興会、私立大学経常費補助金特別補助を受けながら事業として継続されている。JSTはその名前が示すように、研究成果の社会実装を重要な課題としているが、子どもセンターにおいても、この間、地域からの要請に応じ、JCS事業で得られたノウハウを育児や支援教育に還元するための活動を進めてきた。西宮市の健康福祉局や教育委員会との共同事業計画は、一部委託事業として進められており、平成21年度分の研究成果が市に報告され、さらに22年度の委託へと続いている。

子どもセンターの活動は、研究のみならず、その成果を学院の学生に還元するという形で活かされている。地域の保健師、保育士との研究会に大学院生が参加し、基礎的な知識の獲得のみならず現場での問題の共有を通じて、実践のイメージをつかむ活動も進められている。

3. 子どもセンターの概要と構成

上述した子どもセンターの設立時点における構想が図1に示されている。

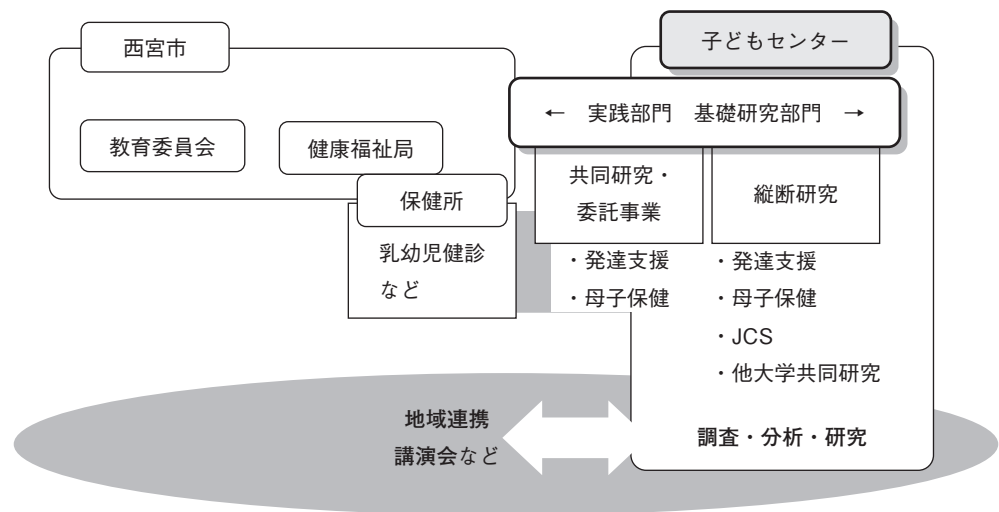


図1 子どもセンター構想

子どもセンターは、教育研究所の下部組織であり、研究所の管轄下において機能している。センター研究員については、21年度スタートということもあり、現時点ではセンター長を含めて明示されていない。子どもセンターの活動は、学外研究員を含めて、教育研究所所属3名、文学部所属4名、学外（京都光華女子大学、早稲田大学、名古屋市立大学、三重大学）所属4名、データ管理等研究補助者11名で進めている。これら組織のあり方については、22年度に再度検討を進める予定である。

また、子どもの育ちに関するコホート研究に関しては、三重大学、三重中央医療センターにおいて、子どもセンターの研究グループとしてデータを収集するグループが置かれている。これらは、科学研究費における研究分担者として登録されている。

4. これまでの取り組みと成果について

子どもセンターは、上述してきたように大きく3つの目的を持っている。一つは、これまでのJCS研究を継続発展させ、子どもの発達に関する標準的なデータを生成するというものである。これは、継続的なものであり、今後日本における発達データのクリアランスハウスとしての機能につながるものと考えられる。もう一つのものは、西宮市における保健所業務の研究支援に係るものである。最後のものは、これらの成果を発信するとともに、大学の教育に還元するものである。2009年度の活動の詳細は活動概要として次章にまとめられている。

これまでの成果は、JST時代のものがほとんどであるが、シンポジウム等で全体を俯瞰したものを参考として以下に示す。2009年4月からはセンターとしての機能に移行している。2009年のグループの個別研究発表は本稿の最後に示す。

- 1) A pilot study of JCS -as preparation of cohort study-(I) Infancy.
The First International Symposium on Cohort Study Based on Brain-Science
2005, November. U Thant Hall, United Nations University. Tokyo.
- 2) A cohort study for clarifying the mechanism of social development and its precursor.
Trans-Disciplinary Symposium Series on “Brain-Science & Society”
2008, December., Takeda Hall, The University of Tokyo.
- 3) 2009 日本における子供の認知・行動発達に影響を与える要因の解明 研究成果報告書
独立行政法人 科学技術振興機構 社会技術研究開発センター

これらに加えて、21年度は、①乳幼児期における母子関係のなりたち子どもの育ちに関する研究、②西宮市乳幼児健康診査に関する共同研究とスクリーニング基準の提案、③シンポジウム・公開講演会などの開催を行った。また、他西宮市との共同研究事業に関しては、昨年度西宮市小児科医会において、10か月児アンケート健康診査についての講演を、発達障害に関しては、西宮市子ども部会の地域講演会において講演を行っている。

センター設置において計画された、母子関係のあり方や乳幼児の発達評価に関する研究とともに、それらの取り組みを地域社会へ還元する努力は今後も継続されることとなる。

5. 外部資金の獲得について

子どもセンターは教育研究所の研究組織として、外部資金の獲得を期待されている。21年度の研究費としては、①科学研究費補助金 基盤研究（A：課題番号21243039）、②西宮市保健所10か月児アンケート健康診査及びフォロー事業に関する委託研究費、③私立大学経常費補助金特別補助の他、④三重中央医療センター、⑤メディカ出版などからの研究助成費を受けている。

6. これまでの成果

これまでの研究グループの成果を総括する意味で、以下にその概要を示しておく。

(1) 2008年度

- 1) Yato, Y., Kawai, M., Kayamura, T., Negayama, K., Sogon, S., Tomiwa, K., & Yamamoto, H., (2008) Infant Responses to Maternal Still-Face at 4 and 9 Months. *Infant Behavior and Development*.
- 2) 河合優年・矢藤優子・難波久美子・根ヶ山光一・荘巖舜哉（2008）母子交渉と発達——短期縦断研究から見えてくるもの三宅和夫・高橋恵子（編著）発達を理解する心理学—縦断研究の価値（pp. 71-86）金子書房。
- 3) 河合優年（2008）教育講演 I 「子どもの育ちと環境」全国病児保育研究大会三重大会手をつなごう、病児保育と共に究極の子育て支援を目指してプログラム・抄録集、pp. 38-41. 四日市市文化会館第1ホール招待講演。
- 4) 河合優年（2008）育児を科学する第10回日本母性小児看護学会招待講演。
- 5) Fogel, A. & Kawai, M. (2008) Current problems of Japanese youth: some possible pathways for alleviating of dynamic systems theory. In Fogel, A. King, B. J., & Stuart G. Shanker, S. G. (Eds). *Human Development in the Twenty-First*

Century-Visionary Ideas from Systems Scientists- pp. 188-199. Cambridge University Press.

- 6) Begum EA, Bonno, M., Ohtani, N., Yamashita, S., Tanaka, S., Yamamoto, H., Kawai, M., & Komada, Y. (2008) Cerebral oxygenation response during skin-to-skin care in low birth weight infants, NEONATOLOGY, 121, 136-137.
- 7) 根ヶ山光一 (2008) 虐待・反発性・子別れ、子どもの虐待とネグレクト、10(2), 214-218。
- 8) Takano, Y., & Sogon, S. (2008) Are Japanese more collectivistic than American?: Examining conformity in In-group and the Reference-group effect. Journal of Cross-Cultural Psychology, 39(3), 237-250.
- 9) 小花和 Wright 尚子 (共著) (2008) 第17章 家族のストレス 服部祥子・山田富美雄 (監訳) 包括的ストレスマネジメント 医学書院 (Greenberg, J. S., (1999). Comprehensive Stress Management 6th edition. WCB McGraw-Hill)。

(2) 2007年度

- 1) 河合優年 (2007) 2006年国際ワークショップ・公開講演会報告 発達研究 第21巻 pp. 203-218.
- 2) 河合優年 (2007) 感情が作る絆 日本心理学会公開シンポジウム 人を結びつけるコミュニケーション～感情と文化を考える～ (他講演者: 余語真夫・大坊郁夫) 同志社大学今出川キャンパス 招待公演。
- 3) 河合優年 (2007) The Japan Children's Study: Pilot Cohort Studies Based on Behavioral and Brain Science. ユタ大学心理学部 招待講演。
- 4) 高橋恵子・河合優年・仲真紀子 (2007) 感情の心理学 (pp. 22-30, 47-55, 154-163, 165-175, 190-199) 財団法人放送大学教育振興会。
- 5) 山本初実・中西恭一・大森雄介・佐々木直哉・馬路智昭・E smot ara Begum・盆野元紀・山川紀子・田中滋己・井戸正流・駒田美弘 (2007) 三重県における新生児医療の現況 医療, 61(8), 564-569.
- 6) 根ヶ山光一 (2007) 発達行動学からみた子どもの食発達 小児看護, 30(7), 860-865.
- 7) 根ヶ山光一 (2007) 子どもの攻撃性の背後にあるもの 児童心理, 867, 43-49.
- 8) 根ヶ山光一 (2007) 子どもの発達と親: 子どもの就寝と子別れについて 南徹弘 (編) 発達心理学、朝倉書店。
- 9) 小花和 Wright 尚子・河合優年・山本初実 幼児期の心理的ストレスを軽減する楽観性の研究—弾力性と楽観性の研究平成17年度— 平成18年度科学研究費補助金研究成果報告書。

(3) 2006年度

- 1) Kawai, M. & Fogel, A. (2006) Hikikomori in Japanese Youth: Some possible Pathways for Alleviating this Problem from the Perspective of Dynamic Systems Theory. Research and Clinical Center for Child Development. Annual Report 2004-2005, 28, 1-12.
- 2) 河合優年 (2006) 第2回情報統計ワークショップ「発達コホート調査と脳科学の方法的接点」－真の学際的協調を目指して－ パネリスト。
- 3) 二宮克美・大野木裕明・河合優年・宮川充司・田中俊也・中島実・宮沢秀次・原田唯司・吉田直子・浅野敬子・後藤宗理 (2006) ガイドライン生涯発達心理学 ナカニシヤ出版。
- 4) Begum EA, Bonno, M, Obata, M., Yamamoto, H., Kawai, M., & Komada, Y. (2006) Emergence of physiological rhythmicity in term and pretermneonates in a neonatal intensive care unit. Circadian Rhythms, 4, 11-8, 2006.
- 5) 大谷範子、山本初実、牧野智美、松岡佐恵子、植村晃子、玉木淳子、山川紀子、井戸正流、河合優年 (2006) 日本の子供の健やかな未来のために－第2報－すくすくコホートにおける三重研究グループでの短期予備的研究の被験者確保とその維持、医療、60(9), 569-575.
- 6) 根ヶ山光一 (2006) 環境とヒトの行動、中島義明・根ヶ山光一 (編)「環境」人間科学、朝倉書店。
- 7) 荘巖瞬哉 (2006) 世界はどのように子どもを育ててきたか、京都光華女子大学人間関係学部人間関係学科 (編)、人・社会・未来：ライフサイクルの人間科学、(pp. 1-22) ナカニシヤ出版。
- 8) 小花和 Wright 尚子 (2006) 家族のストレス 服部祥子・山田富美雄 (監訳) 包括的ストレスマネジメント 医学書院。

(4) 2005年度

- 1) 河合優年 (2005)「日本のコホート研究から 講演4」第4回新・赤ちゃん学国際シンポジウム－子育てを科学する－ (東京：大手町サンケイプラザ)。
- 2) Kawai, M. (2005) A pilot study of JCS as preparation of cohort study (1) infancy. The First International Symposium on Cohort Studies Based on Brain-Science (1st ISCS-BBS) Published: Japan Science and Technology Agency(JST). pp. 18-21.
2004年度
- 3) Kawai, M. & Sogon, S. (2004) Emotion intelligence and child rearing in culture.

28th International Congress of Psychology (ICP2004). Invited Symposium. Co-convenor. In Beijing.

4) 河合優年 (2004) システムとしての発達を考える ベビーサイエンス、3, 2-7。

7. 次年度に向けて

スタートしたばかりのセンターであるが、過去のデータ解析だけでなく、現在もデータの収集が進められている。22年度は、これらの論文化とともに、地域との連携をさらに強め、センターの目的となっている、育ちと学びをどのようにつなぐのかについての成果を上げたいと考えている。

Ⅱ. 2009年度活動概要

2009年度は、基礎研究、地域連携研究活動、講演活動などを実施してきた。以下にその概要を記す。

1. すくすくコホート三重・武庫川チャイルドスタディ

(1) 経緯

独立行政法人日本科学技術振興機構（JST）の「脳科学と社会」計画型研究開発「日本における子供の認知・行動発達に影響を与える要因の解明（JCS：Japan Children's Study）」が、2009年3月で終了した。これは、乳児期から児童期に至る発達過程を、①子どもと養育者の両面について縦断的に追跡し、現代の子どもの発達の変化をその環境を含めて総合的に捉えると同時に、②児童期における社会的適応行動をアウトカムとして、エクスポージャーとしての乳幼児期の個体要因、環境要因との関係を明らかにし、③発達の変化の機構を総合的に検討することにより、今日社会的に注目されている、児童期の適応問題の発生機序の解明と問題への具体的な支援のための方策を提案しようとするものであった。同時に、④できるだけ早い時期に、この研究で得られた画像を含めた様々なデータ

を、共用発達研究データベースとして、一定の条件の下に日本における発達研究者に提供し、ひろく将来の発達研究の発展を目指すことを目指していた。

このようなミッションのもと乳幼児・児童を対象とした追跡調査が行われた。乳幼児を対象としたコホートは、大阪府（すくすくコホート大阪）と三重県（すくすくコホート三重）に拠点が置かれ、生後4ヶ月から5時点で観察調査が実施された。児童を対象としたコホートは、鳥取県（すくすくコホート鳥取）に拠点が置かれた。また、NICUを経験した子どものコホート研究、武庫川チャイルドスタディなど、先導的な追跡調査も行われた。

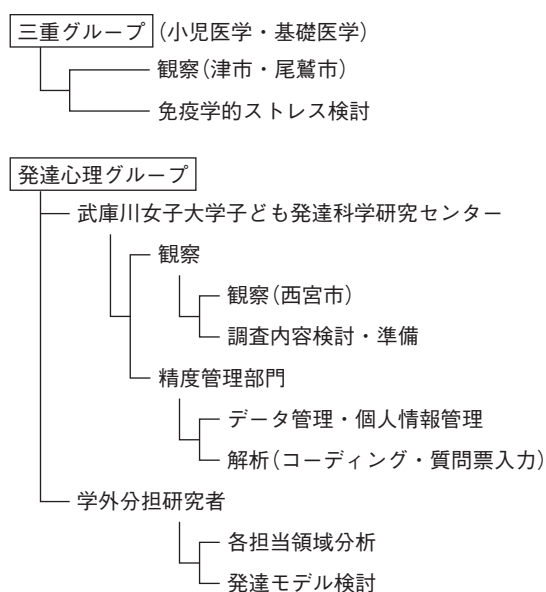


図1 「乳幼児期の個体・環境要因が児童期の社会的行動に及ぼす影響についてのコホート研究」における研究組織図

発達初期の個体要因、環境要因が後の社会的行動とどのように関係するのかを明らかにするためには、現在データの収集が終了し解析が進められている幼児期までの研究に加えて、社会的ルールの能動的な生成など真の意味での社会化がはじまる児童期までの追跡が必須となる。そこで、JCSの調査協力者（一部）の発達の追跡調査を、文部科学省科学研究費（基盤A）の支援を受け、「乳幼児期の個体・環境要因が児童期の社会的行動に及ぼす影響についてのコホート研究」として、子どもセンターと、国立病院機構三重中央医療センター臨床研究部（以下、三重グループ）で引き続き実施することになった（図1）。

(2) 2009年の進捗

すすくコホート三重の調査協力者に対し、調査継続の案内を送付した。同意が得られた母子に対し、5歳時点の観察調査を開始した。この観察調査において、子どもセンターでは、質問票の提案、観察内容の提案を行い、担当箇所の具体的手続きを整備した。また三重グループでは、NICUを経験した子どものコホート研究も引き続き行われており、これは、2歳6ヶ月時点での調査となる。この観察調査の一部は次述の武庫川チャイルドスタディ2歳6ヶ月調査と同じ内容を実施している。

武庫川チャイルドスタディでは、2歳6ヶ月児に対する観察調査を企画・実施した。2009年の参加者は、2歳6ヶ月時点：観察・質問票の参加42組、質問票のみの参加11組（返送見込み4組含む（2010年1月現在））、1歳6ヶ月時点：観察・質問票の参加2組であった。2009年は、次子の妊娠・出産が重なり参加が難しいケース・転居による中断があった。当該児に関する個別相談や、同胞に関する相談も寄せられた。武庫川チャイルドスタディの観察スタッフによる対応のほか、一部は小児科医との個別相談の機会を設定した。

(3) 今後の展望

すすくコホート三重は、引き続き5歳時点の観察調査を行う。子どもセンターでは、この観察調査のバックアップを行うとともに、得られた画像データの解析、モーションキャプチャ・データの整理、質問票の入力と整理、総合的な分析を行う予定である。

武庫川チャイルドスタディでは、3歳6ヶ月時点の観察調査を順次実施する。また、これまでの観察調査データと接続し、子どもの“育ちの道筋”を明らかにしていく。

2. 西宮市研究協力・受託事業

(1) 経緯

西宮市では未実施の生後10か月児の健康診査を検討するため、西宮市保健所保健サービ

ス課母子保健チームを中心にした保健師の検討チームが活動している。この活動に対し、子ども発達科学研究センターは2007年度より研究協力を行ってきた。本委託事業は、その評価結果に基づいて、西宮市との委託研究事業として実施されたものである。

本事業は、2008年に西宮市と武庫川女子大学との間での研究協力として、「乳幼児の追跡調査に関する委託研究契約」を締結されたことによるものである。具体的には「乳児後期アンケート」を西宮市内の10か月児全数（4798名）に対し実施した（2008年4月より）。これは、保護者の任意の調査協力であったが、半数を超える協力が得られた（配布・回収とも郵送）。この調査をもとにして、ハイリスクと推定される母子に、「すくすく相談会」（2会場・月1回）への案内が送られた。「すくすく相談会」では、小児科医の診察、集団での心理的・具体的な育児支援、希望者には臨床心理士、栄養士、歯科衛生士との個別相談が行われた。また、カンファレンスでハイリスクと判断された場合は、保健師のアプローチなどのフォローが行われた。

この中で、子ども発達科学研究センターは、アンケート項目の提案や基礎データの提供、アンケート作成の支援、生後10か月頃の子どもの発達をまとめたリーフレットの作成支援、返送されたデータの匿名化、データ入力と整理、ハイリスク児の抽出作業・個人票の作成、相談会内容への助言、臨床心理士の紹介、データ管理システムの提供といった協力をした。また、アンケート調査の妥当性検討のため、「すくすく相談会」のカンファレンスに参加し、「すくすく相談会」に参加した母子の情報収集を行った。基礎データの中間報告（2回）と年度末報告（2009年度に実施）を行った。

さらに、上記「乳児後期アンケート」対象児が生後1歳6か月になるときに、再度アンケート調査が計画された（2009年1月より）。これは、「乳児後期アンケート」と同様、1歳6か月児を持つ家庭へアンケートを郵送し協力を求める、任意の調査である。回収は1歳6か月児健康診査時に持参する形で行った。子ども発達科学研究センターは、「乳児後期アンケート」と同様に、アンケート項目の提案や基礎データの提供、アンケート作成の支援、データ入力と整理などを行った。

（2）2009年の進捗

以上の流れを受けて、2009年度には、乳児後期アンケートは「10か月児アンケート健康診査」として市の健診業務に位置づけられ、実施されることになった。これに伴い、西宮市と武庫川学院の間に「10か月児アンケート健康診査及びフォロー事業に関する委託契約書」を締結し、西宮市から武庫川学院に委託費が支払われた。子ども発達科学研究センターが2008年度に担当していた業務は、武庫川女子大学子ども発達科学研究センターに引き継がれた。

2009年度は、毎月400名程度（年間約5000名の見込み）の対象児のうち、9割前後の返

送率となっている。また、健康診査という位置づけであるため、「すくすく相談会」への参加案内だけではなく、簡単なアンケート結果の返送も行われている。「すくすく相談会」も会場・回数が増やされ（４会場・月４回）、対応人数が増えたことを受けてハイリスク抽出の基準の見直しを行った。2008年度同様、基礎データは、中間報告会（①2009年８月・②2010年１月）にて報告を行った。年度末報告は、2010年度内に行う予定である。

また、2008年度中に開始された１歳６か月児に対するアンケート調査は2009年度にも引き続き実施され、１年分のデータが蓄積された。このうち一部のデータについては、10か月時点のデータと連結され、分析を開始している（2009年度中間報告会②にて発表）。

2008年度に10か月、2008年度から2009年度にかけて１歳６か月のアンケート調査を実施したコホートは、2010年度３歳５か月での追跡調査が西宮市との共同研究として計画されている（図２）。

今後、アンケートの妥当性の確認や、西宮市における乳幼児発達に関する研究を、西宮市保健所との協力関係の下、進めていく予定である。

３．子どもの育ちと学びを支える専門職の方のための「子どもの発達」を学ぶ会

（１）はじめに

平成21年４月、武庫川女子大学教育研究所の研究組織として、子どもセンターが時限付きで設置された。子どもセンターの設置目的には、日本における発達研究のリーダーとして研究を継続するとともに、基礎研究において得られた研究成果を地域に実践的に還元するということがあげられている。このような還元の試みは、保健所における乳幼児健診や、地域での講演活動などとしてなされている。

そのうち、センターの研究員として参加されている小児科医、作業療法士、子どもセンターの研究を、『子どもの育ちと学びを支える専門職の方のための「子どもの発達」を学ぶ会』として、主として現場にいる実践者と大学院在籍者を対象として講演形式で2009年度に実施したものを以下に報告する。

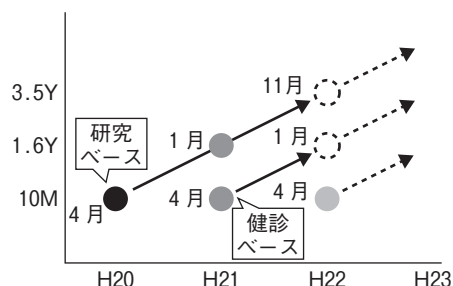


図２ 西宮市アンケート調査・アンケート健診実施予定

(2) 開催の主旨と2009年度の取り組み

学ぶ会は、西宮市内の子どもの発達支援に携わる実践者と、本学の大学院において子どもの発達支援職を目指している学生に対して開催されている。運営は子どもセンターが行い、西宮市からの後援を得て進められている。

学ぶ会では、子どもたちのさまざまな育ちの道筋への理解や、子どもたちそれぞれの個性に合わせてどのように見守っていくのかなど、子どもの育ちと学びをつなぐための方法などの検討を目的として、月1回さまざまな話題を話題提供者に提供してもらっている。

2009年度は、子どもの育ち、母親への支援を行っている西宮の専門職の方を中心として、「発達障害の理解」という視点から、計5回の講演を実施し、子どもの発達について議論を深めた。また、セミクローズドのケースカンファレンス、現場での対応の相談などの支援を計5回行った。これらの回は、主に西宮市で活動する保健師から話題提供があった。また、最終回では、実際に子どもたちに接する現場で、子どもたちを把握する際のポイントをどのように捉えているか、など、専門職者の集まりであることを活かして、研究活動への示唆を得る場がもたれた。

(3) 実施記録

学ぶ会は、武庫川女子大学学術交流館1階会議室を利用して、おおむね月1回、土曜日に開催された。講演・検討時間は、10:00～11:30（第4回のみ10:30～12:00）である。開催日時と実施内容を表1に示した。

表1 「子どもの発達」を学ぶ会 開催報告

回	日程	テーマ	タイトル	担当者	参加者数	院生参加
1	5月9日	発達障害の理解(1)	(概論)	石川道子 (名古屋市立大学)	45	(21)
2	7月4日	発達障害の理解(2)	発達障害児への支援 —幼児期から始めよう—	石川道子	33	(20)
3	8月1日	発達の捉え方	子どもの発達を考える	河合優年 (武庫川女子大学)	21	(5)
4	9月5日	発達障害を持つ子どもへの援助	姿勢と運動のこと…	舟橋吉美 (名古屋市北部地域療育センター)	16	(3)
5	10月3日	ケースカンファレンス		石川道子	17	—
6	11月7日	対応相談		石川道子	17	—
7	12月5日	母子コミュニケーション	育児におけるタッチの役割	根ヶ山光一 (早稲田大学)	17	(2)
8	1月9日	対応相談		石川道子	15	—
9	2月6日	対応相談		石川道子	15	—
10	3月13日	議論・総括		河合優年	14	—

(4) 各回の講演内容抄録

1) 第1回 『発達障害の理解(概論)』

(講師：石川道子)

発達障害の子どもの発達の道筋を理解する

発達障害・自閉症スペクトラムの子どもの発達では、対人関係障害のため母と子の関係性がズレて問題が生じてくる。3～15歳くらいでズレが大きい。たとえば3歳頃に集団生活を開始するとすると、初めて人見知りが生じることがある。これは、母がいなくなって初めて人見知りになるわけである。

発達障害の子どもが、いつ頃何ができるのかが大切となる。遅れがあるかないかだけでなく、いつ、どんな風に始まったか＜時期とエピソード＞が大切である。多くの場合、何らかの順調に行かないエピソードがある。順調にいかないということは、セオリー通りでは予測できないということである。発達障害の子どもは、発達しないのではなく、独特の発達の道筋を辿っていくことが多い。階段状の発達(図3)とでもいうような、停滞と急激な伸びを示す。また、領域間でデコボコのある発達をしていることが多い。知的障害は、バランスが取れて全体的にゆっくり進んでいく。発達障害と知的障害を両方持つ場合もある。

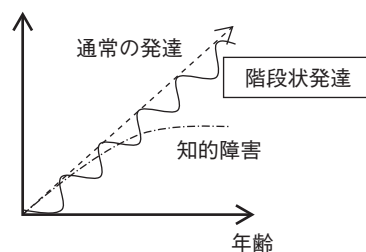


図3 発達の道筋モデル

概念の整理

発達障害に関する、さまざまな名称があるが、次のように整理できる。AD/HDは、主に行動特徴によって付けられている。その行動特徴を持つ、他の診断名がある子どももいる。優先診断としては、他の病名となる。幼児期にAD/HDの特徴を持ち、そのように診断されていても、青年期になると自閉症スペクトラムと診断されるケースが多い。学校場面では、LDが出てくる。本人の知的レベルに比べて特に低い場合に付けられる。知的障害がないという定義だが、知的障害があっても付けられることもある。

自閉症スペクトラムの特徴

自閉症スペクトラムを、認知の問題、脳の情報処理の問題(自閉タイプの脳の処理)から捉える。①視覚優位、②パーツ・細部、③同時処理、④パターン理解、⑤写真的記憶、⑥パニック、⑦感覚の過敏性、以上7つのキーワードから解説する。

①視覚優位 情報を取得する際に、視覚情報が優先される。話し言葉は苦手である。これは、見れば分かるが、見たことのないものは分からないという特徴につながる。したがって、支援をするときには、とにかくモデルを見せることが大切である。

②パーツ・細部 モデルを見せてもできない場合には、そのパーツや細部を見ている可

能性がある。描画のある部分だけが詳細になっている場合などはその典型である。言語が単語レベルの理解の場合は注意が必要である。言語の発達の問題としては言語消失が起こることがある。

- ③同時処理 2つ（以上）のことを同時に処理することができない。人の顔を見ることと話をすることは、別の処理を必要とすることなので、人の顔を見ながら話すことはできなかつたり、聞き取りを上げるために顔をそらしたりする。支援は、文字によって示すことが有効だが、字を知っていること、意味を知っていることが前提となる。
- ④パターン理解 パターンが決まったものが分かりやすい。例外のないもの、動作のパターンが決まっているもの（例：押すと電気がつくなど）が理解しやすい。逆に初めて会った人、多くの人が動いている場面などは苦手である。
- ⑤写真的記憶 記憶が良い。視覚情報は、写真で撮ったように記憶される。また、聴覚情報もテープレコーダーで録ったかのようにそのまま記憶する。次に同じものを見た時には、細部まで同じであることを求めてしまう。また、記憶した音声を、意味が分からないままに再生して使っている場合がある。意味が分かっている他児と、誤解が生じることが多い。
- ⑥パニック 脳の回路がショートしやすい。暑い、熱い、のどが渴いたというだけでもパニックは起こる。パニックを起こすと外部からの情報入力が中断される。支援の際は、余計な外部からの情報を遮断することも重要である。
- ⑦感覚の過敏性 視覚・聴覚だけではなく、刺激に敏感である。すぐに服を脱ぐ子どもは、皮膚感覚が過敏である可能性が高い。また、自分だけが過敏であることに気づいておらず、他のみんなもそうだと思っていることが多い。常に強い刺激の中にあると考えられるため、小学校へ上がって、45分、6時間の授業でじっと座って話を聞いているのは大変だろうと思われる。

以上の①～⑦が揃っていると、自閉症スペクトラムであると考えられる。一部だけであるから AD/HD というわけではない。また、自閉症スペクトラムがあることが問題ではない。社会生活の中で、どのように適応していくかが問題である。通常の発達をしていく子どもたちは、環境に合わせることができるが、このタイプの子どもたちは合わせにくい。「察してね」というような状況の理解、隠れたルールに気づくことが難しい。そのため、環境の変化があったときに、何らかの行動の変化が起こることが予想される。大人になると、分からない状況では動かないでじっとして観察していることが多い。

自閉症スペクトラムの子どもが各発達段階で示す行動特徴

自閉症スペクトラムの子どもは、発達段階や過ごす状況に応じて、さまざまな問題を抱える。ここでは、主な特徴についてまとめた（表2）。

最初の段階、乳児期では、行動の特徴を示すことは難しいが、模倣がない、といったこ

時期	乳児期	幼児期		児童期		
年齢(目安)	(1歳前後)	3歳前後	(5歳前後)	6歳	9歳ごろ	
主な活動の場所	家庭	家庭	集団	小学校低学年	小学校4年生	小学校高学年
		<ことばの遅れ> ・始語が遅い。 ・用いる言葉がおかしい。 ・初語が特徴的。 ・やり取りができない。 ・2～3歳に急に伸びることが多い。	<子どもへの興味> ・大人について行く。 ・子どもが見えていて入れない。 ・おもちゃに注目するが、周囲の子どもが見えない。			
		<かんしゃく> ・パニック ・言葉が使えないストレス ・顔をたたく				
	<行動の特徴> ・模倣がない	<身辺自立の遅れ> ・食事を自分でしない。 ・衣服を脱げるが着られない。 ・排泄	<集団活動> ・群れで動けない。 ・一番にこだわる。 ・行事はダメ。 ・新しいルールに合わせられない			
		<こだわり> ・変わった遊び	<片付け> ・用具の片付けができない。			
		<感覚の過敏性> ・皮膚感覚 ・視覚・聴覚など	<行動の特徴> ・ステレオタイプの動き			
					抱きつく・小突くなど年齢にそぐわない交渉	
					集団が見えてくる	不登校
					制服嫌がる	

幼児期（３歳前後）の家庭での行動として、まず言葉の遅れが出てくる。これは、始語が遅い、用いる言葉がおかしい、初語が特徴的（ママなどよくある言葉ではなく偏りがある）、やりとりができない、２～３歳に急に伸びることが多い。言葉の遅れだけではなく、言葉の使用全体の違和感のようなものに気付くことが大切である。また、子どもに興味がなく、子どもがいる場面であっても大人について行ったり、子どもが見えていて入れない子どもがいたりする。おもちゃにしか注意が向いておらず、一見そのおもちゃを持つ

ている子どものことも目に入っているように見えるが、実際にはおもちゃしか見ていないでトラブルになることもある。この頃に起こすかんしゃくには、パニックによるものと、言葉が使えないストレスによって起こるもの、人をたたくときに、顔など（通常はたたかない部位）をたたくなどがある。そして、身辺自立の遅れが起こりやすい。食事を自分でしない、衣服を脱げるが着られない、排泄の自立が遅れるといったことである。これらは、模倣がないといったことからつながってくる現象と思われる。この時期、こだわりは見られない、まだ見えない、と言った方が良好だろう。物を（本人なりの順番で横に）並べて遊ぶとか、タイヤの回転をじっと見ているなど、遊び方や好みに少し現れていることもある。

幼児期には、多くの子どもが集団場面に立たされるようになる。このとき、自閉症スペクトラムの子どもたちは、特徴的な行動を取る。まず、群れで動けない、ステレオタイプの動きなど、集団の行動から外れた行動を取ることで目立ってくる。順位が決まるものだと、1番にこだわることが多い。前後を気にしないのであれば、真ん中でもよいようだ。また、新しいルールに合わせるのが難しいため、行事は問題行動が生じやすい。保育園通園児であれば、1年の同じ繰り返しが大切である。身辺自立の遅れとも関連して、用具の片付けなどができない。

小学校へ上がると、環境が変わるので、適応に時間がかかる。小学校の生活の半ば、4年生頃に節目があるようだ。9歳前後に、ようやく集団が見えてくるようだ。これまで見えていなかったものが急に見えるようになるために、刺激の量が急に増してしまう。その結果、集団が怖いと感じれば不登校に陥りやすい。ルールが分かれば集団に入れる子どももいる。また、低学年から高学年に移行する時期に、ルールが分からず、友だちに抱きつく、小突くなどの行動を示す子どもがいる。具体的に示すことで改善策を考える必要がある。人前でやらない子どもと、そうでない子どもに分かれてくる。幼稚園や小学校では、制服の着用が必要になることが多い。このとき、身体的な過敏性により、制服を極度に嫌がるなど問題の出てくる場合がある。

まとめ

以上、発達障害、自閉症スペクトラムについて、発達の道筋の捉え方、似た概念の整理、脳の情報処理の特徴、乳児期から小学校までの大まかな不適応行動について紹介した。次回は、さらに詳しく支援の視点も含めてお話しする。

2) 第2回 『発達障害児への支援 ―幼児期から始めよう―』

（講師：石川道子）

発達障害について

本講演会では、はじめに発達障害をどのように捉えればよいのか、また、診断がなぜ必

要か、ということについて述べられた。

発達障害は、定型発達と発達経路が違うことが特徴としてある。つまり、発達障害が障害であるということではなく、その子どもなりの経路で発達していく。ある環境にその子どもなりに適応し「普通」にしているように見えても、根底に発達障害がある場合、いつでも支援できる体制を用意することが重要である。そのために、専門機関の受診（確定診断）は役立つ。これは、発達障害という診断をおこなうと、①効果的な対応、②発達の予想、③「つまずき」の予防が可能となるためである。重要なのは、専門機関の受診（確定診断）をすることがゴールではなく、児の理解とその支援についての情報を得ることである。

実際に子どもに接する現場で、どのようにして発達障害を発見していけばよいのだろうか。子どもを観察するポイントとしては、①同年齢集団の中で目立つ、②問題行動がある、という2点に留意したい。まず、①同年齢集団の中で目立つということについては、例えば、発達の遅れ、集団行動が取れない、課題ができない、妙な行動がある、といった目立ち方がある。妙な行動というのは、現在よりも前の時期に身につけたものを、状況が変わっても同様の行動を続けている結果、年齢、あるいは状況・場面にふさわしくない行動として目だってくることが多い。②問題行動は、落ち着きのなさ、離席、立ち歩き、教室に入らない、といった多動傾向や、乱暴をする、パニック、反抗的な言動などの周囲に対する攻撃的な行動傾向、また、約束を守らない、忘れ物が多いなどの集団生活のルールが守れないといった傾向として現れていることが多い。

幼児期より前に現れる発達障害

それでは、このような問題は、いつ頃から始まっているのだろうか。最近の研究で、問題は乳児期から始まっていることが分かってきている。そして、乳児期の問題は、乳児期のみで終わるのではなく、その後に影響が続いていくことが示唆されている。例えば、乳児期に姿勢のコントロールが不十分で、座位が不安定であると、安定するために手を支えにすることになる。このためにバランスの悪い座り方になり、椅子にじっと座ってられないという状態につながりやすい。また、手を支えに使っていると、両手を同時に自由に使うことができないことになる。この結果、扱えるものが少なくなり、手指の巧緻性が発達しにくくなる。このことによって握り方の完成が十分でない場合には、拇指対立に問題が生じ、後の書字障害へとつながる可能性などが考えられる。

このため、発達障害は乳児期から存在すると考え、早い時期からその子どもに応じて働きかける必要がある。乳児期は外界との相互作用が重要であるが、外からの働きかけが経験量を決めてしまう可能性が強い。子どもの問題となる行動を放置すると、その行動が未完成なままで次の段階に移行したり、他の行動要素との間に発達プロフィールのアンバランスが生じたりする。これらは、発達の次の段階で行動・学習が複雑化するときの問題

を引き起こしやすい。また、苦手な刺激があることを頭において働きかけることが重要である。

幼児期以降の支援

幼児期以降、子どもたちは集団生活に参加していく。ところが発達障害があると、集団生活に困難が生じてくる。幼児期以降の集団生活における発達障害児の問題行動を理解するために、自閉症スペクトラムの認知特性からのアプローチも重要であると考えられる。また、集団内の他の子ども・おとなにとって問題であり、困惑させられる行動も、本人にとっては何らかの意味がある行動であるという視点からの理解も大切である。これらのことを踏まえて、幼児期における到達目標を設定し、集団生活（例えば小学校の普通学級）に円滑に適応できる条件を満たすよう支援していくことも重要であろう。

ここで述べた集団生活で問題とされる行動は、次の4つに整理することができる。

- ①本人にとっては、適応するための行動（一人で遊ぶ、先生にくっついていたりなど）であるが、周りから見ると気になる。
- ②パニック及びパニックの回避行動（口にものをくわえる、教室から飛び出す、机の下にもぐる、友だちに手を出す、暴言を吐くなど）
- ③間違った学習をしてしまった行動（友だちに手を出す、課題をやらないですますことで、その場がしのげてしまうことを学習したなど）
- ④自然に獲得できなかった行動（長時間座る、手先の器用さ、きれいに食べるなど）

この中でも④は、やれるのに“やらない”とネガティブに評価されてしまう可能性が高い。このような問題行動を、自閉症スペクトラムの認知の特性から考えてみたい。認知の特性として、①細かく、パーツで物事を捉える、②2つ以上の情報処理が困難、③視覚優位である（はなしことばが苦手）、④パターンが決まった物事が理解しやすい、⑤記憶がいい、⑥感覚過敏性、⑦パニック（情報入力 of 停止）を起こしやすいなどが挙げられる。一部感覚入力が“高性能”すぎて、処理が追いつかないという理解もできるだろう。このような特徴から推測すると、はなしことばの獲得、人から情報を得る（特に複数・動きがある場合）、行動することと情報収集を同時にする、見ることと聞くことを同時にする、一定の姿勢を保つ、失敗したことを再度挑戦する、今までのやり方を変更する、初めてのものの理解などは、苦手な分野であると考えられる。

対人場面や集団場面のコンテキストでとらえ直すと、同年齢と遊んで楽しいと感じること、SOSを言語化すること、相手が聞きたいことを質問形式で答えること、適応行動を自分で考えること、苦手なことを頑張る、感情をコントロールすることなどは、達成が難しいといえるだろう。しかしながら、これらの行動の中には周囲からの適切な援助があれば、達成が比較的容易なこともある。視覚で覚えられること、毎日繰り返される行動、集団生活に参加させること、獲得すると便利なこと・気持ちが良くなることを教えてもらう

などの行動は、比較的容易であると考えられる。

これらを踏まえ、就学前までに子どもに対して次のような行動の獲得を促すような働きかけが有効ではないかと考えている。

- ①集団生活にできるだけいつも参加する。
- ②大人の指示に従うことができるようにする。
- ③身辺面の自立（排泄、食事、着脱）。

集団生活に参加させることが容易なのは、まだ体が小さいうちである。この過程は、参加しているが一緒のことはできない段階、参加しているうちに小学校の頃から周囲に合わせることはできるようになる段階、そして参加が楽しくなってくる高校生くらいの段階ということになる場合が多いようである。集団生活に恒常的に参加していることはもちろん、大人の指示に従う、身辺面の自立という項目は、小学校普通学級で過ごすことを考えると最低限の条件といえるかもしれない。

この3つの目標を達成していくために、幼児期ではどのような支援が必要だろうか。ここで、支援するときの原則を押さえておきたい。まず重要なのは、課題をやることと集団でおこなうことをいっぺんに要求しないことである。また、課題をやるにも、スモールステップをふむことが大切である。「きちんと」「ちゃんと」する、というような漠然とした指示ではなく、昨日やったことと同じ、というところから始め、具体的に順番に指示をする。限定した場面（部分）から始めるようにすることも重要である。同年代集団で行うことについては、まずは個人に対し大人が支援して実行することから始める。その後、自分でやってみる、大人が媒介して同年代と一緒にやる、大人が見守っている中で同年代と関わる、というようにステップを踏むようにする。これは、まず周囲からの嫌な刺激（ざわざわ、動く、ちょっかいを出されるなど）を排除した状態で、落ち着いて取り組む必要があるためである。もし、マンツーマンで大人が付けないときには、安心して状況把握ができるような“見物席”を設けるとうまくいく場合がある。何かしらの枠を設け、その中にいるようにという指示が通る場合は適用できる。そして、やらせたことは必ず成功で終わるようにしたい。うまくいかなかったとしても、“やろうとした”ことを褒めるようにするとよい。

具体的な支援の方法は、今回は割愛するが、支援をする中で知っておきたいのは、パニック時の対応である。まず、パニック状態とは、情報入力が出来ない状態にあることである。ここで重要なのは、①刺激を少なくする、②言葉による指導はしない、③パニックが終了してから働きかける、ということである。それに加えて、情動（気分、感情、欲求など）の安定を図る必要がある。そのためには、好きなものや好きな音を提示するなど、①気分転換の具体的な方法を取り、衣服の調整や静かな刺激の少ない環境にするなどにより②生理的な調整をする、そして③感情のコントロールをする、ということが必要とな

る。また、集団場面で大切になってくることは、二次的事故を防ぐことである。このために、本人が逃げ込めるような①回避場所を作る、または、②クラスメートから隔離するようにするということが有効であろう。本人はパニック状態にあるため、加害者になることが分からない。そのため、状況を把握できない子どもが周囲にいと、子どもが近づいて問題を起こす可能性があるので注意する必要がある。また、パニックを起こす前に、きちんと理屈で分かるような形で子どもの頭を休めさせるような方略（お遣いを頼むなど）も用意しておいたほうがよい。

以上、小学校普通学級への適応を目的とした場合の、幼児期からできる支援について考えた。早期に適切な支援をすることで、小学校、その後の適応は変わってくる。是非取り組んで欲しい。

3) 第3回 『子どもの発達を考える』

（講師：河合優年）

子どもの育ちは皆経験的に知っているが、根拠が明確でないと、危険である。母性神話がそうであったように、明確な根拠を伴わない評論になる可能性が高い。例えば、「3才までは母親が育てないといけない」という話があるが、それを言うのであれば、根拠が必要となる。実際アメリカでこの問題が取り上げられ、NIHCDと言われる研究が進められたということがある。職場復帰のため子どもを保育士に預けている母親は、不安を高くしたのだ。2600人のアメリカ人のデータが示した結果は明確であった。母親でなくても、保育士や専門の訓練を受けた人が子どもの面倒をみていれば問題ないということが明らかになったのである。書物の中にある、早期の母子分離の問題が一般化され、十分な根拠をもたないまま風説として流布することの問題がそこにある。今日は「根拠」について述べてみたい。今日のポイントは「認知過程」である。

発達障害のこだわりの根拠にあるものは何か？ まず、認知とは何か。認知とは「記憶したものと照合して意味づけをし、プランニング、実行すること。例えば、保健師が「お母さんどう？」と質問すると、子どもは、音を聞き、その後、意味を理解して、自分に尋ねられているということを理解し、何らかの判断をして答える。子どもはこのようなやりとりのなかで、他者とのやりとりの意味を知る。認知過程に何らかの難しさを持つ子どもは、このプロセスのどこかが違うのかもしれない。発達障害の子どもに関わる者は、この子どもたちの外の世界との相互作用のプロセスを知らないといけないと考える。学齢期になると言外に秘められた「ほのめかし」を理解できないといけないが、発達障害が疑われる子どもは「言葉の後ろ」にある意味が上手く理解できないのかもしれないのである。本人はちゃんとしているつもりだが、周りを変だと思う。そこに相互作用の変調が生じる。

子どもを理解するとき、DSM-IVなどの基準を用いる場合、私たちは子どもを何らかの

基準（評価軸）の中で理解する。基準値からどれくらいずれているかを見るのである。DSM-IVの基準となる行動がどのような状態にあるのかということが診断となる。しかしながら、生活の中で子どもを理解しようとする時には、診断がすべてではなく、診断の後どうするかが問われることになる。その後子どもがどのように生きて行くのか。私たちは考えなければならない。

実生活のなかで子どもを見る場合、主観が大きく入ってくる。主観とは、私の視点であり、そこでは子どもの視点は後回しになる。私からのとらえ方は、さまざまな問題行動を子どもに帰属させる危険性がある（子どもが悪いから…自分はそう思う…とらえ方が問題である）。大人とは異なるルールの中にいる子どもを暖かく、かつ、きちんと理解する必要がある。

「遊びのルールが分かっていなくて、皆の後をついていく子」これは、ルールの習得ができていない可能性がある。では、子どものなかでは何が起きているか。実際に我々も体験してみる（ゲーム：身体の一部を指し、聞く。「これは？」→白菜、「これ何だ？」→大根、「これな～に？」→にんじん。）。このようなゲームでは、指さすものではなく、聞き方の語尾によって、答えとなる野菜の名前を指定する、というルールを理解できて参加している人と、理解できないでいる人が出てくる。いま実際に体験してみて、自分がどちらであったかどうかは別として、ルールがわからないと参加できなくて孤立していくということが分かったのではないだろうか。ADHD、アスペルガーの人たちは、私たちが今、体験した「ルールがわからないなか」で、生きているのではないかと考えられている。皆が分かっている中で自分はわからないそういうなかで生きているのである。

社会のルールがわからないから失礼なことになることもある。援助する人間は子どもがやっている意味や、その行動がどういう機能を持っているか、何に対処しようとしているかを知らないといけな。ウィニコットが言うような、可もなく不可もなく、それぞれの子どもがもっている能力、力というものにおいて、ほどよく対応する「ほどよい母親」がよいのかもしれない。自分の頭のなかにある理想的な発達をしている子どもとの比較の中で子どもをとらえるのではなく、子どもの個性によって対応できるのが良いのではないだろうか。

ここで、発達障害児の「心の理論」について少し話してみることにする。発達障害の子どもは、他の人がどう思っているか理解することが難しいとされている。相手も自分と同じような思考をしているのだということが分かりにくいのである。だから、相手の事を考えず、マイペースで動くことになる。結果的に、集団から浮きあがってしまう。このようなタイプの子どものみでは「鑿（のみ）と言えは槌（つち）」のように、あるものについて語るときに、常識として暗黙のうちに持たれているような、その背景にある関係性や関連事実に基づく理解が困難であると。このことは、そこまで言わなくても分かるはずだという

大人の思いこみと相まって、子どもをさらに難しい状況に追い込むことになる。当たり前が苦手なのである。

それとともに、いくつかの処理を同時にするということが苦手であるとされている。「聞きながら書く」「歩きながらしゃべる」などは、私たちにとっては他愛もないことであるが、実はとても高度な作業なのである。複数のことを「同時にどれくらいできるのか、できていないか」を観察することは重要かもしれない。課題を小さくユニットに分けて計画的に実行させることは有効である。TEECH プログラムやスケジュールについての知識は重要である。

学校で、上手くやってゆくためには、先生が何を期待しているか、何を求めているかを推測する必要がある。このためには、知識とともに、先よみをする力、予測する力が必要であるが、これらが欠けている。言葉に含まれる言外の意味理解が難しいといえるのである。コミュニケーションの難しさはここにもあるのである。発達障害を理解するときにはこのような視点も重要であろう。これ以外にも、おそらくは同じような仕組みによって作られていると思われる、共有感覚（他人の経験を感じる）ことが難しいとされている。

私たちは、人と人がいれば社会が形成されると考えがちであるが、ルールを共有しない人間の集まりは、集団ではなく群衆・人混みとしての集まりでしかない。コミュニケーションが社会を作るのであるが、そこに難しさを持つ子供達は、周りの人々を人混みとして見ているのかもしれない。コミュニケーションをいかに取るのかを私たちは考えなければならぬだろう。

子どもがどうも他者を理解していないかもしれないと考えられる基準はいくつかある。家庭や健診においては、会話のリズム・テンポ（テンポの悪さ）、アイコンタクト（が、できない、目が落ちていない、見ようと努力している）、ステレオタイプな反応（常同的反応しか出てこない・バリエーションがない）などが考えられる。また学校などでは、興味のある所だけ聞いて興味のないところは聞かない、自分のやり方を主張して譲らない、理屈っぽい、言外の意味を無視して文字通りにとらえる、することを忘れる、決心ができない、型どおりの実行形態しかもっていないなどの行動が考えられる。

発達とは、それぞれの人が今持っている能力や機能を使って、環境との相互作用を行い、快適に生きることであるが、相互作用における共通のルール理解に問題が生じると、コミュニケーションそのものが難しくなることになる。それは個人にとっては快適ではない環境となる。発達のコースを理解することは、そのようなコースが望ましいということではなく、そこでどのような働きが起きているのかを知ることである。私たちは、ある行動が出来るようになるという点に注目しがちであるが、実はその働きが得られるような行動を見つけることが大切なのである。基礎に立ち戻りながら、実践活動を進めることは重要である。

4) 第4回『姿勢と運動のこと…』

(講師：舟橋吉美)

第4回は、名古屋市北部地域療育センター作業療法士の舟橋吉美先生をお迎えして、先生が取り組んでいる、姿勢保持と学校での学習や、その他の認知行動との関係について講演をしていただいた。パワーポイントによるデータ説明が中心であったため、ここでの記述はその概要のみとなっている。

我々の身体は、個々の要素が独立して存在しているのではなく、それらが相互に関連しあって、システムとして機能している。このことはどこか一部分が変調をきたすと、身体全体が変調を来すということを意味している。これは、「システムの考え方」であり、シナジーと呼ばれるものでもある。私たちもそのことを体験することができる。例えば、靴の中に小さな小石が入っているだけで、注意が散漫になり、コミュニケーションや作業の効率が著しく低下し、放置すると生活全体が崩れてしまうこともある。これは身体における障害が、そのみにとどまらないことを意味している。

このことは、小さなことでも、身体全体に大きく影響する可能性を示している。姿勢制御はその一つと言える。実践的研究として、子ども達の体型に応じたオーダーメイドのクッションを作成し、授業に集中できない子ども達の作業効率がどのように変化するかという調査を行っている。これは、作業療法の中で得られた知見を実践に移すという、研究から実践への適用でもある。作業療法の対象は、身体障害、精神障害、発達障害、高齢者と幅広く、その活動範囲も個別支援だけでなく、地域にまで広がっている。発達障害分野での治療的関わりとしては、粗大運動、功微運動、日常生活、学習基礎能力などがあり、子どもの心理、社会性に関する発達課題も考慮した上での援助を行っている。

例えば、作業療法における目的を心理的な「成功経験」とし、援助方法を「机の高さ・スプーンの形状+経験（誤学習集を防ぐ）」などシステムティックに変化させながら、効果を得るような努力をしている。このような中で、低緊張（身体がやわらかい、関節がぐらぐらしているなど）である子どもたちが、じっと座ってられない、じっと立ってられない、じっとしているよりも動いている方が楽であるような行動をすることが見えてきた。走り回るという落ち着きのなさもこれと関係しているのではないかと考えるようになったのである。このような子どもたちには、偏平足、つま先歩き、分離運動がぎこちない、ぼーとした表情、4歳まで笑った顔を見たことがない、目も開きにくいなどの、一見関連のない状態が見られることにも気付かされることとなった。これらの経験から、姿勢が子どもの身体だけでなく生活全体と関連するのではないかと考えるようになったのである。

以下パワーポイントに添って説明がなされた。

自閉症児の特徴説明の後、視覚、前庭感覚、固有受容覚が関連しあって機能していない

と姿勢制御が難しくなり、結果として機能的な姿勢を維持できないことについて説明がなされた。身体の操作にこれらの姿勢制御が重要な働きをしていることは疑うべきもないが、それらが、保育園や学校生活のどの部分と関係してくるのかについては、あまり理解がなされていない。保育園などで問題になることのひとつとして、着替えや排便などの基本的な身辺自立の未熟さがあげられることがある。これは、しつけや生活習慣の問題として扱われることが多いが、それ以外の要因があるかもしれない。それは姿勢である。

着替えの場合を考えてみると分かりやすいかもしれない。姿勢を保持できないのに、シャツを着たり、ズボンをはくことは難しい。着替えだけが上手にできないというような場合には、その原因が別のところにあるのかもしれない。トイレも同様に、座位のバランスが要求される。うまく排便できない子どもに、足裏が床について、背もたれのあるトイレを使うことにより便がしやすくなる場合があるのはこのためではないかと考えられる。

上肢の操作と姿勢との関係も重要である。教室でいつも肘をついて授業を受けている子どものケースがある。学習意欲の乏しい子どもとして解釈され、実際に字を書いたりすることが得意ではない。その原因は、本当にその子どもの中だけにあるのかというのが問われるべき点であるとする。例えば、机（イス）が高かったり、低かったりすると、学習効率は落ちることになる。また、そのことが姿勢の悪さをまねき、体重が左右アンバランスにかかることになり、集中力が低下することになる。

カスタマイズしたクッションを使うことにより、椅子に均等に圧力がかかり、重心がイスの上で動きやすい状況になる。このことは、姿勢の変換や微調整をスムーズにし、その結果として両手を使えるような状態が生まれ、肘をつかなくなるのである。同様の効果はお尻に、すべり止マットを敷くことによっても観察されることから、学習と姿勢との関係が強いのではないかと考えている。

このような姿勢に関係する、視覚、前庭感覚、固有受容覚の働きは人によって刺激性、感受性、活動性が異なると考えられる。これらは、胎児期にもあるようであるが、出生後に重力に出会うことによって、再構築するようである。これは大人にも見られる。感覚チェックリストにより、感覚の登録（入ってきた情報をちゃんと登録できるか）、感覚の探索（快・不快な刺激をどうやって工夫するか）、感覚の感受性、感覚逃避という側面についての個人の特性が見られる。

システムとして発達を見ると、姿勢ということも重要なポイントであることが示されている。これからもそのような視点を持って子どもの育ちを見てほしい。

5) 第7回 『育児におけるタッチの役割』

(講師：根ヶ山光一)

身体接触の重要性

育児の中で、母と子が「触れ合う」ということについて考えたい。

はじめに、いくつかの実験から、触れるということの重要性を指摘したい。ハーロウは、アカゲザルの赤ん坊を用いて、針金製の代理母と、布製の代理母を用いた実験を行った。針金製の代理母からだけミルクがもらえるように場面設定しても、子ザルはミルクをもらえる針金製の代理母には最低限しか近づかず、基本的には布製の代理母にしがみついている。他に、同じくアカゲザルにおける隔離飼育の実験では、他者に向けられるべき攻撃行動が自傷となって出てくることが示されている。また、ヒトの母親が子どもに対して反応を止めた場合、子どもがどのようにふるまうかをみる Still-face の実験でも、子どもに触れているかどうかで、反応が和らげられることがわかっている。これらのことから、「身体接触がある」ということが子どもにとって非常に重要な要素であることが分かる。

抱きと身体接触

育児の中で相手の体に触れるという場面は多々あるが、「抱き」をまず取り上げたい。抱っこのバリエーションは色々ある。子どもを縦に抱くか横に抱くか、母親の右に抱くか左に抱くか、母親のどちらの手が下で支えているか、尻の下に手を回しているか股の間に手を入れているか、子どもが正面を向いているか後ろを向いているか、子どもが足をだらりとしているか、母親の体に巻きつけているか、など多くのポイントがある。母親が子どもを抱くときには左側に抱くことが多いということは古くから知られているが、最近になって右抱きと産後鬱との間に対応関係があるということが明らかにされた。それはどうやら脳の半球優位性と関係することらしい。それはさらに、母親の利き手とも関係するものらしく、最近の私達の詳細な行動研究によれば、半球優位性と利き手との組み合わせによって説明されそうだということがわかってきた。

くすぐりと身体接触

小さな子どもと遊ぶとき、くすぐるということをする。このくすぐり遊びは、最初子どもはあまり反応しないのだが、6、7ヶ月齢ごろからだんだんと反応するようになってくる。また、実際に指が触れていなくても、くすぐる真似だけでくすぐられているかのような反応をするようになる。このくすぐるというのは、皮膚に対する刺激であるが、同じ刺激を自分で与えても通常はくすぐったさを感じない。また、親しくない他者からくすぐられると、不快を感じる。つまり、くすぐったさは他者との関係の中で生じてくる感覚であるといえる。

ではどのようにして、くすぐり遊びは成立するようになるのだろうか。まず4ヶ月齢頃では、子どもは大きく快・不快の反応をする。母からは笑顔が向けられており、これは快

の刺激である。しかし、くすぐられる接触は、子どもにとっては元来不快であり、避けようとする。母は、子どもから期待通りのくすぐったがり反応が得られないため、さまざまなくすぐり方を試みる。これが6、7ヶ月齢ごろになると、快・不快がくすぐったがりとして統合されるようになり、くすぐり遊びが成立するようになると考えられる。

身体接触と二・五項性

また、9ヶ月齢ごろには、共同注視が成立するようになるが、これは、他者の視点からモノを見ることができるようになったり、他者の目にうつる自分を理解することが可能になったりするということである。自分の身体は基本的に「ココ」にある。しかしくすぐりにおいて、母がくすぐりかける身体部位は、子どもにとって「ソコ」である。つまり、くすぐりは、ココとソコが交錯した状態で成立する遊びといえる。一方、一般に言われる共同注視においては、対象とされるモノは「ソコ」にあり、それが三項性を成立させる。くすぐりの対象とされる身体は、そのような意味ではソコでもありココでもあるのだ。ココの関係を二項性というならば、それは「二・五項性」とでもいいうる関係である。またくすぐりには、間主観的な性質もある。母は、子がくすぐったがるだろうという共感をし、共有しているからこそ、くすぐり、くすぐったがるという遊びが成立するのである。

追いかっこ遊びと身体接触

子どもと直接触れる接触遊びでは、どちらかが一方的に相手に触れている、ということではなく、双方の意図が会って行動が決まっていく。追いかっこは子どもが自力で動くようになるとよくする遊びである。これは、「触れるか触れないかの距離」を楽しむ遊びであり、つかまえないで逃がしながら、距離を保っていく。このような、つかず離れずという距離の操作を楽しむ遊びは、月齢とともに出現率があがっていくことがわかっている。

結論

以上、育児の中の触れる（タッチ）ということについて述べてきた。タッチとは、①同時双方向性があり、②強い感情（抱き・哺乳（愛）～攻撃まで）を伴うものである。③全身から全身への刺激であり、④触れる一触れられるというひとつの状態を双方が共有しているという状態性、⑤自分の中のくすぐったさが相手の中にもあることを共有させてくれる同型性といった特徴があるといえるだろう。

初期の母子関係において、単にタッチが一方的な関わりかけとして重要だというだけでなく、抱き・くすぐりといった行為が教えてくれるようにそれは双方向性をもつこと、また「そばにいる」というバーチャルなタッチ感を発生するような距離の存在などまでも含めて、育児の中にさまざまな「触れる」場面があり、そこにはそれぞれに子どもの発達や認知のあり方が反映されているのである。このように豊かなタッチの重要性をあらためて認識してほしい。

(5) ケースカンファレンス・相談の概要

学ぶ会では、上記のような講演会に加えて、実践場面における事例検討を行ってきた。詳細は割愛するが、個別事例の検討は、枠組みとして述べられた講演内容に肉付けするものとして重要であるということが明らかとなってきた。2009年度は以下の5回の検討回を持った。

- 1) 第5回 10月3日（ケースカンファレンス・アドバイザー：石川道子）
養育施設・育児支援事業等、複数の専門家が関わっているケースについて、情報整理をし、対策を検討した。
- 2) 第6回 11月7日（相談、アドバイザー：石川道子）
発達障害を持つ子どもへの対応と、発達障害の傾向を持つと思われる母親への対応について検討した。
- 3) 第8回 1月9日（相談、アドバイザー：石川道子）
発達障害を持つと思われる子どもの言語消失や、言語使用の特徴、各領域における不器用さなど、現場での素朴な疑問に対する情報提供を行った。
- 4) 第9回 2月6日（相談、アドバイザー：石川道子）
保健師の働きかけを受け入れにくい親や、育児能力が低いと考えられる親にどのように働きかければよいか、また、きょうだいにどのように説明していくか、ということについて議論した。
- 5) 第10回 3月13日（河合優年）
議論・総括。

(6) 「子どもの発達」を学ぶ会2009の評価と今後の計画

2009年度は、発達障害の理解を中心に、子どもたちのさまざまな育ちの道筋への理解や、子どもたちそれぞれの個性に合わせた見守り方、子どもの育ちと学びをつなぐための方法などについて、専門職者とともに学びを深め、支援提供を行った。

参加者は、主に西宮市の保健師、保育士であった。また、講演会には本学院生の出席もあった。子育て総合センターや、療育施設からなど、子どもに関わる専門職の方々に機会を提供できた。また、複数の専門職が関わるケースでの情報整理など、現場への支援を行った。そして、最終回には、今年度に扱った事例以外の場面における、実践場面での問題について議論し、次年度への継続課題を検討を行った。

2009年度の「学ぶ会」では、情報を提供するという面では、子ども理解を中心として行った。しかし、現場では、子どもを支援するために、どのように家庭・母親にアプローチしていくか、ということについて、さまざまな問題を抱えていることが分かった。次年度は、このような問題にも目を向けながら、企画を立てていきたい。また、院生への公開

についての連絡など、いくつかの運営上の問題があった。それらについては今後改善していきたい。

初年度の全体的評価としては、一定の機能を果たしたと考えられる。2010年度は、子どもの育ちと地域・環境という視点から、研究所の講演会などとも連携しながら進めることを計画している。

Ⅲ. テクニカル・レポート

コホート研究における画像データの管理・分析システムの検討

河合 優年 難波久美子 佐々木 恵 Japan Children's Study Group

1. コホート研究の意義と本研究の目的

2009年2月に「縦断研究の挑戦 – 発達を理解するために –」（三宅・高橋、2009）が刊行された。近年の発達研究はとすると、単一機能の単一時点での測定値を積み上げるという横断的な手法を用いて人間の発達を捉えようとしてきた。これは、発達研究そのものの視点が変化したというよりは、効率的に時間軸に沿った変化を捉えるという、まさに経済的効率を重視したアカデミアのあり方を反映したものであると言える。図1は横断研究と縦断研究を比較したものである。0歳から20歳までの発達的变化を明らかにしたいと考えた場合、横断的研究の場合であれば、研究の実施年度においてすべての年齢での特徴が把握できることになる。研究者にかかる負荷は、時間的にも予算的にも大きくないかもしれない。しかし、それはあくまでも各年齢群のつなぎ合わせであり、全体的な傾向ということになる。

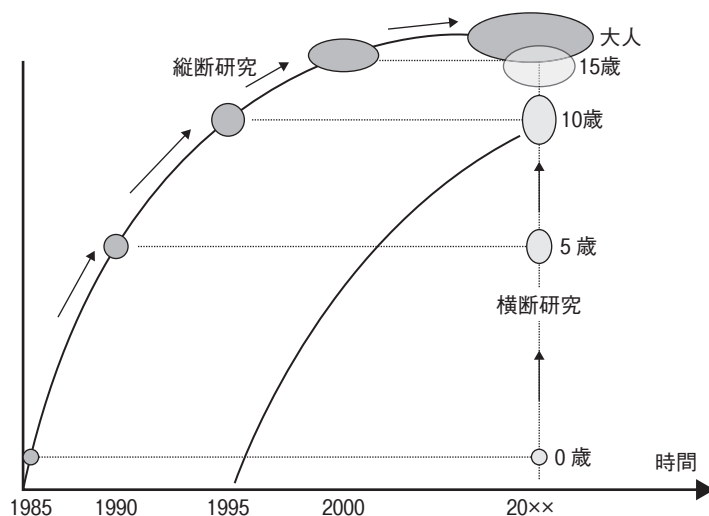


図1 横断的研究と縦断的研究の比較

しかし、特定の機能の発達的な変化を追跡することが必要である場合にはこの方法は適切ではない。子どもセンターにおいて進められている研究は、生後4ヶ月から学齢期まで

の子どもの育ちと環境との関係を明らかにしようとするものである。もしこれを横断的研究法によって、ある年度の4ヶ月児と10ヶ月児、18ヶ月児の育ちを比較するという枠組みで検討したとすると、どのような問題が起きるのであろうか。

図2はこの問題をモデルとして示したものである。ある行動特徴において、その行動の形成が良好であるか、良好でないかは、対象となった集団の平均値とその散らばりによって統計的に定義できる。この散らばりの指標には、標準偏差が用いられることが多い。例えば、その行動の形成が出来ないという子ども達を考えてみることにする。統計的にはそのような特徴を持つ子供達の出現率は各月齢の中で一定数いることになる。図2は、気になる行動の得点の分布を図示したものである。得点が高くなるほど気になる度合いが強いと仮定すると、4ヶ月、9ヶ月、18ヶ月のどの時点でも、平均からのはずれ度合いによって一定数の子どもが存在していることが分かる。これは、統計的な定義に基づいた、気になる子どもたちということになる。子どもたちの気になる行動の程度を把握するという点からは、このような横断的方法も一定の意味を持っていると言える。

問題は、図の中の示された→の子ども達の動きである。縦断的にみると、9ヶ月、18ヶ月における気になる子どもが、実は4ヶ月時点から継続してそのグループの中にいた子ども、18ヶ月の時点で初めてそのグループに入ってきた子どもを含んでいるということが分

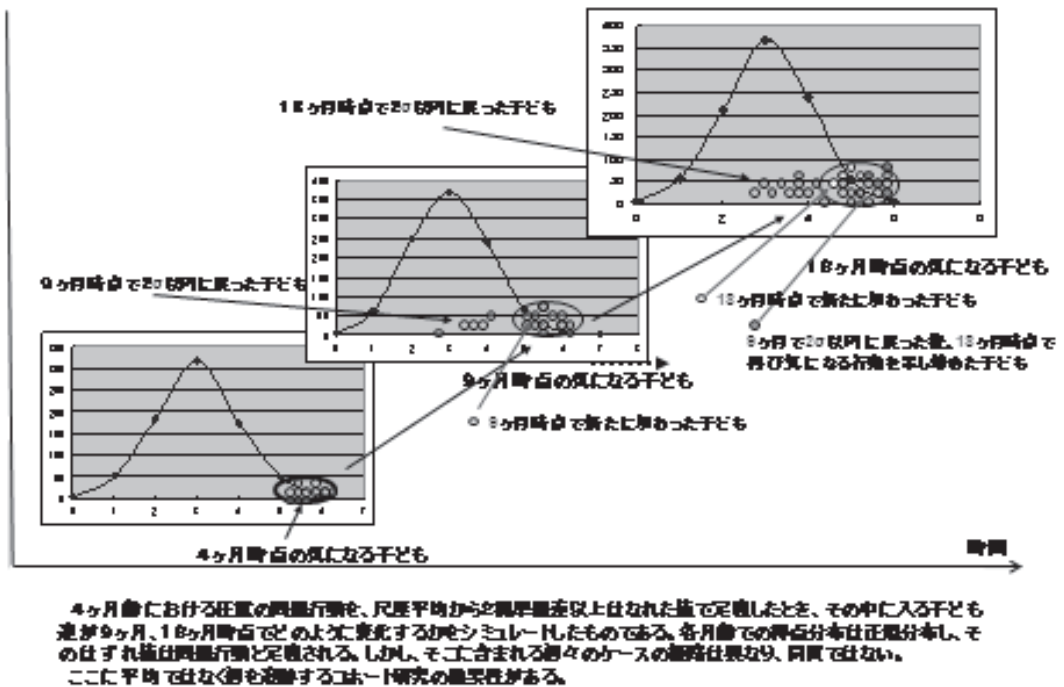


図2 個体の縦断的の追跡がなぜ必要なのか

かってくる。横断的な研究では、このような発達的变化の過程を記述し、その変化の機構を解明しようとする時に、個別情報が捨象されるのである。このことが、ある意味で時間と経費という研究コスト軽減の代償ということになる。

もちろん、一人の子どもを追跡していくという縦断的な研究方法は、膨大な経費と時間が必要である。必要な育ちに関するデータをどのように収集するのかについては、横断研究と縦断研究それぞれの持ち味を吟味する必要がある。横断研究によって示された個々の発達過程についての仮説を検証するためには、個別の発達経路を辿りながらそれに関連する要因との関係を検討することが必要となる。2000年代になり、米国のNCSに代表されるように、国内外において縦断研究が開始されてきていることと、この事とは無関係ではないと思われる。

上述してきたように、発達研究として変化のメカニズムを解明するためには、時間軸に沿った個を単位とした研究が重要である（三宅・高橋（2009）、Fogel（2008）など）が、それらを実際に進めてゆくためには、様々な技術的な課題も存在している。今回のレポートでは、個を追跡するためにどのような工夫がなされるべきか、また個人情報を守りながらデータを解析するためにはどのような方法があるのかなどについて、これまでの取り組みをもとに整理してみることにする。

2. 武庫川チャイルドスタディの枠組みと方法の展開

武庫川チャイルドスタディは、このような流れの中で、学齢期における社会性を目的変数として、発達初期からの諸要因との関係からその形成過程と機構解明を目的として計画された、独立行政法人科学技術振興機構（JST）の「日本における子どもの認知・行動発達に影響を与える要因の解明（JCS：Japan Children's Study）」（平成16～20年）の一部として展開されたものであった。現在は、子どもセンターでその研究を継続している。

このプロジェクトにおいて武庫川女子大学を拠点とする発達心理学グループは、KIDSなど発達の外的基準となるいくつかの指標の検討と同時に、ビデオに記録された母子相互作用の場面を量化し、定量的解析に耐えるデータセットの構築にあたった。

今回のJCSプロジェクトが他の研究と大きく異なるところは、各研究サイトにおいて対象となっている研究協力者の母子関係の様子が発達初期から記録されているという点である。このような相互作用の画像記録においては、観察条件の統制や、記録データの保管などの問題が大きな課題となる。画像は究極の個人情報である。このため、本プロジェクトにおいても、画像そのものをどのように管理してゆくのか、またどの時点で破棄するのかわからないのが現時点においても大きな問題となっている。発達グループでは、匿名性を維持しながら画像をどのように評価可能な形で保存してゆくのかについて検討を加えてき

た。

本報告においては、縦断研究の方法論を検討する第一歩として、JCS および武庫川チャイルドスタディにおける(1) 研究協力者の個人情報の管理のあり方、(2) 動画情報管理の方法、および(3) 画像情報の量化方法と分析方法について述べてみることにする。

(1) 研究協力者の個人情報の管理のあり方

1) 匿名化と個別情報の管理に関する検討

長期にわたる縦断研究では、協力者の情報管理に最大の注意が払われなければならない。これらの中には、画像や調査票などに含まれる個人情報の保護や、データ管理、協力者への依頼文書の配信など、さまざまなものが含まれる。このことは、個人情報がさまざまなところでアクセスされる可能性のあることを示している。このような過程における個人情報の流出を防ぐために匿名化 ID が用いられることになる。縦断研究の本体においては、二重匿名化がなされ、観察が実施されている地域サイトにのみ、個人情報が存在している。しかしながら、追跡年数の長期化にともなうアクセス数の増加に伴い、情報ファイルへの手作業（マニュアル）による入力や、他の関連情報との照合作業などにおけるエラーの混入が危惧されてきている。

武庫川チャイルドスタディでは、大規模コホートへの適用可能性を検討する意味から、これらの情報管理について2つの試みを行った。本稿では、バーコードによる文字情報を排除した個人情報の管理と、観察画像のランダムアクセスの可能性についての検討結果について述べる。

2) バーコードによる個人情報の管理可能性について

個人情報をどのように保護するのかは縦断研究を進める上でなによりも重要である。と同時に、各種データを確実に個人と対応させることが求められる。このため、各協力者個人に対して匿名化 ID が割り当てられ、その ID でデータが管理される。しかし、回収された元データから匿名化されたデータに至る作業においては、何段階かの人による変換作業が必須となっており、エラーが混入する危険性を排除することはきわめて困難である。

武庫川チャイルドスタディでは、バーコードを用いての資料管理について検討を加えている。バーコードによる一元管理は、管理簿にバーコードとの対応表を残すことにより、以後の処理は機械的に扱うことができるという長所を持っている。

2) 管理の実際について

今回の研究においては、文字情報によるデータをバーコードに変換して管理する試みがなされた。バーコードは、 のようにバーの組み合わせによって情報を伝えるものである。われわれは、エフケイシステム社製のバーコードスキャナー Z-3010を用いてデータの読みとりを行った。用いられたフォントは、テクニカル社のもので、サービス

サイトよりダウンロードした当該 CODE をパソコンのルート C:\WINDOWS\Fonts において上で、エクセル表の匿名化 ID に対応するフォントを変更することによってバーコードが作成されることになる¹⁾。

個人情報に関する原簿はエクセル表上で管理されるように設計された。

表 1 管理簿とバーコードの例

管理コード	調査票番号	協力者ID	氏名	住所	4ヶ月時データ			9ヶ月時データ		
					調査票送付日	観察日	特記事項	調査票送付日	観察日	特記事項
■■■■■ ■■■■	20100114	N207_45	西宮花子	西宮市	H19.1.13	H19.2.1		H19.11.13	H19.12.9	
■■■■■ ■■■■	20100120	N207_35	西宮太郎	西宮市	H19.2.13	H19.3.6		H19.12.13	H19.12.19	
■■■■■ ■■■■	20100130	N207_15	西宮次郎	西宮市	H19.4.13	H19.4.1		H20.2.13	H20.3.1	

表 1 はその例である。原簿以外の資料はバーコードとその対応 ID によって管理するように計画された。データ解析などについては、デコードされた ID を用いて進められることになる。このコード表の最大の特徴は、シールとして個人票を作成し、調査票の送付や観察時点の記録に貼り付け、資料整理ができることである。個表の送付確認や観察データの記録などがバーコードリーダーによる読みとりにより、入力の手間を最小限にすることが期待できる。表 2 は個人の実施計画表に添付されているシール紙によるバーコードである。

表 2 資料管理用シール紙の例

ID	4ヶ月確認			9ヶ月確認		
	調査票	観察	医師観察	調査票	観察	医師観察
N123456	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
N2345678	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■
N34567890	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■	■■■■■

バーコードシールは、研究協力者への調査票や観察時の記録用紙に貼り付けられ、バーコードリーダーによって機械的に参加確認がなされることになる。エクセル表におけるデータセットには、この情報が取り込まれ、管理されるように構成されている。

大規模コホートではこのような正確な情報の管理が重要であるが、調査票の部数が多くなる場合や、確実に継続管理するためにはこのような機械管理が有効であると思われる。バーコード自体が読みとり段階で機械を必要とすること、またそこに含まれるデータが匿名化 ID であることから、情報保護の上からも有効であると考えられる。今回の JCS 研究では、東京でのデータ管理ということもあり、実際にはバーコードでの管理は西宮サイトで試験的になされただけであったが、調査票の確認や、観察データの管理などの試験的な使用結果においては、十分な効果が確認できた。研究者側で個別認識がなされるとして

も、送付時や回答時に文字情報としての漏洩が防げるという操作は、研究協力者にとっても心理的な安心感を与えるのではないかと考えられた。今回検討されたバーコードによる情報管理プロトコールは実践的にも安定性や簡便性が確保されており、今後の大規模コホートにおける活用も期待できるものと考えられた。

(2) 画像データの管理等についての試み

1) 画像データ管理

今回の縦断研究における特徴の1つに、条件統制された場面での母子相互作用の様子などの動画情報の記録がある。このような試みはこれまでの研究においてもなされているが、観察場面すべてが記録されることはなかった。また、従来の研究の多くは画像をVHSなどのアナログ媒体によって記録しており、同一協力者の記録データは、同じテープに時系列的に録画し、分析に際しては記録情報をもとに逐次的な再生を行っていた。デジタル記録もなされていたが、コンピュータでの記録、再生はきわめてまれであった。この理由の最大のものは、ハードディスクの容量であった。近年、ハードディスクの容量が画期的に増加し、価格も飛躍的に安くなっている。この環境の変化は観察の記録をアナログからデジタルに急速に変化させるとともに、パソコンによる記録と分析への移行を加速させることとなった。

今回の縦断研究では、およそ5m四方の観察室に6台のSONYカラービデオカメラEVI-D70がセットされ、それらの情報がスイッチャー兼リモートコントローラーSONY-RMBR300を介して、独立した6つのチャンネル情報としてビクター社製のハードディスクレコーダーVR777に記録されている。VR777は、240GBのハードディスクを内蔵しており、カメラ6台の情報をそれぞれ30コマ/秒で記録している。これは標準的なテレビ画像と同様のコマ数であり、従前のデジタル記録のような画像のとぎれはない。これらの記録画像は、観察が終了後一時格納されたのち、さらに外付けのハードディスクに転送され、分析グループに渡されている。これらのデータは、表2のような形でVR777の記録チャンネル単位でファイル化され、それらの原簿作成がなされる。これらによって、特定の協力者の画像がどのファイルにあるかを確認する助けになるだけでなく、ファイルサイズの確認により、万一画像情報が変更された場合のチェック機能を有することとなる。

画像の分析作業においては、これらの原簿に従って表3のような形の分析用管理簿が作成されることになる。コーダーは、データ管理担当者から分析部分のファイルが格納されているハードディスクを受け取る。それをパソコンに接続し、パソコンに必要部分をコピーする。そのうえで、コピーファイルを用いてコーディング作業に入ることになる。また、コーディング作業後には、このコピーファイルは完全に消去される。これらの画像データは、バックアップ用ディスクにミラー保存され、クラッシュ等への対応がなされている。

表 3 VR777からダウンロードした元情報ファイルの例

Subject ID	Contents	data size	data entry	Comment	Start time	End time	comment on observation sess					
4JJAB9H5	r5_050619_10215900_050619_104157_1110.mpeg	919,159,284 byte	2005/06/23 15:31:56	目は手袋を着用している	10:24:29	10:26:14						
	r5_050619_10215900_050619_104157_1100.mpeg	919,078,912バイト	2005/06/23 15:35:44									
	u5_050619_10415900_050619_104916_1110.mpeg	334,833,664バイト	2005/06/23 15:37:12									
	u5_050619_10415900_050619_104916_1100.mpeg	334,768,128バイト	2005/06/23 15:38:38									
4LJCK99G	r5_050619_13032600_050619_132326_1110.mpeg	919,468,032バイト	2005/08/19 16:37:54	認知発達実験の際、MGが「いまさら」など声かけや話しかけが随所にみられる	13:04:06	13:04:56	全くFPDがなく説明のすですぐにCSF0に移S中、助けすったのでSF0は1が椅子を動かさなければ実験のため不採用					
	r5_050619_13032600_050619_132326_1111.mpeg	919,451,648バイト	2005/08/19 16:34:04									
	u5_050619_13232700_050619_132745_1110.mpeg	197,722,112バイト	2005/08/19 16:39:46									
	u5_050619_13232700_050619_132745_1111.mpeg	197,761,024バイト	2005/08/19 16:38:48									
8ESAJNFN	mse00015-1.mpeg	919,334,912バイト	2005/06/21 9:28:48		14:18:31	14:18:55	だんだんと音声認識が続き、FPDとあやふやで、1が椅子を動かさなくなったところからFPDと					
	mse00015-2.mpeg	167,925,760バイト	2005/06/21 9:29:38									
	r5_050602_14155200_050602_143952_1111.mpeg	919,334,912バイト	2005/06/23 15:23:34									
	u5_050602_14395300_050602_143952_1111.mpeg	167,925,760バイト	2005/06/23 15:27:38									

このような分析用管理簿の作成によりコーディング作業におけるアクセスエラーなどが防げるものと考えている。しかしながら、このようなファイル管理システムにおいても問題が残っている。それは、縦断研究において顕著となる問題である。

2）多時点同時比較システムの検討

縦断研究では、特定の年齢の特定の場面での行動を同時に比較したい場合が起きてくる。例えば、観察室への入室時の子どもの緊張行動が年齢によってどのように変化してきたのかなどを見たい場合がそれにあたろう。このような多時点における行動の同時比較を可能とするため、武庫川チャイルドスタディでは映像管理ソフトであるフォトロ社製のPowerIndexを用いての画像管理を計画した。

今回多時点での画像データを同時再生するために用いたのは、PowerIndexである²⁾。これは、動画コンテンツにメタ情報としてその画面で生じているイベントの文字情報などを検索用のタグとして加えるPowerIndexUploadManagerとともに用いられる画像データベースソフトである。本来は画像情報のストリーミング配信ソフトであるが、武庫川チャイルドスタディにおいては、スタンドアローンで利用されるパソコン上に仮想サーバーを立ち上げ、サーバー上にある複数の画像データを、タグ情報によってアクセスし、多時点の任意の行動場面での画像を同時に提示可能としている。

サーバーとしてはDell社製のPowerEdge1900を用い、2TBのハードディスクに画像を格納すると同時に、外部にバックアップ用ドライブを設置し、夜間自動的にデータのバックアップを行うように設計されている。ファイル形式がWMV（Windows Media Player）であるため、VR777からのデータは、いったん変換された上で保存されることとなる。このソフト上では、任意の画像を2画面同時に再生でき、これにより時点間の観察場面の同時比較が可能となっている。

複数の画像データが格納されているためセキュリティ上の問題が生じる可能性がある。このため本研究では階層的な認証システムを組み込み、画像情報の変更可能権限、画像閲覧のみ権限などの管理制限を行っている。

図3は認証画面である。IDと認証番号によってアクセスレベルが確定する。



図3 入力画面

この後、タグ入力の場合には図4のような入力画面が提示され、画像を再生しながら、あらかじめ決められた検索情報と対応とする画面に対して行動コードやカテゴリー名を入力することとなる。この情報には自動的に時間情報も付けられており、マニュアルでの画面検索も可能となっている。検索は対象者の観察月齢とIDを入力することによりアクティブとなった画像を表示した後、検索したい行動を入力することによってなされる。同様の行動がいくつあるのか、またその場面がどこにあるのかについては、一覧によっても確認できるように設計され、簡便性を高めている（図5）。

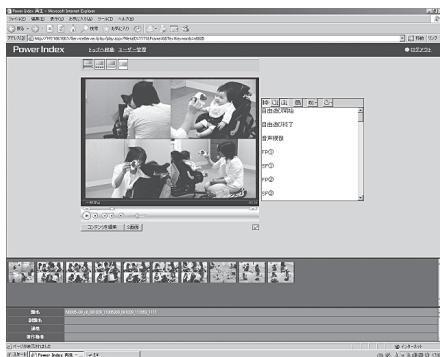


図4 画像へのタグ付け（協力者の許可を得て画像を掲載している）

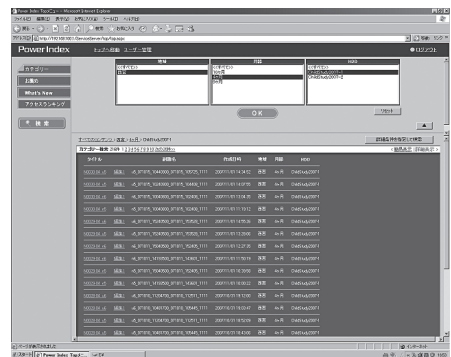


図5 行動の時系列データの例

今回の研究で用いられたタグ情報が表4に示されている。

表4 検索情報としてのタグ情報例

入室	抱き	泣き	ぐずり	積み木あそび	自由あそび
----	----	----	-----	--------	-------

図6は観察回数の異なる2回の観察を同一画面に表示したものである。左右の画面は時間的に同期させて再生することもできるが、通常は両方の画面は独立して再生されることが多い。



図6 時点の異なる画像の同時比較（協力者の許可を得て画像を掲載している）
おもちゃを介した相互作用場面を提示している。

これら研究への協力者のエントリーからデータ処理までの一連の手順をまとめたものが、図7である。個人を追跡する縦断研究では、各時点における観察もしくは調査においてデータ処理がなされるため予期せぬエラーが起きることが考えられる。これを回避する手段を検討するべく、本研究においては一連のデータ処理過程において機械管理を試みた。これは当初処理に人的資源が必要であるが、その後でのエラーは少なく、今後大規模コホートが実施される際にも有効であると考えられる。

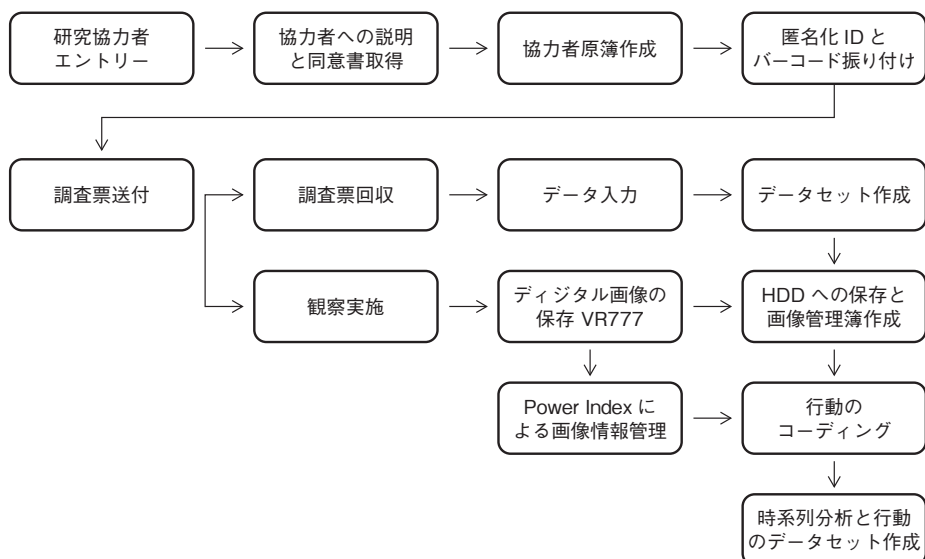


図7 エントリーからデータ解析までのプロセス図

(3) 画像情報の量化方法と分析手法の検討

1) 画像解析手法

今回の縦断研究では、発達初期からの観察室内における母子相互作用の様子が記録され、前方視的に蓄積してゆくことがその特徴としてあげられていた。このような観察データについては、これまでの多くの研究においては関係性などに代表されるような特定の視点から全体の印象を評価する方法がとられてきた。しかしながら、このような印象評定においては、評価の妥当性や信頼性が問題となる。また、何らかの理由から画像そのものを恒久的に保存できないような場合には、画像破棄後における妥当性確認だけでなく、新たな視点からの再分析は不可能となる。

本研究では、母子間の関係性を分析する視点として、比較的透明性の高い行動レベルでのマイクロ分析（河合、1992）を用いることとした。マイクロ分析では、透明性の高い観察可能な行動ユニットについて、その行動が生起しているかないかを、1/0データとして記録し、その時系列的な変化を量的に示そうとするものである。分析は、観察場面の評定のように、全体が作り出す印象ではなく、特定の行動が生じているかどうかをイベントレコーダーによって記録し、そのオンとオフの状況を量化しようとするものである。このことによってコーディングの信頼性は飛躍的に高くなるだけでなく、同時に多くの評定者がコーディング作業に携わることが可能となる。これらの行動ユニットの組み合わせとしてより上位の概念的行動がコーディング後に可能となる。

コーディング作業の概念図が図8に示されている。

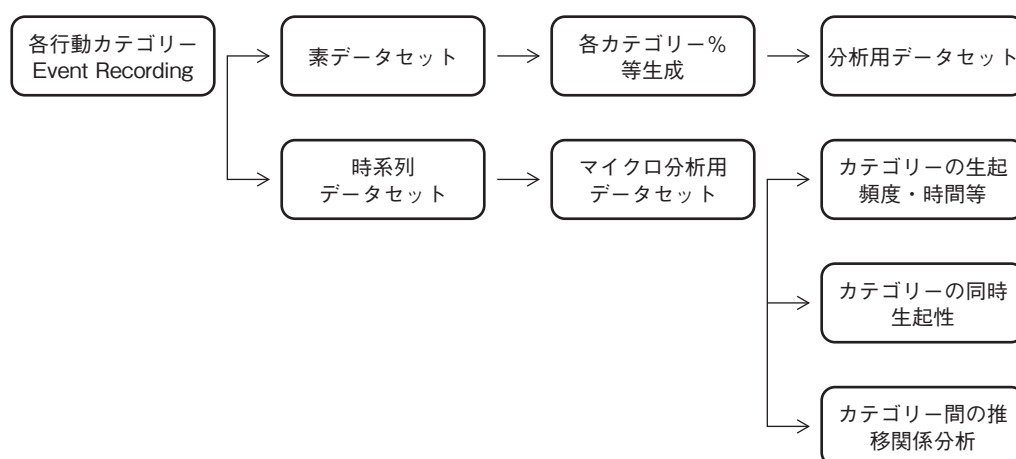


図8 画像解析の手順

2) イベントレコーディングの概要

今回の縦断研究では観察室における母子の相互作用場面が記録されている。このような

観察場面の評価には先に述べたように、印象評定やエインズワースのストレンジシチュエーション（cf. Ainsworth, M. D. S., et al. (1978)）のように特定の行動が出現するかどうかに基づいた判定が用いられることが多い。我々の研究グループでは、母子の観察可能な行動ユニットを単位として、それらの時系列的な変化を、行動が生起しているかどうかを基準として記録し、それらの組み合わせから行動の意味づけを行う、マイクロ分析を適用した。

観察場面での行動は、コーディングカテゴリーとよばれる、行動の要素からなりたっているチェックリストに従ってコーディングされることになる。表5はコーディングカテゴリーの例である。モードは、分析の単位を示しておりそれを構成するイベントから成り

表5 本研究で用いられたコーディングカテゴリーの例
カテゴリーは観察される行動と対応しており相互背反的である。
モードはカテゴリーの上位の行動ユニットであり同時生起する。

Mode	Category	Description
Facial Expression	Positive Negative Frown Neutral Other	
Vocal	On Off	
Mouth	On Off	
Body	Normal Right Left Lean Back	
Arm (right/left)	Normal Reaching	
Hand (right/left)	Mouth Face Body	
Leg (right/left)	Cloth Other Hand Other	
Head	Normal Right Left Front	
Gaze	Mother Self Right Left Up Down Other	

立っている。同一モード内のカテゴリーは同時に生じない相互背反的なものからなりたっている。従って、視線と表情と姿勢というモードは同時に生起するが、視線モードの中の母親を見るというイベントと玩具を見るというイベントは同時に生起しないことになる。

イベントレコーダーが、これらのカテゴリーの生起の有無を時間データと共に記録するために作成された。記録される情報を概念的に図示したものが図8である。図は任意の行動カテゴリーがオン（1）になった時間（0：00）とオフ（0）になった時間（1：00）、同じくオン（1）になった時間（2：00）とオフ（0）になった時間（4：00）を示している。この場合、カテゴリーの生起頻度は2回で、総生起時間は3秒ということになる。各行動カテゴリーについて同様の記録がなされることになる。

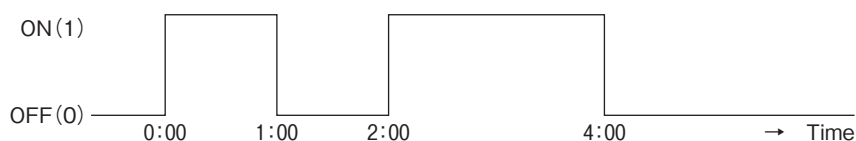


図8 イベントレコーダーの基本的な記録形式

イベントレコーダーは、研究プロジェクトがスタートした2004～2005年にかけて、京都文教大学行廣隆次准教授によって作成され、使用に合わせた調整がなされた。

プログラムは Borland Delphi Professional Version 7.0 (Copyright(c) 1983-2002 Borland Software Corporation) を用いて Windows XP Professional 上で開発された。このソフトでは、パソコンの任意のキーに対して行動カテゴリーが割り当てられ、そのキーの on/off の状態が10ms. の精度でチェックされるようになっている。キーの割り振りは、各コーダーの操作性が最大でかつ、誤入力を最小にするために調整可能なように設計されている。時間測定は Windows のマルチメディアタイマーを使用し、timeSetEvent 関数によって時間フレームの制御がなされ、1 秒ごとに割り込みイベントを定義し、指定秒間隔でフレームを更新するようにセットされている。時間精度は、システムのマルチメディアタイマーの精度に依存するため、タイマースピード調整用のルーチン作業をパソコンにインストールする際に実施している。キーの on/off 時間の記録は timeGetTime 関数を用いて行っている。これらの素データの記録例が表6と表7に示されている。

表6 キー操作に対応した1/0データ出力

	bf-s	bf-c	bf-fr	bf-de	bf-in	bf-oth
1	0	0	0	1	0	0
2	1	0	0	1	0	0
3	0	0	0	1	0	0
4	0	0	0	1	0	0
5	0	0	0	1	0	0
6	0	0	0	1	0	0
7	0	0	0	1	0	0
8	1	0	0	1	0	0
9	0	0	0	1	0	0
10	0	0	0	1	0	0
11	0	0	0	1	0	0
12	0	0	0	1	0	0
13	0	0	0	1	0	0
14	0	0	0	1	0	0
15	1	0	0	1	0	0

表7 カテゴリーがマージされた、モードレベルでのイベントレコード

0.07	on	bf-de
6.63	off	bf-de
6.68	on	bf-s
7.13	off	bf-s
7.21	on	bf-de
36.22	off	bf-de
36.27	on	bf-s
37.54	off	bf-s
37.75	on	bf-de
70	off	bf-de
70.07	on	bf-s
73.32	off	bf-s
73.42	on	bf-de
80.9	off	bf-de
80.94	on	bf-s
82.06	off	bf-s

このプログラムでは、さらに研究者が指定した時間間隔をフレームとして行動カテゴリーの生起回数と時間を記録するサブプログラムも組み込まれている。これにより、入力直後の評価と検討が可能となっている。

プログラムはあらかじめ決められたスタートキーを押すことによってスタートし、エンドキーを押すことによって終了とセーブが行われる。

3) マイクロ分析

今回の研究においては、画像からのデータ生成とその再分析可能性が検討されている。これは、画像データそのものが個人情報保護の観点から、研究終了後に破棄される可能性があるためであった。全体からの評価結果は、その画像そのものが無くなると再評価することが難しくなる。これに比べて、行動の要素を1/0で記録してゆく方法では、コーディングの透明性が確保されるとともに、時系列的な関係性を含めたデータ記録が残されるというメリットがある。我々は、イベントレコーダーによって生成された一時データを用いてそれらの時系列的解析を行うため、Madap (Micro-Analytic Data Analysis Package) を用いることとした。このソフトは1985年に作成されたものであるが、カテゴリー間の推移確率など時系列的分析が可能であるということだけでなく、一度コーディングされた複数のカテゴリーを、後にさらに組み合わせることによって新しいカテゴリーの生成が可能であることなどの利点を有している。これらの点から、発達グループでは、研究終了後に画像が使えなくなっても場面の再現が一定の範囲で可能であり、汎用性のあるデータセットを構築することが可能であるこのソフトを用いて、2次的データ解析を進めた。

解析用データセットは、イベントレコーダーによって記録されたデータのスタート時間

とエンド時間を観察の原簿により統一し、それらを1つのマージファイルとして記録される。これらの例が表8に示されている。

表8 イベントデータとマージデータの例

時間, 右手(モード)-行動(カテゴリー)	2つのモードのマージデータ
0.00, rh-expl	2: モード数
10.80, rh-rest	0: スタート時間
12.05, rh-pull	"*e-obj" e-objがオン
13.57, rh-gras	"*m-rest"
18.50, rh-rest	1.99
19.85, rh-gras	" e-obj"
20.23, rh-pull	"*m-voc" mがvocに変
22.07, rh-gras	2.49
23.52, rh-pull	" e-obj"
25.20, rh-gras	"*m-rest" mがrestに変
29.18, rh-pull	3.11
30.17, rh-rest	" e-obj"
31.15, rh-gras	" m-rest"
34.05, rh-pull	途中経過を削除
34.92, rh-rest	66.67
35.97, rh-expl	"*e-end"
41.67, rh-gras	"*m-end"
49.88, rh-expl	
60.00, rh-end	

今回の分析用指標として各カテゴリーについて、以下の

- Frequency : 生起頻度
- Total duration : 総生起時間
- Average duration : 平均生起時間
- Rate of occurrence : 1分あたりの生起頻度
- Proportion of session : 全観察時間に占める割合

が、算出された。また、カテゴリー間の相互関係については、

- Duration of Co-occurrence : 同時生起の時間
- Co-occurrence Measure : 観測された2つのカテゴリーの同時生起についての期待値と実測値を用いて算出される。
- Lag : カテゴリー間の時間差

が、算出された。このような行動解析の有効性については河合(1992)にも示されているが、表10に示されているように、母子間の行動連鎖の分析は相互作用についての因果関係を明らかにしてくれる。表9の例では、条件付き確率についての検定結果は $\chi^2=1501$ ($P<.001$)となり、親の微笑みとその前の子どもの発声と統計的に有意な関係にあることが示されている。このような関係性は、全体的な印象としてはポジティブな関係性という

ことになるが、それが子どもの発声の後に続いているということが明らかになったのである。

表9 行動の連関（ ）は条件付き確率

子どもの 先行行動 (発声)	後続行動（母親の行動）		計
	微笑あり	微笑なし	
	あり	なし	
あり	85(.85)	15(.15)	100
なし	15(.01)	2000(.99)	2015
	100	2015	2115

今回の研究では、これらの行動解析の手法を用いて関係性を量的に記述する試みがなされ、一定の成果が示され始めている。

3) 評定者間の信頼性について

行動評価においては、評定者間の一致率が重要となる。評定者が同じ行動を取りだしているかについて、今回の研究では任意の画像を用いて評定者間の信頼チェックがなされている。表10は、2名の評定者のカテゴリー A1～A3のコーディング数を示したものである。この場合の一致率は、評定者ⅠとⅡが同一の評定をしているマトリックスの対角要素の合計が全観察回数に対してどれくらいであるかによって示される。この場合 $(42+25+25)/100$ となり、92% が一致率となる。しかしながら、両者が偶然に一致する可能性もある。チャンスレベルでの一致率を P_c とすると、この場合は、 $P_c = (42 \times 47 + 27 \times 28 + 31 \times 25) / (100 \times 100) = 0.3505$ となる。このような偶然の一致率を考慮にしたものがコーエンのカッパ（ κ ）である（Cohen, 1960）。コーエンの κ は実際に観察された一致率と偶然の一致率の比が問題となる $[\kappa = (Po - Pc) / (1 - Pc)]$ 。この場合、 $\kappa = (.92 - .35) / (1 - .35) = .87$ となる。フレイスらによると、 κ の値が .75 以上であれば一致率が高いとされている（Fleiss, et. al., 1969）。今回のコーディングにおいては、随時評定者間の一致率がチェックされ、一致率が保たれるように確認作業がとられている。

表10 2名の評定者の評定結果数
評定者Ⅰ

評定者Ⅱ	カテゴリー	B1	B1	B1	計
	B1	42	0	0	42
	B1	2	25	0	27
	B1	3	3	25	31
	計	47	28	25	100

4) 観察場面のデータ化にむけて

これまで、今回の縦断研究において用いられてきたデータ収集から解析までの方法を整理してきた。手続きの詳細については各操作マニュアルを作成中であるが、画像の保存が困難であるとき、母子の行動を可能な限り再現できることが望まれる。今回の行動要素の組み合わせとして相互作用場面を復元する試みは、その一つの試みでもある。

現在、学齢期まで追跡可能であるデータについて、優先的にデータセットの作成が進められている。これらは完全匿名化が可能であり、将来発達研究者の共同利用が可能となる。行動観察は時間を経ても情報量が大きく、遡及的な研究の可能性も持っている。しかしながらアナログ記録に頼っていた時代においてはその記録方法とアクセス方法、それらの解析方法など多くの問題があり、実用的ではなかった。近年のハードディスク容量の増加や画像処理の高速化にともない、数量的データセット化への道も広がってきている。

今回の試みは、その規模が数百であるが、大規模コホートにおいての実装可能性は高いと考えられる。今後、これらのデータセットへのアクセスに関してのセキュリティなどの問題が残っているが、データ共有への可能性も高いと考えられ、実用化にむけての期待が高くなっていると言えよう。

3. まとめ

本報告は、縦断研究において問題となる個人情報保護の問題や、画像情報の管理とその数量化に関する試験的な取り組みについてまとめたものである。JCSは、大規模コホート研究のパイロット研究という意味付けも持っており、様々な研究技法の開発もその重要な使命となっていた。研究協力者は全サイトを合計すると500名にのぼり、その発達データとしての価値もさわめて高いものであった。

ここで述べられたような方法は、その成果が示しているように、実装可能なものであり、今後の縦断研究に活用できるものであると考えられる。

JSTによる縦断研究は2009年3月末で終了したが、2009年4月よりは武庫川女子大学子ども発達科学研究センターにおける研究として、科学研究費基盤研究(A)の補助を受けながら継続されており、ここで開発された技術はさらに活かされながら発展し続けている。

今後、さらに今回の報告を発展させた形での方法の開発を進める予定である。

4. 文献

- 1) Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., and Wall. S. (1978) Patterns of

attachment. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

- 2) Cohen, J. (1960) A coefficient of agreement for nominal scales. Educational and Psychological Measurement, 20, 37-46.
- 3) Fleiss, J. L., Cohen, J., and Everitt, B. S. (1969) Large sample standard errors of kappa and weighted kappa. Psychological Bulletin, 72, 323-327.
- 4) Fogel, A., Garvey, A., Hsu, H. C., and Storming, D. W., (2006) Change Processes in Relationships: A Relational-Historical Research Approach Cambridge University Press.
- 5) 河合優年 (1992) マイクロアナリシス 発達心理学ハンドブック 東洋・他(偏)金子書房 1201-1213。
- 6) 三宅和夫・高橋恵子 (2009) 縦断研究の挑戦：発達を理解するために 金子書房。
- 7) U. S. Department of Health and Human Services (2004) Growing Up Healthy: An overview of the National Children's Study.

注

- 1 「バーコード入門 Barcode Handbook 1」。株式会社テクニカル (2001年)。(2010年3月1日現在：<http://www.technical.jp/index.html>)。
- 2 「PoweIndex Ver. 2 ユーザーズマニュアル」。株式会社 Photoron (2005年)。

IV. 研究業績

(1) 2009年

- 1) 河合優年・難波久美子・JCS (2009) 母子相互作用のパターンが子どもの社会性の発達に与える影響について(3)——マイクロ分析による4・9ヶ月・18ヶ月児の行動カテゴリーの発達の傾向について——. 日本心理学会第73回大会論文集、P. 1137. (立命館大学、8月)
- 2) 難波久美子・河合優年・JCS (2009) 児の言語・社会性発達と母親の発話・育児ストレスとの関連——4ヶ月齢における字のない絵本を介した母子相互作用場面を用いて——. 日本心理学会第73回大会論文集、P. 1202. (立命館大学、8月)

(2) 掲載・発表予定

- 1) 河合優年・難波久美子 (2010) 母子のコミュニケーション・パターンの発達の变化(2)——KIDS得点との関連——. 日本発達心理学会第21回大会論文集 P. 361. (神戸国際会議場、3月)
- 2) Kawai, M., Namba, K., Yato, Y., Negayama, K., Sogon, S., Yamamoto, H. & Japan Children's Study Group (2010) Developmental trends in mother-infant interaction from 4-months to 42-months: Using an observation technique. *Journal of Epidemiology*.
- 3) 難波久美子・河合優年 (2010) 母子のコミュニケーション・パターンの発達の变化(1)——おもちゃを介した母子相互作用場面の表情・視線・発声によるパターン抽出——. 日本発達心理学会第21回大会論文集 P. 360. (神戸国際会議場、3月)
- 4) Negayama, K., Kawai, M., Yamamoto, H., Tomiwa, K., Sakakihara, Y. & Japan Children's Study Group (2010) Behavioral development of infant-holding and its laterality in relation to mothers' handedness and child-care attitude. *Infant Behavior & Development*, 33, 68-78.
- 5) Yamakawa, N., Koike, H., Ohtani, N., Bonno, M., Tanaka, S., Ido, M., Komada, Y., Kawai, M., Yamamoto, H. & Japan Children's Study Group (2010) Mission in Sukusuku Cohort, Mie: Focusing on the feasibility and validity of methods for enrolling and retaining participants. *Journal of Epidemiology*.
- 6) Yato, Y., Tanaka, D., Shinohara, R., Sugisawa, Y., Tanaka, E., Tong, L., Yamakawa, N., Anme, T., Kawai, M., Maeda, T. & Japan Children's Study Group (2010) Infant Responses to Maternal Still Face at 9 Months predict Social

Abilities at 18 Months. *Journal of Epidemiology*.

2008年度

研究員の業績および特別研究の経過報告

(2008年4月～2009年3月)

▶学会活動

日本教育社会学会（評議員、2005－現在）、日本社会教育学会、日本教育学会

▶社会的活動

尼崎市社会教育委員

▶著書

共著 2008年11月 八並光俊・國分康孝編集「新生徒指導ガイド」第8章－7「危機対応・危機介入」 図書文化（pp.156-159）

▶研究論文

単著 2008年4月号「生徒指導における地域・関係機関等との行動連携のあり方」別冊教職研修 教育開発研究所（pp.37-39）

単著 2009年3月号「いじめの現状と生徒指導の課題」別冊教職研修 教育開発研究所（pp.26-28）

単著 2008年6月号「危機介入・危機対応の考え方・進め方」児童心理 金子書房（pp.102-107）

▶学会活動

学会発表

共同 2008年11月24日 「看護師のコミュニケーションスキルの実態調査」日本カウンセリング学会第41回大会（筑波大学）

学会役職

日本カウンセリング学会理事

日本カウンセリング学会編集委員会常任理事

日本生徒指導学会理事

▶教育活動

大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター運営委員

産業カウンセラー資格認定評価専門委員（日本産業カウンセリング協会）

独立行政法人教員研修センター講師「管理職・中堅教員研修講座」（茨城県つくば市）

兵庫県立こどもの館講師「家庭教育相談員養成講座」

姫路市立生涯学習大学講師

兵庫県立神出学園運営協議会委員

▶著書

共著 2008年6月「心理学におけるダイナミカルシステム理論」金子書房、pp.26-50, pp.53-64, pp.65-81, pp.180-181

共著 2009年2月「縦断研究の挑戦—発達を理解するために」金子書房 3章 母子交渉と発達—短期縦断研究の結果から見えてくるもの、pp.71-87

▶研究論文

共著 2008年10月「Behavioral development of infant holding and its laterality in relation with mothers' handedness and mothering」『Infant behavior and development』

▶その他研究業績

講演 単独 2008年6月「医療従事者の精神衛生について」独立行政法人国立病院機構三重中央医療センター 管理課2階 地域医療研修センター

講演 単独 2008年6月「看護師のストレスマネジメントについて」兵庫県看護協会摂丹支部
講演会 兵庫県篠山市立篠山市民センター

講演 単独 2008年6月「育児を科学する」第10回日本母性小児看護学会 学術講演 大阪大学中之島センター 10階メモリアルホール

講演 単独 2008年7月「子どもの育ちと環境」全国病児保育研究大会 in 三重 手をつなごう、病児保育と共に 究極の子育て支援を目指して プログラム・抄録集 全国病児保育協議会 主催 四日市市文化会館

講演 単独 2008年7月「変容する子どもたち」西宮市立子育て総合センター 第2回幼稚園教育研修会

シンポジスト 単独 2009年2月「子どもの発達を支えるもの：子ども達の明日に向けて」日本のこどもの発達コホート研究 第6回都島すすくすフォーラム

▶学会活動

共同 2008年7月「The Relationships between Parents' Attitudes toward Controlling their Child and the Child's Sociability」20th BIENNIAL ISSBD MEETING pp.668 International Society for the Study of Behavioural Development (ISSBD) ポスター発表

共同 2008年9月「母子相互作用のパターンが子どもの社会性の発達に与える影響について (1)母親の音声的な働きかけと表情による働きかけからの検討」日本心理学会第72回大会 ポスター発表

共同 2008年9月「母子相互作用のパターンが子どもの社会性の発達に与える影響について (2)マイクロ分析による4・9ヶ月の母子相互作用パターンと18ヶ月児の社会性との関係性について」日本心理学会第72回大会発表論文集 ポスター発表

▶社会的活動

「県立芦屋国際中等教育学校教科書用図書選定委員会」委員 県立芦屋国際中等教育学校

「子どもの徳育に関する懇談会」委員 文部科学省初等中等教育局児童生徒課企画係

▶2008年度特別研究の経過報告

テーマ①幼児期のストレス反応に関する研究

本研究は、平成18年度に開始され、ストレスがどのようなリズムを持っているのか、幼稚園や保育園での行事や家庭環境とどのように関係しているのかなどについて、定量的研究を行っている。平成20年度は小花和 W. 尚子准教授と田嶋恭江准教授と幼児の生活リズムやストレスと養育者のストレス観などについての調査がなされた。これらの結果の一部は、発達心理学会において報告されている。

テーマ②西宮市における乳幼児発達研究

西宮市におけるコホートは、武庫川女子大学におけるパイロットグループ56組の母子と、全市を対象とした10ヶ月児およそ5000名の全数調査からなっている。観察群は20年度に2歳半となり、調査票、行動観察等の分析がすすめられている。全数調査群については、保健所との協同事業として対象の中からリスク群を抽出し、保健所での面接評価が加えられた。全体的な検討にはまだ至っていないが、医師による評価との並存的な妥当性が調べられている。調査研究の一部は、西宮市小児科医会において報告されている。

テーマ③デジタル映像の研究・教育処理支援システムの構築

平成19年度に開始された本研究は、デジタル情報としてパソコンに記録された複数の動画情報の管理とインターネット上での共同利用を目的として開始された。本年度は、動画の流れ（スクリプト）をパワーインデックスにおけるタグとして利用できるように、タグ情報の階層化、複数画面の同時アクセス・再生のための修正などが行われた。セキュリティを含めた、ネット上での公開の方法について検討が開始されている。

安 東 由 則（あんど う よしのり） 准教授

▶研究論文

単著 2009年3月「『女子大学』に関する意見の因子分析：女子学生への調査と他大学調査との比較」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）39号、1-29頁

単著 2009年3月「明治期における中学校校友会の創設と発展の概観」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）39号、31-57頁

▶学会活動

日本教育社会学会、日本高等教育学会、日本子ども社会学会、他

▶社会的活動

芦屋市社会教育委員

▶2008年度特別研究の経過報告

テーマ：「女子大学および短期大学に対する期待とその検討」

昨年度までの、女子大学と短期大学に関する研究を継続して行った。女子大学および短期大学に関する資料・文献の収集およびデータ入力、さらにこれまで蓄積した既存データの分析を実施した。データ入力については、過去の論文等に表れた女子大学に関する言説をピックアップし整理する作業を、アルバイトの手助けを借りて行った。データ分析に関しては、本学学生に対するアンケート調査を再分析し、他大学の調査結果と比較するなどして、本学の特徴を探った。結果は上記の「女子大学に関する意見の因子分析」としてまとめ、『研究レポート』39号に掲載した。

上 田 孝 俊 (うえだ こうしゅん) 准教授

▶著書・報告書

共著 2008年11月『戦後滋賀の教育のあゆみ—民間の実践を中心に』滋賀県民主教育研究所、pp.12-15

単著 2009年3月『滋賀県教育会雑誌目次一覧』武庫川女子大学教育研究所、全151頁

▶研究論文

単著 2009年3月「教育的な人間関係についての一考察」『臨床教育学研究』第15号、pp.1-13

▶学会活動

所属学会：全国社会科教育学会、日本教育学会、日本教師教育学会、武庫川臨床教育学会（事務局長、2008年～）

学会発表：2008年9月、日本教師教育学会第18回研究大会 自由研究発表「社会人大学院における『経験を語る』ことを中心に於いた授業の試み」

▶社会的活動

西宮市立浜甲子園中学校、滋賀県日野町立桜谷小学校などの校内研究会へ研究協力

▶その他研究活動

・「教育的な人間関係についての検討」

生徒指導における教師と生徒との関係を同化と異化の統合過程としてとらえ、「反抗」の成長における意味の検討と、発達を支援する者の反省的態度と成長の課題を検討した。

結果は、上記研究論文「教育的な人間関係についての一考察」に掲載した。

・「滋賀県教育史研究の資料整備と研究課題」

滋賀県内および筑波大学、東京大学、早稲田大学において史料調査し、明治から昭和前期にかけての滋賀県教育会雑誌の目次一覧を作成した。

その資料と資料から断片的にうかがえる研究課題について分析し、上記『滋賀県教育会雑誌目次一覧』を公刊した。

武庫川女子大学教育研究所研究レポート

掲載論文総目次（過去10号分）

第30号～第39号

◇第30号（2003年10月）

〈特集〉中高一貫教育

- 中高一貫教育の現状と展望（Ⅱ）……………（河合優年）…………… 1 - 22
- 私立大学における入試倍率の規定要因分析（Ⅰ）
- 1990年～1995年の比較分析— ……………（安東由則）…………… 23 - 45
- 大学教育活動における危機管理の研究
- 危機管理構築のためのマニュアル作成—
- ……………（野老 稔・相澤 徹・橋爪静夫・田中繁宏・伊達萬里子・
- 會田 宏・小柳好生・中村真理子）…………… 47 - 65
- 授業「スキー実習」に関する研究Ⅴ
- スキー実習における危機管理体制の確立に関する研究：その1 失敗情報収集の試み—
- ……………（會田 宏・野老 稔・相澤 徹・中西 匠）…………… 67 - 83

◇第31号（2004年3月）

〈特集〉大学における教職課程

- 高等教育カリキュラム開発研究への教育学的アプローチ
- 大学教職諸課程の構造的連結化論の探究— ……………（前原健三）…………… 1 - 31
- 教職課程へ「心の教育」を取り入れる意義とその検討
- 「生徒・進路指導」と「教育相談」をめぐって— ……………（西井克泰）…………… 33 - 48
- 私立大学における入試倍率の規定要因分析（Ⅱ）
- 1990、1995、2000年の比較分析— ……………（安東由則）…………… 49 - 65
- 現代心理学研究におけるセールス・ポイントの推移（その1）
- 自分史のアカデミック面に代えて— ……………（祐宗省三）…………… 67 - 83

◇第32号（2004年7月）

〈特集〉教育研究所創設20周年記念号

- 最近4半世紀における日本教育の動向……………（新堀通也）…………… 1 - 100

私立大学における入試倍率の規定要因（Ⅲ）

—1990、1995、2000年度入試の地域比較— ……（安東由則） …… 101 - 128

◇第33号（2005年3月）

〈特集〉新堀通也先生退職記念号

わが研究の軌跡

—ある教育研究者の「自分史」— ……（新堀通也） …… 1 - 71

現代心理学研究におけるセールス・ポイントの推移（その2）

—自分史のアカデミック面に代えて— ……（祐宗省三） …… 73 - 95

「生徒・進路指導」における体験的学習の展開

—教職課程科目へ「心の教育」を取り入れた授業の実例— ……（西井克泰） …… 97 - 114

GPA の効果的運用に関する検討（その1）

—アメリカにおける GPA の現状— ……（出野 務・安達一美） …… 115 - 128

“理科嫌い”であった学生が受けた理科授業の印象

—女子大学学生と共学大学学生の比較— ……（出野 務） …… 129 - 137

日本の女子大学に関する研究（Ⅰ）

—戦後における女子大学の創設と変化の概観— ……（安東由則） …… 139 - 164

◇第34号（2005年11月）

〈特集〉GPA の運用検討

GPA の効果的運用に関する検討（その2）

—わが国の大学における GPA 活用の事例—

……………（出野 務・安達一美・稲積包則） …… 1 - 14

GPA の効果的運用に関する検討（その3）

—武庫川女子大学・同短期大学部における成績評価としての GPA の実態—

……………（出野 務・安達一美・稲積包則） …… 15 - 25

現代心理学研究におけるセールス・ポイントの推移（その3）

—自分史のアカデミック面に代えて— ……（祐宗省三） …… 27 - 38

女子大学および女子学生に関するデータと解説

……………（安東由則・藤村真理子・大竹綾子） …… 39 - 110

◇第35号（2006年3月）

〈特集〉女子大学の現状と課題

女子大学の現状と今後の課題

一河合塾・滝紀子先生を招いての研究会記録ー……（友田泰正・安東由則）……	1 - 38
女子大学学生寮に関する研究（Ⅰ）………（小林 剛）………	39 - 71
戦後における女子大学・女子学生関連文献目録集 ………（安東由則・鎮 朋子・末吉ちあき）………	73 - 111

◇第36号（2006年11月）

〈特集〉新堀通也先生退職記念最終講義／女子大学研究

教育研究の60年

一分析図表の提唱ー………（新堀通也）………	1 - 35
「女子大学」に関する女子学生の意見調査 一2005年度武庫川女子大学4年次生アンケートからー ………（安東由則・藤村真理子・難波満里子）………	37 - 84
35年間ににおける私立女子大学の偏差値推移 一文学系学部と家政系学部の事例からー………（安東由則・末吉ちあき）………	85 - 116
日本の女子大学に関する研究（Ⅱ） 一クラスター分析による分類の試みー………（安東由則）………	117 - 130
GPAの効果的運用に関する検討（その4） 一GPAによる成績上位者と下位者の実態ー ………（出野 務・安達一美・稲積包則）………	131 - 139

◇第37号（2007年3月）

〈特集〉女子大学研究

アメリカにおける女子大学の現状と津田塾大学の取り組み

………（高橋裕子）（友田泰正・安東由則編）………	1 - 21
--------------------------	--------

女子大学に個性を

一生き残りへの挑戦ー………（内田伸子）（友田泰正・安東由則編）………	23 - 39
------------------------------------	---------

女子大学インタビュー安東由則（編）

（藤女子大学・昭和女子大学・津田塾大学・東京女子大学・広島女学院大学）………	41 - 154
武庫川女子大学に関する保護者への意見調査 一2006年度4年次生保護者アンケートからー ………（安東由則・藤村真理子・難波満里子）………	155 - 196
女子大学学生寮に関する研究（Ⅱ）………（小林 剛）………	197 - 211

ターミナルケアから学ぶ生と死

—ユーモアのすすめ— (アルフォンス・デーケン) 213-232

◇第38号 (2008年 3 月)

〈特集〉教育の潮流／女子大学研究

教育の潮流観測

—最終講義資料— (新堀通也) 1-119

女子大学の自己像

—大学案内パンフレットと自己点検・評価報告書の分析から—

..... (安東由則・鎮 朋子) 121-156

女子大学学生寮に関する研究 (Ⅲ)

—在寮生の保護者・退寮生・在寮経験をもつ卒業生への意識調査を中心に—

..... (小林 剛) 157-183

GPA の効果的運用に関する検討 (その 5)

—1 年次から 2 年次への GPA の変化—

..... (出 野務・安達一美・稲積包則) 185-194

◇第39号 (2009年 3 月)

〈特集〉女子大学に関する調査の比較

「女子大学」に関する意見の因子分析

—女子学生への調査と他大学調査との比較— (安東由則) 1-29

明治期における中学校校友会の創設と発展の概観 (安東由則) 31-57

新堀通也寄贈図書目録 (新堀通也) 59-110

編 集	武庫川女子大学教育研究所
編集委員	友田 泰正 ・ 安東 由則 難波久美子 ・ 末吉ちあき
発 行 者	学校法人 武庫川学院 〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6 番46号
発 行 日	2010年 3 月31日
印 刷	大和出版印刷株式会社